の爲京へ上る。大分の用なれば、中拂ひの間にあふ樣に歸るは不定。最前の金でそなたの算用合も仕舞ひ、河庄が所へも後の月見の拂といふて、四ッ百五十匁請取とつて給らふしと、福島の西悅坊が佛壇買うた奉加、銀一枚回向しやれと遣つてたも。其外に懸り合は、ハア夫よ〳〵、磯市が花銀五、是ばかりじや仕舞うて寢やれ。さらば〳〵戻つて逢はふ」と、二足三足行くより早く立歸り、「脇差忘れたちやつと〳〵。なんと傳兵衛、町人はこゝが心易い。侍なれば其儘切腹するであろの」傳「我ら預かつて置いてとんと失念。小刀も揃ふた」と、渡せば取てしつかとさし、治「是さへあれば千人力。もふ休みやれ」と立歸る。「追付けお下りなさりませ。よう御座りま」もそこ〳〵に、跡は樞をごつとりと、物音もなく鎭まれり。

【註】○八つと七つ—丁度午前の二時が(丑の時にて)八つにあたり、三時が八つ半時、四時が七つ時(寅の時)にあたる。此間が一ときにて茶釜も煮えず休んでゐるといふのだ。○短檠—低き燈臺。燭臺の低いもの。○沙汰なし—沙汰をして、即ちしらせて。○括られる—歸されぬことになつてはなされぬ。作者如何にもうまくごま化させてゐる。○中拂—此頃は六十日毎に拂をする習であつた。即ち中拂は盆と大晦日の中間の拂ひ。○不定—確かでない。○四つ百五十匁—四寶銀百五十匁。○給らうしと—「しと」は口の内でこれもあゝしてもらはうしといふ風にいつてる時の調子で出る音。○福島の西悅坊—且那寺なるべし。○奉加—奉納の金。○銀一枚—一朱銀のことでなく丁銀一枚。○回向—佛事をして死者を吊ふこと。○磯市が花銀五つ…磯市は幇間の名。花銀の花は祝儀の意。五つといふのは小粒の豆銀五個のこと。○是ばかりぢや—氣にかゝるのはこれだけぢや。○ちやつと〳〵ちよつと〳〵、早く〳〵。○おつ付けお下り—またおいでなされませ。○ようござりま—どざりました。ますと間もなくにかく。當時の此社會の言葉。○樞—くるゝ、即ち戸のさん。おとし。

【譯】茶屋の茶釜は殆んどのべつに沸いてゐて、休むといへば夜の一とき、八つと七つの間、即ち二時から四時の間で、その間に、ちらつく低い燭臺の光は細くなつて、夜更の川風は寒く霜がもう一ぱいである。治兵衛やがて歸らうとすると、主人傳兵衛が起きて、「まだ夜のあけるには間がありまして、深夜でござります。誰かにお送りさせましよ。これ女共治兵衛樣のお歸りぢやぞ、小春樣を起すがよい、それ呼んで來るがよい」といふ。治兵衛は潛り戸をがさとあけて「これ〳〵傳兵衛、小春に知らせて耳へ入れては、夜明まで引とめられて、また歸されぬことになる。だから、よう寐させておいて、私しは小春の知らぬ間に歸りたいと、拔けて出たのぢや。日が出てから起していなしてやりや。私は今から歸ると、すぐに買物に京まで上つて來る。ところが大分の用事があるから、中の拂ひの間に合ふやうには歸れるか歸れぬか分らぬ。だから先程渡した金で、こちらの算用もしまつて、河庄のうちへも、先月の月見の拂だというて四寶銀百五十匁やつて、受取り證をとつておいてもらはうしと、それから、福島の西悅坊が佛壇を買ふた奉納としては、銀一枚だけやつて、回向しやれといつて下され。その他に殘つてゐる懸り合といつては、はあそれ〳〵磯市に借りてをる花代が五つほどある、これ丈けぢや、拂つてやつて下され。さ、もうしもうて寐やれ。さらばぢや、京から戻つたら又逢ひに來う」といつて、二三歩行くなりまたすぐに歸つて、「脇差しを忘れた。早く〳〵出しておくれ。のう傳兵衛、大事なものを忘れてもそこは町人のことぢや、それほど恥しくもない心配はいらぬ。武士であつたら、腰のものを忘れでもしては切腹でもするだろがな」。傳兵衛「私がお預りしておいて、とんと失念しました。これで小刀も揃うてをります」。といつて脇差を渡すと、受とつてしつかりと差して、「これがあれば千人力の意氣が出る、もう休みやれや」といつて立歸る。「また間もなくおいで下さりませ。よう御出で下さりました」の聲もそこ〳〵に聞えて、あとに戸のさんをごとりと落すと、やがて物音もなく靜まつてしまつた。

治兵衛はつゝと去ぬる顏。又引かへす忍び足、大和屋の戸に縋り、内を覗いて見る内に、間近き人影びつくりして、向ひの家の物蔭に過る間暫し身を忍ぶ。弟故に氣を碎く、粉屋孫右衛門は先にたち、

跡に丁稚の三五郎が、脊中に甥の勘太郎連れ、行燈目あてに駈來り、大和屋の戸を打叩き、孫「ちと物問ひませふ。紙屋治兵衛は居ませぬか。ちよつと逢はせて下され」と呼ばはれば、「さては兄き」と治兵衛は身動きもせず猶忍ぶ。内から男の寢ぼれ聲、「治兵衛樣はまちつと先に、京へのぼるとてお歸りなされた。こゝにでは御座らぬ」と、重ねて何の音なひも、涙はら〳〵孫右衛門、「歸らば道で逢ひそなものの。京へとは合點がゆかぬ。アヽ氣遣ひで身がふるふ。小春をつれては行かぬか」と、胸にきつくり横たはる、心苦しさこたへかね、又戸を叩けば、男「夜更けて誰じや。もふ寢ました」孫「御無心ながらまた一度お尋ね申したい。紀伊の國屋の小春殿は、お歸りなされたか。もし治兵衛と連立ちて行きはなされぬか」男「ヤヤ何じや小春殿は二階に寐てじや」孫「ア先心が落着いた。心中の念はない。何處にかゞんで此苦をかける。一門一家親兄弟が、片唾を呑んで臟腑を揉むとはよも知るまい。舅の恨に我身を忘れ、無分別も出よふかと、異見の種に勘太郎を連れて尋ねるかひもなく、今まで逢はぬは何ごと」とほろ〳〵涙の一人言、隱くるゝ間の隔てねば、聞こへて治兵衛も息を詰め、涙呑込むばかりなり。

【注】○**胷中に甥の**—甥と負ひとをかく。○**寢ぼれ聲**—れはけの誤字ならんか。○**何の音信も涙はら〳〵**—何の音さたもないのに、涙を流す。○**御無心ながら**—強いてものをねだる時に用ふる語で、強いておねだりしてすまぬがの意。○**どこにかがんて此苦をかける**—どこにかくれて人に此苦を見せるのだ。○**片唾をのむ**—氣をこらし、口に唾をためて一心になる形。○**臟腑をもむ**—氣をもむ、腹わたをしぼる、苦心する。○**かくるゝ間**—間は距離、あまり離れてゐぬので。

【譯】治兵衛はつッと立ち去る顏をして、又忍び足で引かへし、大和屋の戸にすがつて、内をのぞいて見てゐる中に、間近く人の影が見える。びつくりして、向ひの家の物蔭にかくれて、通り過ぎる間を暫く身を隱してゐる。すると弟の爲に氣を碎き心配してゐる紛屋の孫右衛門が先頭に立つて、後に丁稚の三五郎が背中に孫右衛門の甥の勘太郎を負つて、連れ立つて、大和屋の門燈を目あてに急いで來て、戸をい叩いて「ちとお尋ねしますが、紙屋治兵衛は居りませぬか、居たら一寸逢はせて下され」といへば「さては兄貴だ」と治兵衛は身動もせず、一層身を隱す。家の内から男の寢ぼけ聲で「治兵衛樣は今少し前に京へ上るといつてお歸りなされた、此處にはおいでなさらぬ」といつたきりで、その上重ねて何の音沙汰もないので、孫右衛門は涙をはら〳〵と流し、歸つたのだつたら途中で逢ひさうなものだ、京へ上るとは合點のゆかぬことぢや、あゝ心配で身ぶるひがする、と獨り言を云ひながら、もしや小春を連れて行つたのではないかしらと、ぎくりと胸に疑が起つて來るので、苦しさに堪りかねて、又戸を叩くと「此夜更けて何誰ぢや、もう寢てしまひましたに」と答へる。「御無心ながら、今一度お尋ね申したい、紀伊國屋の小春殿はお歸りなされたか、もしや治兵衛と連れだつて行きはしませなんだか」「や、何のことかと思うたら。小春殿は二階に寢てゐやる」「さうでしたか、それでまづ心が落ついた。一人で歸つたとすれば心中する考はないであらう。それにしても何處にかゞんで、人に此苦みをかけるのぢや、一族一家親兄弟が、氣をこらし、どうなることかと片唾をのんで、苦心をしてゐるとはよも知らぬであらう。ひよとすると舅殿がおさんを引分けたりしたので恨みに思うて自分の身を忘れ、無分別でもしはすまいかと、意見をする種にもと思うて、子供の勘太郎をつれて來た苦心の甲斐もなく、今までさがして逢はれぬといふのはどうした事であらう」とほろほろ涙を流して一人言をいつてゐる。隱れてゐる處との距離があまり遠くなく遮ぎるものもないので、兄貴の言葉が手にとるやうにきこえて治兵衛も息が詰り、涙を呑み込むばかりであつた。

孫「ヤイ三五郎、阿房めが夜る〳〵うせる所、他には知らぬか」といへば、阿房は我名ぞと心得て、三「知つて居れどこゝでは恥かしうていはれぬ」孫「知つて居るとはサア何處じや。云うて聞かせ」三「聞いた跡で叱らしやんな。毎晩ちよこ〳〵行く所は、市の側の納戸の下」孫「大だはけめ、それを誰が吟

味する。サアこい裏町を尋ねて見ん。勘太郎に風ひかすな。ごくにも立たぬ父めを持つて、可愛や冷たいめをするな。此冷たさで仕舞へばよいが、ひよつと憂いめは見せまいか」憎や〳〵の底心は不便〳〵の裏町を、いざ尋ねんと行過ぐる。影隔たれば駈出でて、跡懐かしげに伸上がり、心に物を云はせては、治「十悪人の此治兵衛、死に次第とも捨置かれず、跡からあとまで御厄介。勿體なや」と手を合せ、伏拝み〳〵、「猶此上のお慈悲には、子供がことを」とばかりにて、暫し涙にむせびしが、「兎ても覺悟を極しうへ、小春や待たん」と大和屋の、潜の透間さし覗けば、内にちら付く人かげは、小春じやないか。待つとしらせの合圖の咳、エヘン〳〵かつち〳〵、ゑへんに拍子木打ちまぜて、上の町から番太郎が、くる〳〵たぐる風の夜は、せき〳〵廻はる火用心。「ごよざ〳〵〳〵」も人忍ぶ、我には辛き葛城の、神隠れして遣り過し、透を窺ひ立寄れば、潜内からそつと明く。治「小春か」小「待つてか。治兵衛様早ふ出たい」と氣をせけば、せく程廻はる車戸の、明くるを人や聞付けんと、しやくつてあくればしやくつて響き、耳に轟く胸の中。治兵衛が外から手を添へても、心震ふに手先も震ひ、三分四分五分一寸の、先の地獄の苦みより、鬼の見ぬ間とやう〳〵に、明けて嬉しき年の朝、小春は内を抜出でて、互ひに手に手を取かはし、北へ行ふか南へか。西か東か行末も、心の早瀬蜆川、流るゝ月に逆らひて足をばかりに　三重

【注】○**阿房奴が**—治兵衛をさす。○**阿房は我名ぞ**—三五郎が阿房といはれたのは自分のことだと思うて。○**市の側の納屋の下**—天満の市の側の濱即川岸の納屋の下家にて、さうした所は總嫁即今の淫賣婦が巣をくつてゐた。○**ごくにも立たぬ**—役にもたゝぬ。○**仕舞へばよいが**—冷たさだけてすめばよいが、寒い位ですめばよいが、治兵衛が心中でもして憂き目でも見せることになりはせぬか。○**憂い目は見せまいか**—一本見ないかとあれど、見せはせぬかの意から、見せないかの方よし。○**憎や〳〵の底心**—治兵衛が憎いと思ふ底の心には、また子供が可愛想といふ心が根をはつてゐる。○**心に物をいはせては**——口では何とも答へることが出來ぬので、心で返事をさせ詫をして。○**十悪人**—十悪とは殺生、偸盗、邪淫、妄語、悪口、両舌、綺語、貪慾、瞋恚、愚痴をいふが、十悪を犯したといふより也も、十悪を犯したほどの悪人、即重悪人の意。○**死に次第**—死に次第、生次第勝手にせよと捨て置きもなさらず。○**兎ても覺悟**—とてもかくてもといふべきに覺悟をかく。○**待つとしらせ**—外で待つてるぞといふしらせに。○**くる〳〵たぐる**—くるは來る、たぐるはせきをすること。どほん〳〵と咳をしながら來る意。○**せき〳〵廻る**—咳をするのと、寒いので急ぎまはるのと両方にかく。○**葛城**……隠れるといふより神隠しといひ、神といふから、枕詞として葛城といつた。神隠しは不思議にうまく隠れる意。○**せく程まはる**—いそぐほど車のついた戸がまはる。○**三分四分**……**一寸の**—四分五分から一寸つゝ戸があくのと、一寸先は暗の地獄といふにかく。○**明けて嬉しき年の朝**—戸をあけてうれしいといふことから、年があけてうれしい元日の朝の意にかく。○**心の早瀬蜆川**—どつちへ行つていゝか分らぬ心が、早く逃ければといふ氣から、早くどうきがしてゐるといふを早瀬といひ、早瀬といつたから濱川といひ、川といふより流るゝといふ。○**足をばかり**—歩ける回り走り行くと、次の「橋づくし」の走り書にかく。

【譯】やがて孫右衛門は「これ三五郎、阿呆奴が夜々妾を消す所を他には知らぬか」、といへば、阿房とは自分のことをいはれたのだと思ひ込んで「知つては居りますが、此處では恥かしうて申されませぬ」といふ。「知つてゐるとは何處ぢや。云ふて聞かせよ」「聞いてあとから叱られてはいけませぬよ。毎晩ちよい〳〵行く處は、市の側の總嫁の巣です」といふ。自分のことを尋ねられたと思ひ込んでの三五郎の阿呆げた返事に、孫右はいよ〳〵呆れかへつて「大馬鹿者奴、誰がそんなことを吟味するか、さあこい、裏町の方でもたづねて見よう。勘太郎に風をひかすなよ。役にもたゝぬ父親をもつて、可愛想につめたい目を見せるな。此冷さだけですんでしまへばよいが、ひよつとして治兵衛が死にでもして、つらい目でも見せはしまいか」といひながら、憎い〳〵とは思ふものゝ、底の心は子供が不便〳〵の心から出たことゝて、いよ〳〵裏町をたづねようといつて行き過る。

其影が隔ると、治兵衛は駈出して來て、あとを懐しさうに伸上り、背のびをして見送りながら、口では何の挨拶もせず、心の中で物をいつて「此重惡人の治兵衛、死ぬとなと生きるとなと勝手にしろといつて捨ておかれもなさらず、色々と心配して下され、あとからあとまで御厄介をかけるのは、如何にも勿體ないことであると、手を合せて頼みながら「此上のお慈悲には、子供のことをお願申上げまする」と思うた丈けにて、暫く泣いてゐたが「それにしても覺悟をきめて小春を待たう」と、大和屋の潜り戸の透間からのぞくと、内に人影がちらつく。あれは小春ぢやないかしら、待つといふしらせの合圖をしてやろと、エヘン〳〵と咳をすれば、丁度カッチ〳〵と拍子木の音をさせて、上の町から番太郎がまたまはつて來る。來るほどに咳をしながら、寒い風の吹く夜なれば、いよ〳〵咳をしつゝ、せき〳〵せつせ〳〵とまはつて、火の用心、御用心々々といふのである。その聲も、人目を忍んで隠れてゐる我には辛いことであるが、蔭の方に隠れてそれを通り過ぎさせ、やがて隙を見て立寄つて見ると、潜り戸が内の方からそつとあくのである。「おゝ小春か」「待つてゐて下さんしたか、早う出てゆきたい」といつて氣をいそげば、いそぐほど、車戸が廻るので、その音を人が聞きつけるかも知れぬと、しやくつてあけようとすると、いよ〳〵しやくつて響き、その音が耳に轟くので、胸の中はいふにいはれぬ思がする。治兵衛が外から手を助けてやつても、心が震ふが爲に、手先も震うて、三分四分五分一寸としかあかぬが、少しづゝ戸をあけて、一寸先の暗の地獄の苦をのがれて、鬼の見ぬ間にいゝ處へゆきたいと、やつと戸をあけて嬉しい氣のしたことは、丁度鬼のせめて來る大晦日の夜をあけて、元日になつた時の嬉しさのやうなものである。小春は内をぬけ出ると、二人で手を取かはして北か南か西か東か、どつちへ行かうかと行末もわからぬのに、追手や來るとの心配から、心はせき氣があせり、それは丁度蜆川の早潮の如くであるが、その蜆川を月の反對の方に向いて足をたよりに歩ける限り歩いた。

名ごりの橋づくし

走り書、謡の本は近衛流、野郎帽子は若紫、惡所狂ひの身の果は、かくなり行くと定まりなし、釋迦の教も有ることか、見たし憂身の因果經、明日は世上の言草に紙屋治兵衛が心中と、仇名散り行く櫻木に、根彫葉ほりを繪双紙の、板摺る紙の其中に、有るともしらぬ死神に、誘はれ行くも商賣に、疎き報と觀念も、とすれば心ひかされて、歩み惱むぞ道理なる。

【注】○**走り書、謡の本は**……惡所通ひの身の果は、情死ときまつてゐるといふことをいはんが爲に、近衛流でかく謡本、及役者がかぶる野郎帽子の紫色の如く、きまつてゐると記したのである。又走り書といふのは前段修の文句を受け、尚近衛流の書き方を受けて云つたのだ。○**釋迦の教**……お經にもかいてあることか見たいものだ。○**因果經**—因果經でも見たいがといつたので因果といふ字に緣を求めて、憂き身といつたのである。卽因果のうき身とかく。○**明日は**—因果經のけふから明日といふ。○**仇名ちりゆく櫻木**—空な名が散る、散るといつたから櫻とかけた。○**櫻木**—木版の彫刻には、昔から、櫻の木が一番いゝとされてゐる故、櫻木に彫るといへば、版行をいふことになつてゐる。○**根ほり葉ほり**—よく調べることにて、版にほることにかく、卽ち印刷して賣出す意。○**板摺る紙の其中に**—紙の中に死に神がまざつてゐる。○**觀念も**—觀念してはゐるものゝ。○**とすれば**—ともすれば、動もすれば。

【評】走り書きをするものは、謡の本では近衛流ときまつてゐる如く、又役者のかぶる野郎帽子は紫色ときまつてゐる如く、惡所狂ひをするものゝ身のなる果は、かくの如く心中するにきまつてゐると、釋迦の教にでもあるのか、因果經でも見たいことである。さて明日は世上の言葉に上つて、紙屋治兵衛が心中したと、空し名を散りゆく花の櫻木に版木として彫るべく、根ほり葉ほり調べられて、繪草紙に刷られるであらうが、その板にする紙の中に、死神といふ紙があるかどうか知らぬが、その死に神にさそはれてゆくのも、商賣にうとかつた報ひであると觀念はしてゐるものゝ、やゝもすると氣がひけて歩みづらく思つたのも尤もなことである。

頃は十月十五夜の、月にも見へぬ身の上は、心の闇の印かや。今置く霜は明日消ゆる、はかなき譬の

それよりも、先へ消行く閨の内、いとし可愛いとしめて寝し、移香も何と、冷泉流の蜆川、西に見て朝夕渡る此橋の、天神橋は其昔、菅丞相と申せし時、筑紫へ流され給ひしに、君を慕ひて太宰府へ、たつた一飛梅田橋、跡老松の縁橋、別れを歎き悲しみて、跡にこがるゝ櫻橋、今に話しを聞渡る、一首の歌の御威徳。洽「斯る尊き荒神の、氏子と生れし身を持つて、そなたも殺し我も死ぬ、元はと問へば分別の、あのいたいけな貝殻に、一杯もなき蜆橋。短かき物は我々が、歌此世の住居秋の日よ、十九と廿八年の、今日の今宵を限りにて、二人命の捨所。爺と婆との末迄も、まめで添はんと契りしに、丸三年も馴染まいで、此災難に大江橋。あれみや浪花小橋から、舟入橋の濱傳ひ。是まで來れば來る程は、冥途の道が近付く」と、歎けば女も縋り寄り、小「もふ此道が冥途か」と、見交す顔も見へぬ程、落る涙に堀川の、橋も水にや浸るらん。

【注】○**目にも見えぬ**—月の鏡に照しても自分の身の上が見えぬのは、心が闇と曇つてるからか。○**先へ消行く**—今おく霜は明日でなくては消えぬが、自分達は明日消える霜よりも先に、今夜の中に消えゆくのだ。○**移香も何と**——着物から移り來る香も何となるのかといふのと、何と流れとかく。流れといつたから蜆川といつた。○**冷泉**—冷泉節にて、此處を歌ふ意。○**天神橋**—天滿から今の松屋町にかゝる、大阪三大橋の一。○**申せし時**—道眞が菅丞相といつた時。丞相は支那の官名。○**一飛梅田橋**—道眞宰府に流さるゝに方り、庭前の梅花を見て、「こちふかば匂ひおこせよ梅の花、主なしとて春な忘れそ」といつて梅に對して別を惜んだが、彼が九州にいつて見ると、此梅は飛んで先に來てゐたといふ傳說を引いて梅田橋にかけた。つまり天神橋といつたから、菅公の緣で、飛び梅にかけ、梅字に更に菅原天神記の梅王丸の名を暗示した。○**跡老松**—追と老をかけ、松といふから緣といつて緣橋を引出し、松には更に松王丸をにほはせた。○**櫻橋**—例の梅王、松王、櫻丸の櫻丸にかけた。○**一首の歌**—梅はとび櫻にかるゝ世の中に松ばかりこそつれなかりけれ。此歌によりて菅公の威德を思ひ知つた。○**荒神**—威勢のいゝ神の意。○**いたいけな貝殻**—いたいけは、若々しくして、なよやかな物を形容したのであつて、貝殻は蜆橋の緣にひいて來た、貝殻に一ばいもない位の小さい橋。○**短かきもの**—小さい蜆橋といつたからそれにつれて短かいものといひ、更に人生の短かさから秋の日の短かさを云ひ出す。○**まめで**—無事で、關西でいふ言葉。○**大江橋**—災難に逢ふとかく。○**浪花小橋**—蜆川第一の橋。○**舟入橋**—勿論舟が入るにかく。大川から水を引き、舟を入れる堀割の上の橋の意　○**來る程は**—これまでくれば、ゆけばゆくほどに。○**堀川**—天滿十一丁目、大川筋より、天滿綿屋川までの間の入堀。

【譯】時は十月十五夜の月の鏡にかけても、我身の上の樣子の見えぬのは、心が闇であるしるしであるか。今地上においてゐる霜は、明朝は消えるのである。かくて、おく霜ははかなき譬の引合に出されるのであるが、そのはかなき霜よりも、もつとはかないのは我が身で、霜よりも先に、明日をまたで、今宵の中にさへ消えてゆくのだ。閨の中に焚きしめ込んで寢た着物の移り香だとて何となるのだ。すぐにきゑるのだ。自分達もそれと同じに消えてゆくのだ。今蜆川を西に見て渡る天神橋は、朝夕渡つてゐた橋で、菅公に緣のある橋である。その菅公が筑紫へ流された時、公を慕うて太宰府へ一飛に飛んだ梅に緣ある梅田橋。即梅王丸に緣のある梅田橋、跡を追つた松王丸に緣のある松の緣橋。それかと思ふと、別れを歎き悲しんで、跡にこがるゝ櫻丸に緣ある櫻橋、などの話を今の世にきいて渡り、一首の歌を思うて、威德に感ずる。「かふいふ尊い神卽天滿神の氏子として生れて、こなたも殺し我も死ぬる元は何かといへば、あの小さい蜆貝に一ばいもない位な蜆橋ほどの短かい分別しかなかつたからだ。いや短かいといへば、我々か此世に生き住むことだとて非常に短く、丁度秋の日も同じやうで、小春は十九、自分は二十八年のまだ若盛りであるが、それを今日今宵を限りとして二人が命の捨所をさがすのだ。互に爺ゝ婆となる末の日までも添ひ遂げようと契つてゐたに、なさけないことには、丸三年も馴染を重ねぬ中に、此災難に逢うて、大江橋を渡る。あれ見やれ、浪花小橋から舟入橋の方に岸傳ひに行くのだが、これまで來れば、行けばゆくほど、冥土の道が近づいて來ることぢや」と治兵衞がいへば、小春もすがりよつて、「もう此道が冥土か」といつて、二人が見交はす顏は互に見えぬほど涙が流れて、堀川の橋も水に浸るだらう有樣である。

「北へ歩めば我宿を、一目に見るも見返らず。子供の行衛女房の、哀も胸に押包み、南へ渡る橋柱、數も限らぬ家々を、いかに名付けて八軒家。誰と伏見の下り舟、著かぬ内に」道急ぐ。「此世を捨てて行く身には、聞くも恐ろし天滿橋、歌淀と大和の二ァ川を、一ッ流の大川や、水と魚とは連れて行く。我も小春と二人連、一ッ刄の三ッ瀬川、手向の水に受けたやな。何か歎かん此世でこそは添はす共。未來はいふに及ばず、今度の〳〵、つゝと今度の其先の世迄も夫婦ぞや。一ッ蓮の頼みには、一夏に一部夏書せし、大慈大悲の普門品、妙法蓮華京橋を、地藏和讃越ゆれば到る彼岸の、玉の臺に法をへて、佛の姿に身御成橋、衆生濟度がまゝならば、流の人の此後は、絶えて心中せぬやうに、守りたいぞ」と及びなき、願ひも世上のよまひ言、思ひやられて哀れなり。野田の入江の水煙り、歌山の端白くほの〳〵と、あれ寺々の鐘の聲、こう〳〵「かふしていつまでか、とてもながらへ果てぬ身を、最期急がん此方へ」と手に百八の玉の緒を涙の玉に繰りまぜて、南無あみ島の大長寺、藪の外面のいさゝ川流れ漲る樋の上を、最期所と著きにける。

【註】○數も限らぬ——南へ渡る橋の柱は、澤山あり、その邊りに家も澤山あるのを、どうして八軒家などいつたのであらう。○八軒屋—伏見通ひの乘船場である。○誰と伏見—伏見からの下り舟、伏といふから誰と伏しといつた。○天滿橋—天滿を天魔にかけ、恐ろしいといつた。大阪三大橋の一。○淀と大和—淀川と大和川にて、二つの川が、天滿橋の上流にて合する。○大川—淀川と大和川の合流する天滿一丁目あたりから、西へ土佐堀川に至る間を呼ぶ。○一つ刄の三つ瀬川—前には二つの川が流れて一つになると云ひ、此處にはそれを受けて、二人連れが一つ刄に死ぬといふ。三つ瀬川は三途川にて、二人が一つ刄と云ふから、數を合せて三ヅ川と云ひ、一つ刄にて共に死んで三途川を渡るにかく。○手向の水に受けたやな—三瀬川の水を手向の水に受けたいな。○一つ蓮の頼—一蓮托生をたのみて。○夏書—一夏、四月八日から七月十六日までの間に、經文だとか、信仰する佛の名號を多く書きとめることをいふ。一部は經を一部にて、此句から見ると、これまで敬冊かいたものと思はる。○大慈大悲の普門品—普門品は法華經にもあれど、大慈大悲とあるからには、觀音經の中の普門品の部なるべく、又觀音に緣の成就を願つたといふことからすれば、小春との關係についての經即ち觀音經であることは自ら察することが出來る。○妙法蓮華京橋—經と京とをかく。その頃此京橋が網島に至る唯一の通路。○彼岸—向岸の意に用ひたが、佛教で彼岸といへば淨土をさす。○法をへて—彼岸の淨土の、玉の臺に乘終つて即ち法を得、信仰を得たことを乘り終へたといふ。○身御成橋—信仰を得れば自然と身を佛の姿に成つたと、御成橋にかく。○流れの人の此後—流れは身を愛き川に流してゐる人即遊女。○絶えて—今は決して。○及ひなき……世まひ言—及びもつかぬ願望もつまりは世の中のよまひ言、出鱈目、あほげたこと。○野田の入江—今の網島停車場及櫻の宮附近を野田村といふ。○こう〳〵—鐘の聲そのものをさし、後のかうしてにかけた文の飾。○百八の玉の緒—數珠の珠の正式の數は百八つである所から、すぐに玉の緒にかく。要するに珠を涙の玉にくりまぜての意。○南む網島—阿彌陀の阿彌を網島にかく。○大長寺—此寺明治四十三年三月網島停車場の所に移轉した。此寺淨土宗にて、鯉塚及小春治兵衛の墓を以て知らる。

【譯】「北へ歩いてゆくと我が家が一目に見えるのであるが、それも見かへりもせず、子供の行衛や、女房との別れの哀れも胸に包みかくし、南へ渡つて行くが、その橋の柱は數限りもなく、それと同じくその邊りにある家は澤山あるに、何故に八軒家といつたのであらう。その八軒家へ、伏見からの下り舟がつかぬ内に」といつて道をいそぐ。然し「此世をすてに行く身にはそれから渡る天滿橋も天魔のすむ所かと思はれて名を聞くも恐ろしい。その天滿橋の上流で淀川と大和川とが合して大川となるのだ。丁度それと同じやうに、水と魚とは二つが一緒になり、又我も小春と一緒に二人連れで、一つ刄の下に死んで、三途の川を渡り、その川水を手向の水に受けたいことである。そして死ぬにしても何を歎くことであらう。此世で二人が添ふことが出來ずとも、未來はいふまでもなく、今度の今度の、ずつと今度のその先の世までも二人は夫婦であるのぢや。そして同じ蓮臺に身をおく、一蓮托生の身でありたいといふ頼みの爲には、大慈大悲の神である觀音を讃美の經、觀音經の中の普門品を、一夏に一部づゝ夏書をしておいたが、今は妙法蓮華經京橋を越えると、彼岸の淨土に行つて、玉の臺に乘り終へ、信仰を得て佛の姿に身をな

して御成橋を渡り、衆生濟度が出來ることであらば、遊女の如き人は、此後は決して心中するやうなことのないやうに守つてやりたい」などと、及びもつかぬ願ひごとをいふのも世の中のまよひ言であらうかと、思ひやられて情けないことではある。野田の入江には水煙が立つて、薄靄が見え、山の端も白つぼく仄かになつて來ると、寺々には鐘の聲がこう〳〵と響き出す。これは〳〵いつまでもかうしてながらへ居ることの出來ぬ身であるからには、もう最後を急ぐことにしようと、手にもつ數珠の珠と涙の玉とを一緒に繰りまぜて、南無あみ島の大長寺の藪の外の小さい川の流れが漲つてゐる樋の上を、最期の死所としてそこに着いたのであつた。

治「なういつまでうか〳〵歩みても、こゝぞ人の死に場とて、定まりし所もなし。いざこゝを往生場」と、手を取り土に座しければ、小「さればこそ死に場は何處も同じことと云ひながら、わたしが道々思ふにも、二人が死に顔並べて、小春と紙屋治兵衛と心中と沙汰あらば、おさん樣より賴みにて、殺して呉れるなころすまい、挨拶切ると取替せし其文を反古にし、大事の男を唆しての心中は、さすが一座流の勤めの者、義理しらず僞り者と、世の人千人萬人より、おさん樣一人のさげしみ、恨み妬みもさぞと思ひ遣り、未來の迷ひは是一つ。わたしをこゝで殺して、こなさん何處ぞ所をかへ、ついと側で」とうちもたれ、くどけば共にくどき泣き、治「ア愚痴な事ばかり。おさんは舅に取りかやされ、暇を遣れば他人と他人。離別の女になんの義理。道すがらいふ通り、今度の〳〵ずんど今度の、先の世までも女夫と契る此二人。枕を並べ死ぬるに、誰が謗る誰が妬む」小「サア其離別は誰がわざ。わたしよりこなさん猶愚痴な。體があの世へ連立つか。所々の死にをして、譬へ此からだは鳶烏につゝかれても、二人の魂付纏はり、地獄へも極樂へも連立つて下さんせ」と、又伏沈み泣きければ、治「ヲヽそれよそ

欠

ぐらをはなれた群鳥が、互に爭うて鳴く聲も、今のわが身邊の哀れをたづねてゐるのかと、いよ〳〵涙を增さしめた。

治「なうあれを聞きや。二人を冥途へ迎ひの鳥、牛王の裏に誓紙一枚書くたびに、熊野の鳥がお山にて、三羽づつ死ぬると、昔より云傳へしが、我とそなたが新玉の、年の始に起請の書初め。月の始月頭、書きし誓紙の數々、其度毎に三羽づつ、殺せし鳥は幾許ぞや。常には可愛〳〵と聞き、今宵の耳へは其殺生の恨の罪、むくひ〳〵と聞ゆるぞや。報ひとは誰ゆゑぞ、我故辛き死をとぐる。ゆるしてくれ」と抱き寄すれば、小「いやわし故」と締寄せて、顏と〳〵をうち重ね、涙に閉づる鬢の髪、野邊の嵐に凍りけり。後に響く大長寺の鐘の聲、南無三寶長き夜も、夫婦が命短か夜と、はや明渡る晨朝に、最期は今ぞと引寄せて、跡まで殘る死顏に、泣顏殘すな殘さじと、につと笑顏のしろじろと、霜に凍ゐて手も慄ひ、我から先に目もくらみ、双の立どもなく涙。

【註】○牛王の裏—前にあげたやうに、誓文をかくに用ひる熊野牛王の札には、裏に七十五の鳥の判の形がある。つまりこゝは誓紙をかくことの罪深きことを諷したのである。○夫婦が命短夜と—秋の夜長ながら、夫婦の命の如く短き意。○立てどもなく涙—たて所も無くとかく。

【譯】治兵衛「なう、あれをきくがよい、あれは二人を冥途へ迎ひの鳥だ。熊野の牛王の札の裏に誓文を一度書くたびに、熊野神社の鳥が、山では三羽づゝ死ぬといふ云ひ傳が昔からあるが、私し達が新年の初に起請の書初をし月の始の一日毎に書いた誓紙は數々あつた。その度に殺した鳥が幾つになるだらう。いつもは可愛い〳〵と鳴くやうにきこゑる鳥の鳴き聲も、今宵の我耳へは、殺した罪の報ひ〳〵ときこゑる。報ひといふのは誰故の報ひであら

欠

う。私故にお前も氣の毒な死に方をするのぢや、ゆるしてくりやれ」と抱きよすると「いゝゑ私し故ぢや」といつて寄りそうて、頬と頬を重ねて泣く。涙は流れて、それにぬれた鬢の髪は野邊の寒い嵐に凍つたのである。折柄後の方で響く大長寺の鐘に、あはれ秋の夜長も、夫婦の命の如く短かいものよと鳴り渡れは、夜も明けかけて來るので、これがいよ〳〵最期であるといつて、女を引寄せて、死んだあとまで殘る死に顔に、泣いた樣子を殘すな、殘すまいと、につと笑ふ、その笑顔は白々と白き霜に反映し、凍えた手は慄うて、且つはいたましきに、先づ自分の方から目がくらんで、刄をどこにたてようところもなく泣くのであつた。

治「ア、せくまい〳〵」小「早ふ〳〵」と女が勇むを力草、風誘ひ來る念佛は、我に勸むる南無阿彌陀佛、彌陀の利劍とぐつと刺され、引きすえてものり返り、七ッ顚八倒こはいかに、切ッ先咽の笛を外れ、死にもやらざる最期の業苦、共に亂れて苦みの、氣を取直し引寄せて、鍔元までさし通したる一刀、ゑぐる苦しき曉の、見果てぬ夢と消果てたり。頭北面西右脇臥に羽織打著せ、死骸を繕ひ、泣いて盡せぬ名殘の袂、見捨てて抱帶を手繰り寄せ、首に罠を引掛くる。寺の念佛も切回向、「有緣無緣乃至法界、平等」の聲を限りに樋の上より、治「一蓮托生南無阿彌陀佛」と踏みはづし、暫し苦しむ生り瓢、風に搖らるゝ如くにて、次第に絕ゆる呼吸の道、いきせきとむる樋の口に、此世の緣は切れ果てたり。朝出の漁夫が網の目に、見付けて、「死んだャレ死んだ。出合へ〳〵」と聲々に、云廣めたる物語。直に成佛得脫の、誓ひの網島心中と、目ごとに涙をかけにけり。

【註】○力草―路傍に多き長一尺ばかりの力强き禾本科の一年草、夏穗を出し、綠色の花をつける。力にしての意にかく。○念佛―大長寺からきこえて來るのである。○彌陀の利劍―利劍即是彌陀號、一聲稱念罪皆除といふ語あり、即六字の名號を一たび唱へると、如何なる罪障も斷つことが出來ること、利劍をもつて物を斷つが如しの意で、名號を唱へながらつき刺すのである。○のりかへり―そりかへつて逃げる。○頭北面西右脇臥―死者の臥する姿の法とされる。北に頭を、面を極樂淨土の西方に向けしむれば、自然と體は右脇を下にすることになる。○切り回向―こゝでは回向は、經を讀み、死人の菩提をとむらふ即ち成佛を念することゝ解した方が分り易く、切りは終の意。○有緣無緣乃至法界平等―法界はほつかいと讀み、萬物の本體をさす。緣あるもなきも何れにしても萬物平等の利益を受くる意。この經の終りの文句を限りとして樋の上から飛込むのだ。○生り瓢―縊死者のふらり〳〵と垂れ下つた形にたとふ。○いきせきとむる樋の口―水をせきとめる樋の口に息をせきとめて。○出逢へ〳〵―やつて來い〳〵。○成佛得脫―煩惱を脫するを得る即ち解脫。○誓ひの網島―すぐに成佛出來るやうにと、佛の誓の網によりて網島にかく。○目―網といつたから網の目と引いて來た。

【譯】治兵衛は泣きながら「あゝ急くまい〳〵」といへば小春は「早う〳〵」といふので、それを力草にし、風に誘はれて來る念佛も、我に早くしろといつて勸むるのであると思ひ、南無阿彌陀佛、彌陀の利劍といつて、女の咽にぐつと刺し込めば、引きすえても、そりかへつて、七顚八倒する。これは何としたことであらう。つまり刄の切つ先が咽喉笛を外れたからであつて、死に切れない最後の業苦をなめることではある。かうして小春が苦めば自分も苦しみ、二人が入り亂れて苦み居る中、いよ〳〵氣をとり直して引寄せて、治兵衛が鍔の根までさし込んだ一刀がゑぐるにまかせて、苦しき曉方の夢を見果てずして命は消え果てゝしまつた。そこで頭を北に、面を西方極樂淨土の方に向はせ、右脇を下に臥せしめ、羽織を打著せ、死骸の死にざまを體裁よくつくろうて、いくら泣いてもつきぬ名殘惜しい袂を見すてゝ、抱へ帶を手に引よせ、治兵衛は自分の首に罠をかけ、寺の回向の終りの文句の「有緣無緣乃至法界平等」といふ聲を聞いたのを最後として、樋の上から「一蓮托生南無阿彌陀佛」といつて、足をふみ外し、暫しの間は生り瓢が風にゆられてる如くふらり〳〵としてゐると、次第に呼吸の道はたえ、水をせきとめる樋の口に息をせきとめられて、此世との緣は切れ果てゝしまつた。朝出の漁夫は網に引かゝつた治兵衛の體を見つけて「や人死にだ、人が死んだ、皆出て來い〳〵」と口々に廣めた上、すぐに成佛し解脫をするやうにとの佛の誓の網にもれず、網島の寺の側にて死んだ心中であるといつて、人ごとに涙を流したことであつた。

女殺油地獄

欠

でゆくのであつた。

昔在靈山名法華、今在西方名阿彌陀、娑婆示現觀世音、三世の利益三年續き、去々年戊亥の春は、うらやせどやに罪深く、針櫛箱や數珠袋、そこに日の目も見ず知らぬ、一文不通の衆生迄、千手の御手の掴み取、紫磨黄金の御肌に、忽ち那智の觀世音。去年は和州法隆寺、シテ聖德太子のタ、キ千百年忌、ッレこれ又救世の大悲の化身。シテ續いて今年此薩埵。二人櫻過ぎにし山里の、誰訪ふべくもなかりしに、老若男女の花咲きて、足をそら〳〵空吹風に、散らぬ色香の伊達參り、大人童も歌ふを聞けば、歌行もちんつ、歸るもちんつ、又來る人もちんつちりつて、チリテッテ傳を賴みの乘合船は、借切よりも得菴堤、艫に舳を漕付けて、餘所も一つの船の中、客は是見よ顏自慢。やゝ共すれば痴話ごとの、夫に任せた身の上も、人も恥かし氣詰りと、小菊は陸へ一飛に、びらりぼうしのふか〳〵と、眉は隱せどとりなりの、町で名古屋の胸高帶は、小笹に露のたまられぬ。儉約算用世智辯も、人にこそよれ品にこそ、よれつ冷泉もつれつ道草に、人の言草ア、むつかしく、うるさく憎く嫌らしく、我供船を小手招き、歌「これの見さんせナ、愛宕の山にヨエ、ぢんの煙が三筋立つ。煙がナぢんの、ぢんの煙が三筋立つ」四筋に別れ玉鉾の、是より辰巳奈良街道、丑寅隅は八幡道、玉造へは未申、西は元來し京橋や、野田の片町大和川。こゝは名にあふ壽命の松、御代長久の岡山を、歌には忍の岡とも詠み、さら ら山口一ッ橋、渡して救ふ御願力、無量無邊のじゆふくかく、慈眼視衆生念彼觀音、しんとくだう者

欠

の御誓ひ、問ふも語るもゆく船も、徒歩路ひらふも諸共に、迷ひを開く腰扇、御堂に念珠を三重繰返へす。

【註】○昔在靈山名法華…三番目の句は三世利益同一體たが、それを三世の利益三年續きといつて、觀音の開帳が三年續いて行はれたといひ、それを數へ上げるのだ。さて此の原文の佛語の意は、昔の天竺の靈鷲山にては、佛の衆生を濟度する名を法華といひ、四方の極樂淨土にては、阿彌陀と名づけ、又此娑婆世界を救はんとしては觀世音と現はれたが、過去現在未來の三世に渡つて、利益は同一體である意。謠曲誓願寺及高野物狂に此句を引いてゐる。○罪深く…背戸住裏住をして、針箱や數珠袋を相手にくらして罪業四年はつちのと亥である。つちのえは誤かと藤井全集に見ゆ。○罪深く…背戸住裏住をして、針箱や數珠袋を相手にくらして罪業深き無學の人達に、針箱數珠袋の底にかくれてゐた一文の意をかく。○一文不通—一つの文字にも通ぜず即ち無學文盲の人々。○千手の御手の…觀音が千手に衆生をつかみとつて救ふ意。それに拘賽錢をつかみとる即ち澤山の信者があげて、あげる小錢が…の意。○紫磨黃金…佛敬にては金を四種に分け、金剛、閻浮檀金、紫金、眞金といふ。紫金即ち紫磨金にて、磨きあげた純粹無垢の金の意。これは即ち針箱の底又は數珠袋の底にかくれて居た一文の金を、觀音の手につかみとつて、それを直ちに純金の肌にしてしまふといふ意にかけ、一方には衆生を救ひとつて皆佛にしてしまふ意。○忽ち那智…忽ち觀世音となる意に那智をかく。享保四年二月朔日より天王寺にて聖德太子千百年忌あり、其時那智觀世音の開帳もあつたらうと藤井博士說く。○去年は和州法隆寺—享保五年二月十五日から、法隆寺にて、聖德太子の千百年忌開帳があつた。○タヽキ—鉢叩節にてやる記號。○救世の大悲…聖德太子は觀音の化身とされてゐる。○此薩埵—薩埵は菩薩と同じでこの野崎の觀音の開帳が今年はあるといふのだ。○經過ぎにし山里…除暦四月中旬ともなると、もう櫻の頃も過ぎて誰も來ぬのに、人間の花が咲いて…。○そら〳〵—浮々として。○散らぬ色香—櫻の花は空吹く風に散るが、人間の花は風にはちらぬからいつた。即娘子などか澤山まゐるといふのだ。○伊達參り—信心もなく、だてに遊び半分で參詣するのだ。○ちんつ—拍子詞で、三味線の音に合せたのだ。○得度堤—借切りよりか乘合の方が得といふ意を川堤の名にかけた。○艫に舳を…舟の首尾相接してゐる意で、それを受けて餘所も自分も同じ一つの船の中のやうだといつた。○客は是見よ…客は他の人に對して、自分の顏のきくことを誇るべく、やゝもすると、のろけ話をやり、いちやついたりするのである。○それに任せた身…いちやつきなどには、平生から身をまかせ、戲業としてゐる女郎にとつても、人目も恥かしく氣がつまるといふのだ。

○びらりぼうし—外出の際女が笠の下に用ひた紫縮緬で、左右に切れがたれて、ひらり〳〵するからいひ、もと歌舞伎の女形が用ひたと。冥途の飛脚にも出て來る。○とりなり—なりかたち、○町で名古屋の…町屋風即ち素人風の女でなくの意に名古屋をかけ、名古屋帶を胸高くしめた樣子は…。藤井博士によると、名古屋帶は糸眞田のことだとある。○小菊の露にたまらぬ…小菊に露がたまらぬ如く、小菊の花やかな姿を見ると、たまらぬほどで、金を遣ふ意。○餘約算用世智辯—女の花やかな風を見ると、餘約も勘定も吝嗇も品によれ人によれで、金をつかはずにはをれぬ意。世智辯は吝嗇の意。○冷泉—此處を語る節の名。○よれつもつれつ…品にこそよれを受けて、小菊に對して、客がまつはりつき、道草を食ふてのろ〳〵と歩むので、他人の言葉が厄介でうるさくいやなので、供船を招いて、あれ見さんせといひかけたのだが、それをすぐに次の歌にしたのである。○愛宕の山に…此歌はさつま歌の下にも引用されてゐる。此歌は船で歌つたとしても、小菊が歌つたとしても、さしつかへないやうである。○ちんの烟—沈香の烟。○四筋に分れ…沈香の烟が三筋立つてるといふことを、道が四筋に分れてゐることに引いて、これから辰巳即ち東南は奈良街道、丑寅即ち東北は山城八幡へ、未申即ち西南は玉造へ、酉は元來た京橋、片町に通するといつたのだ。○玉鉾—道の枕詞で、道のことをいつたのだ。○岡山…水谷氏によると、此地は今の北河内郡甲可村に屬し、野崎村の北に在り、慶長十九年大阪夏の陣の時、秀忠此地に本陣を布き、此山に壽命長久の松といふのがあつたので、德川氏を讃美して御代長久の松と書いたのだ。後勅選に、法印覺寛は此地を忍びの岡と歌に讀んでゐる。○さゝら山ロ一つ橋—佐々良山は甲可村に在り、その山の口にある一つ橋は、參詣者が舟から上る所の地。○渡して救ふ御願力…一つ橋で舟から上陸せしめて、橋を渡して野崎に至らせる意と、觀音が弘誓の舟に乘せて衆生を救ふ誓とにかく。○無量無邊衆福海…じゆふくかくとあるのはかいのいの字が、くの字に見えて寫し誤つたものと見るべきだらう。普門品の下に具二一切功德慈眼視二衆生一福聚海無量、是故應二頂禮一の句あり又應下以二佛身一得度上者、觀世音菩薩、即現二佛身一而爲說レ法とある。かうして此處は普門品所々の句をとつたもので、無邊無量衆福海とは、大海の增減せぬ如く、無量の衆生を護るともとることなく、無數の群生多しともすつることなきをいふ。念彼觀音は彼の觀音力を念することの意。つまり此所の全體は觀音が衆生を救はんとする願力は、無量無邊の海の如くであるから、慈眼を以て衆生を見る觀音を念すると、自ら得度即ち救はれて成佛する、觀音は此誓をたてゝをる意。○腰扇—迷を開くといつたから、腰にさした扇を出したのだ。

【譯】 昔は靈山にあつて法華と呼ばれ、今西方淨土に在りて阿彌陀如來と呼ばれた佛が、娑婆に現はれて觀世音となり、過去現在未來三世の利益は三年續に示され、一昨年の春は、裏屋背戸屋に罪業深く、針箱や數珠袋を相手にして、ろく〳〵日の目も見ず知らずの生活をしてゐる無學文盲の衆生までが、針箱や數珠袋の底にかくれて目にもつかないやうに忘れられて居た僅な錢を奉納すると、千手の御手に掴みとつて、忽ち之を紫金となし、黃金の肌となつた那智の觀世音の開帳があつた。去年は和泉の法隆寺の聖德太子の千百年忌があつたが、此太子はまた世を救ふ大慈悲の觀音の化身といはれ、續いて今年は此野崎村の觀音菩薩の開帳である。

櫻も散つた山里を誰れの訪ふものもなかつたが、此野崎村の觀音の開帳が始まると、老若男女の花が咲いて、足を浮して、空吹く風にも散ることのない、色香のある若い女の伊達參りをするものもあり、大人や童たちの歌ふのをきいて見ると、行くも歸るも、又來る人も、つてを賴んで乘合舟に乘るが、それは船を借り切つたよりか得である。ところが得菴堤に皆舟を漕ぎつけて、艫を舳に接して、何れの舟も一つとも思はれる中にありて、客は是れ見よがしに自分の腕自慢をして、自分の連れてゐる女を誇り、やゝもすると、痴話狂ひをするので、そのやうなことに身をまかせ、むしろそれを職業としてゐる女郎も、さすがに人目が恥かしく氣がつまるので、天王寺屋の小菊は其處で陸へひらりと飛上つた。ところがびらり帽子は深くかぶり眉は隱してゐるが、なりふりが町の素人風でなく名古屋帶を脇高々としめてゐる恰好を見ると、小笹に露のたまらぬごとくに、客はたまらぬ思をして、儉約も勘定も吝嗇も、人によれ、品によれであると、しきりに小菊の側によりもつれる、卽ち道草を食つて時間をつぶしてゐると、人の批評などがいよ〳〵厄介でもあり、うるさくもあり、憎くも嫌らしくもあるので、また供船を手招きして「これ見なさんせ、愛宕の山に沈香の煙が三筋立つ、烟が、沈の烟が三筋立つ」と歌つて進めは、道は四筋に分れてゐる。之から東南は奈良街道、東北隅のは八幡街道、西南のは玉造道、西へとれば今來た京樹や、野田の片町、大和川である。此處はまた名に高い壽命長久の松のある所で、御代長久を祝はれた岡山といひ、歌の上で忍ぶの岡とも詠ぜられてゐる。佐々良山の口の一つ橋にて、船の人が陸に上れば、もうすぐに、限りなき衆生を救はんとして無邊の海の如き願力を有し、慈悲の眼をもつて現はれ、これを念ずるものをして成佛を得しめ救ふてやるといふ誓をたてゝゐる野崎の觀音である。問ふものも語るものも船に乘つたものも徒歩のものも、皆此所に來りて迷を開くべく御堂に入つて數珠をくるのである。

所をとへば本天滿町、町の幅さへ細々の、柳腰やなぎ髮、とろりとせいも種油、梅花紙ごし荏の油、夫は豐島屋七左衛門、妻の野崎の開帳參り。姉は九ッ三人娘、抱手引手に見返る人も、子持とは見ぬ花盛り、吉野の吉の字を取つて、お吉とは誰が名付けん。お清は六ッ中娘。「母様ぶゝが呑みたい」も、折節傍の出茶屋見世、吉「こゝ借ります」とやすらひぬ。是も同町筋向ひ、河內屋與兵衛、まだ廿三親がかり。同商賣の色友達、はけの彌五郎、かいしゆの善兵衛、野崎參りの三人づれ、萬事を夢と呑みあげし、寢醒提重五升樽、坊主持して北うづむ。與「小菊めが客と連立よし〳〵と下向するも此筋」と、のさばり返つてくる道の、茶見世の內より吉「申々與兵衛様、こゝへ〳〵」と呼懸けられ、與「ヤお吉様、子共衆連れての參りか。存じたら連に成ましよ物。七左衛門殿は留主なさるゝか」吉「いや此方の人も同道。二三軒寄る所もあり、追付こゝへ見へる筈。お連衆もマア是へ。平に〳〵」と强られて、與「烟草一服致さうか」と、腰打かくるものんこらし。

【注】 ○本天滿町―今日の伏見町二三丁目の邊。○柳腰やなぎ髮―すらりとした體つきで、綠の髮をした。○とろりとせいも：「槍の權三」に「槍の權三は伊達者でござる。油壺から出すよな男、しんとんとろりと見とれる男、どうでも權三はよい男」の歌がある。あのとろりからとつたもので、美しい女の意と、油屋の女房ゆえ、油にかけていつたのだ。せいは背丈。とろりはまた立派に暮らしてる意もふくめてゐる。○梅花紙ごし荏の油―梅花といふのは髮油の一種で、紙ごしは、紙でこして精製した油の一種、荏の油は、ゑごまから取つた油。○抱手引手―中の嬰の手を引き、小さい嬰を抱いてゐるのだ。○花盛：若い意

花の盛りの如きといひ、すぐに花から吉野を聯想させた。○ぶゞ—京阪地方では湯でも茶でもぶゞ、又はおぶといふ。○同商賣の色友達…與兵衛も友も油屋であるから同商賣といひ、それが女あさりの友達の意。○はけの彌五郎—野郎風に結ふた髪の、當の先を細く長くし粋人らしくした意であらうといはれる。○かいしゆの善兵衛—片朱即ち赤ら顔の意だらうとさる。○萬事を夢と…世の中は萬事が夢の如きもので、凡てが空だとして只酒をのんで暮らしてる意。夢から次の寢醒につゞけたのだ。○寢醒提重—物見遊山などにさげて歩くに都合よく出來た一種の重箱。○坊主持—遊山などして荷物をもつた時、坊主に出遇ふごとに、順番を代つてもつことをいふ。○北うづむ—穩口氏によれば此も不明の語の一つである。然し、野崎は大阪から東北にあたる。即ち北に走り人にうづもる、つまり來た意だらうといふことだ。そしてかうした近松の略筆の例は「加增曾我」などにもあると かは氏の說く所である。けれども、久しく京都に住んでゐた人の說によると、かういふ遊をする際に、北から坊主が來ることがつても、北丈けは除くといふやり方をやつた事があり、或佛書にかういふ意味のうづむを除く意に用ひてあるとか。參考までに記す。○よし〳〵—よち〳〵。○のさばり返つて—路もせまくなるほど大に威張ちらしてゐること。○平に〳〵—どうぞ〳〵。○のんこらし—野良らしく髪をいふた男。野良は道樂者伊達者などの意。關西では若い男を只のんともいふ。

【譯】町は本天滿町で、幅も狹く細い町で、柳腰をして、綠の髪をなし、丈の高い美人が、立派に渡世をしてゐて種油、梅花香、紙漉油、荏の油などを商ひ、夫は豐島屋七左衛門といふ、その妻が野崎の觀音の開帳參りをしてゐる。九つの姉を頭に三人の娘をもち、小さいのを抱き、次の手を引いてるが、その妻を見返る人々にも、女は子持とは見えぬ位の花盛りで、吉野の吉の字をとつて、誰が名づけたかお吉といつてゐる。六つになる中の娘のお清が「母樣ぶゝがのみたい」といふと、折節傍に出してゐる茶店を見つけて、お吉は「此處を借ります」といつて休んだ。これも同じ町の筋向ひのもので河內屋與兵衛といつて、まだ二十三歲の親がゝりである。同じ油屋をしてゐる、色あさりの友達刷毛の彌五郎と皆朱の善兵衛とが、三人連れで野崎參りをなし、世の中は萬事夢と觀じて酒を飲み暮らして、今寢醒の提重と五升樽とを坊主持をして來た。

與兵衛は「小菊めが客と連れ立つて、よち〳〵と下つて來るのも此道筋だ」といひながら、大きく伸々として歸つて來ると、茶店の內から「申し〳〵與兵衛樣、此處へ〳〵」と呼懸ける。與兵衛は卽ち「やあお吉樣、子供衆をつれてのお參りか、知つて居たら連れになつたでせうに。七左殿はお留守居か。」お吉「いや、主人も一緒で、二三軒寄り道して後れるが今にこれへ來ます筈ぢや、お連衆もまあこれへ、さあ、どうぞ」と强ひられて、與兵衛は「では煙草でも一服しようか」といつて腰をかける樣も道樂者らしい。

吉「何と與兵衛樣、御繁昌な參りではないかいの。よい衆の娘子達やお家樣がた。アレ〳〵彼處へ桔梗染の腰變り、島縮の帶しやじやはいの〳〵」與「ソレ〳〵〳〵其處へ島縮に鹿子の帶、慥に中の風と見た。又一位見事では有ぞ」吉「如何樣若いお衆が此樣な折に、あんな見事な者引連れ、贅の遣たいは道理。こな樣も連立ちたい者があろ。こんな折に新地の天王寺屋小菊殿か、新町の備前屋松風殿か。なんと能知て居るか。なぜ連立つて參らんせぬ」と、ばつと乘すればふはと乘り、與「殘多い天晴今日は物の見事な事で、參りの群集に目を醒させふと、此中からもがいたれど、備前屋松風めは先約が有て、貰ひも貸もならぬとぬかす。天王寺屋の小菊めは、野崎へは方が惡い、どなたの御意でも參らぬと云切る。夫に聞いて下され。小菊めが今日會津の客に揚られ、早天から川御座で參りをつた。田舍者に仕負ては此與兵衛が立ぬ。小菊めが歸るを待て一出入」と、話しの內から二人のつれ、腕押もんで力みかけ、鬼共組むべき勢なり。

【註】○よい衆—良家の人、金持の人々。○おいへ樣—おかみ樣、中以上の主婦をいふ。○腰變り—腰以下の染色がちがつてゐるのだ。○島縮—縞縮子。○しやじやはい—しやはしやれてる、いきな。○島縮—縞の縮み。○中の風—中は新町廓のこと。新町の廓ものゝやうな風采の意。○一位見事—一段と見事な。○贅—燒者、借上、がらにないこと。○何とよく知つて居るか—知つてゐるだらうが、どうか。○乘すればふはと…煽てあげると調子に乘つて。○貰ひも貸も…時間を貰つて、こちらの方へ來る

ことも、身を貸しも出來ぬ。**○方が惡い**—方角が惡い。**○川御座**—英蓙舟。**○立たぬ**—面目が立たぬ。**○一出入**—一談判。

【譯】お吉は「どうぢや與兵衛樣、お參りが繁昌するではないか。良い家の娘達やおかみさん達も多い。あれ〳〵あすこへ桔梗染の腰から下の色變りに、縞繻子の帶をしめたのが通る、しやれてるではないか。」與「それ〳〵其處へ縞縮に鹿子の帶をしめたのが通る、あれは確に新町風だ。又一段見事だな。」吉「如何にも、若い人が、此樣な時にあんな見事なものを連れて、傲奢な風のしたいのは尤もぢや。お前さんも連れて歩きたいものがあるだろ。こんな時、曾根崎新地の天王寺屋の小菊さんか、新町の備前屋の松風さんかをな。よく知つてゐるだろがな。何故連れてお參りなさらぬのぢや」といつて、ぱつと煽てあげると調子に乘つて與兵衛は「殘念だ。今日は天晴、物の見事な事をして、お參りの群集の目を覺ましてやらうと、此間から工夫をこらしたが、備前屋の松風めは、先約があつて、時間を貰ひも體を貸すこともならぬと云ひをる。又天王寺屋の小菊めは、野崎の方は方角が惡い。どなたの仰せとあつても參らぬと云ひ切る。それにきいて下され、小菊めは今日は會津の客に揚げられて、早朝から英蓙舟で參りをつた。田舍者にまけたとあつては此與兵衛の面目が立たぬ。小菊の奴の歸るのをまつて、一談判やるのだ」と話してゐる內から、二人の連れの者は、腕をさすつて力み出し、鬼とでも取組みさうな勢をしてゐる。

吉「それ〳〵問ふには落ちず語るに落ると、利口そうに夫が信心の觀音參りか。喧嘩しののら參り。買はしやんすお山も傾城も、何屋の誰何屋の誰と、親御達がよふ知つて、いとしぼや『其方へは與兵衛めが間がなすきがな入浸て居る。異見して下され』と、私等女夫に折入て口說ごと。こちの七左衛門殿もいやらぬ事は有まい。定めしこな樣の心には、所こそあれ野がけの茶見世で、若い女子のざまで、入子鉢の樣な面々の子共の世話計りやきをらず、小さし出たと憎かろが、此諸萬人の群集を、突のけ押のけ目に立風俗。本天滿町河內屋德兵衛といふ、油屋の二番息子。茶屋〳〵のわけもろくに立てず、あの樣見よと指ざしするが笑止な。こうたうな兄御を手本にして、商人といふ物は、一文錢もあだにせず、雀の巢もくふにたまる。隨分稼いで親達の肩助けと、心願立てさんせ。わきへは行かぬ其身のしやうごん。ハア氣に入らぬやら返事がない。姉おじや早ふ參らふ。道でこちの人に逢しやんしたら、本堂に待つてゐるといふて下さんせ。茶屋殿過分」と、袂より置く茶の錢の八九文。四分におもく五分には、輕々しげの物參り、別れてお吉は通りける。

【註】**○問ふに落ちず**：問ふ時には眞實をいはぬが問ひもせぬに、何心なく相手が話してゐる中に、却つて眞實の心や樣子が分るといふがの意。**○喧嘩しののら參り**—喧嘩好きの男の道樂半分の詣り。**○いとしぼや**—いとほしやの轉、いたはし氣の毒の意。**○所こそあれ**：所もあらうに野道にかけた茶屋で。**○若い女子のざまで**：お吉が自分をさして、若い女のくせに…といつてゐるのだ。**○入子鉢の樣な**…段々に重ねて中に入れられるやうに出來た鉢のことで、子供が澤山あるのを形容したのだ。面々の子供は、幾人もの夫々の子供の意。**○小さし出た**…こんな忠告などしては、さしでがましいと憎く思はふが。**○突のけ押のけ**：風采が人々を壓し目立つのと、のさばりあるいてることからいつた。**○わけも立てず**—此處では、わけは支拂の意。**○笑止な**—氣の毒な。**○こうたうな**—質實な。**○雀の巢もくふにたまる**—雀が巢をくふは、少しづゝの塵をもつて來て、遂に立派なものをこしらへる意から、塵もつもつて山となるの意、くふは巢をくふ、構へる、こしらへる意。**○其身のしやうごん**—其身の光になり、爲になる意。しやうごんは壯嚴、輝の意。

○四分に置く五分には：此作は享保六年七月十五日に初演されたものだが、此頃まだその八九年前の正德元年八月から九月までに出來た四寶銀が通用し、それは正德四年九月に出來た新銀に比べると四分の一の價しかなかつた。即ち四寶銀一貫目は新銀二百五十匁の割合で通用した。之は享保五年に公にされた天網島の中にも四つ即四寶銀三貫目が新銀七百五十匁に等しいと明にかいてある。此頃幣制が慶長の舊制に復し、錢四千文は金一兩にあたり、千文は四分の一兩即ち一歩にあたると算せられ、新銀は六十匁が金一兩にあたるから、新銀と銅錢とを比べると、新銀一匁は錢六十六文にあたるのである。ところが四寶銀は新銀の四分の一の價しかないから、四寶銀一匁は錢十七文弱にしか通用せぬ。即ち一匁の十分の一たる銀一分は、錢一文七分位である。

だから錢八九文は四寶銀四分乃至五分位の見當にあたると見てよく、それ故四分に重く五分に輕いといふのと、輕々しいとかけて此所の表白となつたのである。

【譯】お吉は「それ〳〵問ふても云はぬに、きゝもせぬ話の中に本心を吐くといふが、利巧さうにそんなことをいふて、それが信心からの觀音參りといふものか。喧嘩師の道樂參りといふものであらふ。お前が買ひなさる女郎も傾城も、何屋の誰〳〵と親御達はよく知つて、氣の毒や、『そなたの家へは與兵衛めがのべつに入り浸つてゐる異見をして下され』と私等女夫に折入つて話をなさる。うちの七左殿も、お前に話しなさらぬことはなからう、話しやつたであらう。定めてお前さんの心にも、所もあらうに、野道の茶店で、若い女のくせに、異見をするなんて、入子鉢のやうに澤山な子供の、世話ばかりやきもしないで、生意氣な、差出がましい奴と思つて憎いだらうが、此大勢の群集を突のけ押のけ目立つた風采をして、本天滿町の河内屋德兵衛といふ油屋の二番息子のお前さんが、茶屋への支拂もろくにせず、あの樣を見ろと指をさゝれるのが氣の毒でならぬ。實實な兄御を手本にして、商人と云ふものは、一文の錢もむだにせず貯へさへすれば、雀の巢がだん〳〵に塵をためて出來るが如く、いつかは澤山の金になるものぢや。だから隨分稼いで、親達の肩助けとなるやうに、願立てをなされい。さすれば其身の輝は脇へ行きはせぬ、必ず自分のものとなる。はあ私のいふたことが氣に入らぬのか返事がない。姉來やれ、早くお參りしよふ。道中でうちの人にお逢ひなさつたら、本堂でまつてゐるといふて下さんせ。お茶屋さん、ありがたう」と袂から出して茶代の錢八九文をおいた。それは銀四分には重く五分には輕いもので、お吉は輕々しげにお參りをすべく別れて行つた。

惡性に上塗するかいしゆの善兵衛、「あの女は與兵衛が筋向ひの內儀樣でないかい。物ごしもどこやら戀の有る美しい顏で、扨々堅い女房じやな」與「されば年もまだ廿七。色はあれど數の子程生廣げ、所帶じうで氣がこうたう。よい女房にいかい疵。見かけ計でうまみの無い、飴細工の鳥じや」と笑ひける。かくとはいかでしろうとの、田舍の客に揚られて、連れて主人の後家交り、かはりちんつの國訛り。歌「やつしは甚左衛門、幸左衛門が思案ごと、四郎三が憂ひ事。ちんつ〳〵ちんちりつてつて」。「日本一の名人樣、やつちや〳〵」と、擧る歌より褒さする、金ぞ諸藝の止手成。「そりや〳〵來たぞ」と三人が、手ぐすね引いたる顏色。小菊遠目にはつと驚き、「申花車さん、同じ道計氣が盡きる。始の船に乘りたい」と、裾かい取て立やすらふ、さきに與兵衛帆柱立、跡に二王の張番立、二人「與兵衛せくな。女郎と詰開いて男立てい。會津蠟燭が光りだてしたら、此方二人が心切て、踏消してくれる」と、草履を腰に腕卷り。

【註】○**惡性**—色好み、酒色にふける意。○**物ごし**—恰好、詞つきの意。○**緋**—色氣の意。○**色はあれど**—色氣がある、惚々する所がある。○**數の子**—鯡の子で、澤山の意。鯡は非常に澤山の子を生むからいふ。○**所帶じうで**—世帶じみての意。今日でも世帶じゆんでといふ。○**飴細工の鳥**—飴細工は見たところ美しくて食つてうまくないからいふ。卽ち遊野郎から見て艷つぽくないから惡口をいつたのだ。○**いかでしろうとの**—いかで知らうにかけ、素人の客、卽ちうぶの客の意に、小菊を白人卽ち私娼とかけたのだ。○**主人の後家**—茶屋花屋の女主人は後家だ。それが連中にまざつてるのだ。○**かはりちんつ**…お國訛りのある詞を吐いてゐるから、ちんつ節に對して替歌の意でいつた。○**やつしは甚左**…やつしは扮し役、卽ちやさ男に扮する役。京役者大和山甚左衛門は其名人であり、坂田藤十郎に次ぐと稱せられた。○**幸左衛門が思案事**—二世竹島幸左衛門思案事の役に優れた。○**四郎三**—櫻山四郎三郎悲嘆場の役に長じた。○**日本一の名人樣**—名役者だといつて、客ををだてるのだ。○**やつちや〳〵**—やんや〳〵といふやうな掛聲。○**擧る歌より**…此歌を田舍訛りの男が歌つて來るのを、取まきの連中が譽めるのは金の爲にほめるので、金が一番に藝が上手だといつた皮肉である。○**手ぐすね引いた**…用意してまちかまへてゐる。○**花車**—女將等をいふ。○**帆柱立**—つき立つて動かぬ風をいふ。○**張番主**—後ろには仁王さんのやうに、二人が張番をしてゐる。○**せくな**—ゆつくりやれ。○**詰開いて**—談判をして。○**會津蠟燭**…會津は蠟燭の名產地故曷つていつたのだ。此意から、心を切つて踏消すといつた。

【譯】放蕩に上塗をして、その以上の性惡るな皆朱の善兵衛は「あの女は與兵衛が筋向ひの家の內儀ではないか、恰好言葉付なども何となく色氣があり美しい顏をしてゐながら、さても堅い女ぢやな。」與「さうとも年はまだ二十七で、色氣はあるが、數の子ほども澤山子を生んで、世帶じみて氣が質實で、善い女房だがそれが缺點だ。見かけはよいが一向にうま味のない、飴細工の鳥みたいだ」といつて笑つた。かくとはどうして知らう。小菊は初心の田舍の客に揚げられて、主人の後家もそれにまざつて、國訛りのかはりちんつ節で客が「やつしの名人は甚左衛門、幸左衛門は思案事、四郎三は憂ひ事、ちんつちりてつて」と歌ふと、「日本一の名人樣やい〳〵」といつて歌を皆がほめるが、それよりもそれを褒めさせる金の力は藝が最も上手である。三人は卽ち「それ來たぞ」といつて、ちやんと用意してまつてゐる顏付である。小菊は遠目にそれを見るとはつと驚いて「申しおかみさん、同じ道ばかり通るのは氣がめいる。始の舟に乘りたい」といつて裾をつまみ取りて、立つて休んでゐる。その前に與兵衛は帆柱のやうに、つつたつて動かず、その後には仁王のやうに皆朱と刷毛とが立つて張番をしてゐる。二人はいふ「與兵衛急ぐな、ゆるりと、女郎と談判して男の面目を立てろ。萬一にも會津蠟燭の奴が光を出さうとでもしたら、おれ達二人が蠟燭の心を切つて、蹈消してやるわ」といつて草履をぬいで腰にはさみ、腕まくりをしてゐる。

客は顚倒花車も下女もうろたへ、小菊を圍ふてうぞぶるふ。與「小菊殿かつた。名染の河與がかるからは動せぬ」と、茶屋の床几に引ずりすへ、「是賣女樣やすお山樣、野崎は方が惡い、誰樣の御意でも參らぬと、此河與と連に成るを嫌ひ、すひた客と參れば方も構はぬか。其譯聞ふ」と理窟ばる。目玉の鬼門金神もなどやかに、菊「コレ河與樣角が取れぬの。小菊といふ名が一ッ出れば、與兵衛といふ名は三ッ出る程、深い〳〵といひ立てられた二人の中。連立つて參らぬも、皆こな樣のいとしさゆへ。人にそだてられ嗾けられ何じやの。わしが心は誓文かうじや」と、ひつたり抱き寄せ染々吁く、色こそ見へね河與が悅喜。「エ忝い」と伸た顏付。

【註】○顚倒―びつくりする。○うぞぶるふ―うぞは薄、聊かふるへてゐる。○目玉の鬼門金神…方角の緣から、出して來たので鬼門は東北。此方角には鬼が出入するといつて陰陽家はきらひ、此方角に人間に災を與へる金神が居るを鬼門金神といつたのである。卽ち與兵衛の目附の恐ろしさをいつたのであつて、それをなどやか、卽ちなどやかに、和げて小菊は…。○そだてられ―煽てられ。○色こそ見えね河與…色こそ見えね香やは隱るゝの句にまねたのだ。

【譯】客は驚ろく、おかみもうろたへ、小菊をとりまいて聊か震へる。與兵衛は「小菊殿をかりた。馴染の河與が借るからは動かせはせぬ」といつて茶屋の腰掛の上に引すえて、「これ賣女樣、安お山樣、野崎は方角が惡い、誰とでも參らぬといつて、此與兵衛と連れになるのをきらつて、好きな客と參れば方角も何もないのか。その理由をきかふ」といつて理窟ばる。その恐ろしい目玉を和げるべく小菊は「これ河與樣、お前は角ばつたことをいぶ人ぢやのう、小菊といふ名前が一度出ると、與兵衛といふ名は三度も出るほど、深い〳〵仲といひたてられてゐる二人ではないか。連れて參詣せぬのも、皆お前が可愛いからだ。人にけしかけられ煽てられて、どうしたのぢや、わたしの心は、誓つて此の通りぢや」といつて、ぴたりと抱き寄せてしみ〴〵と囁くと、色にこそ見せはせぬが與兵衛はうれしさに喜んで、「忝い」といつてのんびりした顏をしてゐる。

客は堪らず傍にどうど腰かけ、「小菊殿お身は聞へぬ。いか成緣にか會津樣程いとしい人は、大阪中に無いとゆつたぞよ。國本の外聞身の大慶と、大事の金銀を湯水の樣に川遊び。ちよがらかされにや來申さない。其男が聞まへで、夕べの如く云はないけりや、どや〳〵通りのむや〳〵の關、二度と越し申さない。どふだ〳〵」と責せちがふ。いひ合はせし二人の連、つか〳〵と寄つて、「ヤイもさめ、此女

郎此方へ貰ふ、置て歸れ。但東土產に川の泥水振舞はふか」と、兩方よりたちはさみ、投げてくれんず面構。坂東者のどう强く、「何さぶい〳〵共、人おどしの腕に、色々のほり物して、喧嘩に事よせ、ふところの物取ると聞及ぶ。貧乏と云ふ棒に脛を撲られ、腰膝も立たぬ遊女狂ひ。上方の泥水より、奥州者の泥足くらへ」と、つゝと寄り蹴上ぐる足首、はけがおとがひ蹴ちがへられ、どうとまろんでころ〳〵〳〵、小川へだんぶとはね落され、「是は」と取付くかいしゆが大事の命の玉、縮み込程蹴付けられ、「鳶がかけた南無三」と、呆れて空をみち〳〵〳〵。腹這ひ〳〵逃げて行衛は無かりけり。

【註】 ○**ゆつた**—言つた。○**ちよがらかされる**—ちやうらかす、茶かす、おもちやにする意。○**其男**—河與をさす。○**どやく〳〵**—**りのむや〳〵の關**—國花萬葉記によると、むや〳〵の關は、出羽と奥州の境にあつて、木が繁つて交通が困難である所から、茶りをして通り、「武士の出るさ入るさにしをりするとや〳〵とりのむや〳〵の關」など詠んでゐる。どや〳〵はとや〳〵通りの訛りである。つまり此はどや〳〵と人通りのあるむや〳〵と腹の立つ關所即ち腹の立つ新地へは二度とやつて來ぬといふ意をいつたのだと見たい。○**責せちがふ**—せちがふはせつく、迫る意。○**もさめ**—東國者をもさといひ、それは詞の語尾にもさとつけるからで、もさ詞をつかふ意だといふ說もあるが、どうせ東國人は此時代既に開けた上方から見ると田舍ものが多く、猛者のやうな人間が多かつたので、只田舍者といふ位の意に用ひられたのだと思ふ。○**坂東者**—東國者。○**どう强く**—どうは、胴腹の意で、胴腹のすわつて强い意。○**ぶい〳〵共**—蟲のやうに、ぶつ〳〵つぶやく奴等。ぶい〳〵はこがねむし。○**蹴ちがへられ**—蹴つてあしまつた、といふやうな意に南無三寶といふ。○**空をみちく〳〵**—空を見ながら、道々の意。

【譯】 客はたまらなくなつて、どんと腰をかけて、「小菊殿、お前は承知ならぬ。どうした緣か、會津樣ほど可愛い人は大阪中にはないといつたぞ。それで國元への外聞もよく、自分にとつても此上ない慶びだと思つて、大事な金錢を湯水のやうに使つて川遊をやつたのだ。おれは決してからかはれに來はせぬ。其男のきく前で昨夜のやうに云はぬとすると、腹の立つ廓へ二度とゆきはせぬぞ、どうだ〳〵」といつて責めつけると、互にいひ合せた與兵衛の二人の連れの者は、つか〳〵と寄つて來て、「やい、田舍者奴、此女郎は此方へ貰ふ、打やつて歸れ。但し東國の土產に川の泥水を御馳走しようか」と兩側から會津男を立ちはさんで、投げでもしさうな顏付である。ところが東國者は胴がすわつて腰が强く「何をいふのだ、蟲のやうな奴め、汝等は人を脅す爲、腕に色々な入れ墨をして、嗤嘩にかこつけて、懷中の者をとるといふ話をきいてゐる。貧棒といふ棒ですねをなぐられて、遊女狂をして腰膝もたゝぬのだな。上方の泥水よりか、奥州者の泥足でも食へ」といつて、つと足首を蹴上げると、刷毛はそれで顚をけつて筋をたがはされ、どうところんで、ころ〳〵と小川の中へだんぶと刎ね落された。皆朱は即ち「これは」といつて取付いて、睾丸を縮み上るほど蹴られ、「鳶の足にかけられた。これはたまらぬ」といつて、呆れて空を見ながら道々腹這で、行衛も分らなく逃げて行つた。

友達投げさせ見て居ぬ男、與「倒まにうへてくれん」と、むづと掴めば振放し、「ヤちよこざいなけざひ六。ゑら骨ひつかひて呉れべい」と、くらはす拳を請外しては打返し、叩き合ひ掴み合ふ。「なふ氣の通らぬ是どふぞ」と、中へ小菊がかせに入り、「ア、怪我さしやんすな。大事の身」と花車が圍へば、下女も手を引き立隔つ。「そりや喧嘩よ」と諸人の騷ぎ。茶屋は店を仕舞ふやら、二人は絕體絕命の、打合ひ組合ひ、堤の片岸踏み崩し、小川にどう〳〵落ちわかれ、藻屑泥土まひこみ砂、互に投げかけ攫かけ、打合ひ打付け、扱ひ手無き相手勝負、氣根比三重と見へにけり。

【註】 ○**見て居ぬ男**—友達を人に投げさせてゐながら、知らぬ顏をしてはゐない男即ち與兵衛。○**倒にうへてくれん**—水の中へ眞逆樣に打込む。○**ちよこざいな**—ちよこさいな。生意氣な。○**けざい六**—毛才六。才六は丁稚の意で、青二才の小僧奴といふ

やうな意。○あら骨…あごの骨を引缺く、はづす。○氣の遇らぬ—氣のきかぬ。○かせ…二人の間の邪魔になるやうに飛込む。○花車—おかみ。○まひこみ砂—堤がくづれて、水の中へ飛込んだ砂。○根手なき…仲裁人のない兩方對抗の爭。○氣根比べ—根氣比べ。

【譯】友達の投げられたのを、知らぬ顏でゐることの出來ぬ與兵衛は「已れ倒さに水の中へでも植付けるやうにしてやらう」と、ぐつと會津男をつかむと、彼は「や、生意氣な靑二才、顎骨を缺いてやらう」といつて、拳骨を食はせうとするのを請け外づしては、反對に打返し、互に叩き合ひ掴み合ふ。それを見ると、「なうこれは氣のきかない、どうしたのだ」といつて、小菊が二人の間にはいつて邪魔をしようとする。と、おかみはまた「あゝ怪我をしなさるな、大事な身だ」といつて小菊を圍むやうにする。卽ち、下女は小菊の手を引いて、喧嘩の相手から引はなす。大勢の人達は「それ喧嘩だ」といつて騷ぐ「茶店は店をたゝむ、二人は命懸の打ち合ひくみ合ひを始める。そして堤をふみくづして、小川の中へ別々に落ち込む。かくて藻屑や泥土や、ほぐれ込んだ土をお互に投げかけ合ひ、つかみ合つて打ちつけ合ひ、誰しも仲裁するものなく、互に相手同士が根氣比べの喧嘩をやつてゐた。

折こそあらめ、島上郡高槻の家の子、お小姓達の出頭小栗八彌、馬上に上下御代參の徒士若黨、揃羽織の濃柿に、智惠の輪の大紋。手振の先供はい〳〵〳〵〳〵の、聲をも聞かず與兵衛が、たぐりかけて打つ泥砂。出合拍子に馬上の武士の、袷上下皆具迄、ざつくと懸るも時の運。栗毛忽ち泥付毛、沛艾鞍もしづまらず。與兵衛もはつと驚く所、「それ逃すな」と徒士の衆、ばら〳〵と取まく中、相手は川を渡越し、小菊も花車も手ばしかく、參りの諸人に紛れてのく。徒士頭山本森右衛門、與兵衛が兩脛かいてぎやつとのめらせ、膝を背骨にひしぎ付る。與「ア、お侍樣、けがで御座る御免成りませ。お慈悲〳〵」とほゐ面かく。森「こいつ慮外者、お小袖馬具に泥をかけて、怪我といふてはすまぬ。面を上げい」と首ねぢ上げ、與「ヤア森右衛門殿伯父じや人」森「ムゝ與兵衛めか」と互にはつと驚きしが、森「ヤイをのれは町人、いか樣の恥辱を取つても疵にならぬ。旦那より御扶持を蒙り、二字を首に懸たる森右衛門、慮外者を取つて押へ、甥と見たれば猶助けられぬ。討つて捨てる立ちませい」と、小腕を取つて引立つる。

【註】○家の子—此處は城主につかへてゐるものゝ意。○お子姓達—小姓立にて、小姓から出世した。○出頭—君側にあつて、政治に參與するなど重く用ひらるゝもの。○濃柿—濃色の濃きをいふ。○手振の先共—手ぶらで、何ももつてゐず、お先に立つてゐるお供。○皆具—馬具一切のこと。○栗毛忽ち泥つき毛—栗毛の馬は月毛の馬ともいふ。栗毛に泥がついて、泥付き毛としやれたのだ。○沛艾—躍りあがる馬の形で、泥をはねかけられた馬が、躍つて落つかぬといふのだ。○兩脛かいて…足をあてゝ脛をはらつて、べちやんと伏せさせるのだ。○二字を首に懸たる：和訓栞に見ても、武士は實名二字のものが多いとある。卽ち武士の名乘には二字が多いから、二字は武士をさし、武士は命にかけて、主君に仕へてゐる意と解すべきだ。○慮外者—無禮者。○立ませい—ませは上品な表白で、武士としての態度を他に對して見せたのだ。申せの意。

【譯】丁度折も折、島上郡高槻の城主に仕へてゐるお小姓上りの重臣小栗八彌が馬上に上下をつけ、御代參の途すがら、徒士の若黨に濃柿色に智惠の輪の大紋をつけた揃の羽織を着せて通りかゝる。空手の前驅は、はい〳〵と聲をかけるが、その聲を聞きもせず、與兵衛は喧嘩の相手に泥砂を手繰りかけて、出合頭に、馬上にある武士の袷上下から、馬具一切にまでざくりと泥をはねかけたのも時の運命である。栗毛馬は忽ち泥つき毛馬となり、躍り上つて靜まらない。與兵衛もはつと驚く所を「それ逃すな」といつて、徒步の衆が、ばら〳〵と與兵衛を取まく間に、相手の男は小川を向ふ岸に渡つて、小菊もおかみもすばやく參詣人に紛れて逃げてしまつた。徒步の武士の頭山本森右衛門は、與兵衛の兩脛を拂つて、べたりと平伏させ、膝をもつて背骨をおさへつける。與兵衛は「お侍樣怪我でござります。御免下さりませ。お慈悲を〳〵」といつて、泣面をする。森右は「こいつ無禮者。御小袖や馬具に

まで泥をはねかけて、怪我といつただけではすまぬ、面をあげろ」といつて首をねぢ上げると、與兵衛は「森右殿伯父様」といふ。森右「むゝ與兵衛奴か」といつて、互にはつと驚いたが、森右は「やい、汝は町人だから、どの様な恥を受けても疵にはならぬが、旦那から御扶持米を頂き、武士といふことを命にかけてゐる森右は、無禮者を取押へて朔だと知つては一層助けられぬ。討つてすてる、立ち申せ」といつて小腕をつかんで引立てる。

馬上の主人、「ヤイ〳〵〳〵、ヤイ森右衛門、見れば其方が大小の鞘口、つめやうが緩そうな。ふと鞘走つて、怪我でもして、血を見れば殿の御代參叶はず、歸らねばならぬ。下向迄は隨分鞘口に心を付けて森右衛門供をせい〳〵」森「ハアはつ」とお詞添く、「をのれ下向には首を打。暫の命」と突きはなし、「隨分おぢが目に懸るな」と、いひたけれども侍氣、聲せぬ夏の手振。鶯。「はい〳〵〳〵」武家のいきかたなづまぬ御馬、足を早めて急がるゝ。與兵衛うつとり、夢か現か醉たるごとく、「南無三伯父の下向に切らるゝ筈。切られたら死ふ、死んだらどふしよ」と、心は沈み氣はうはもり、逃てくれふと駈出、「ハアかふ行ば野崎。大阪はどちらやら方角がない。こつちは京の方。あの山は闇峠か但比叡山か。どこへ行たらば遁れふ」と、眼も迷ひうろたへ、「アゝどふかせふ何と」加賀笠、お吉と見るより地獄の地藏。與「ヤアお吉様下向か。わしや今切らるゝ助けて下され。大阪へ連れていて下され。後生で御座る」と泣きおがむ。

【註】○大小の鞘口—大小二本の刀の刀身をさし入れる鞘の口。鞘口には本心をかくしていふ、うはべの言の意もある。○つめやう—鞘のはめやう。○鞘走つて—鞘のぬけること。これは森右が上べの口をしやべり過ぎて、先走つて、人を切らねばならぬやうなことなきやうにとの意をかくしてるのだ。○夏の手振鶯—夏の鶯はもう鳴かぬ鶯であり古くて老いてゐる。聲を出さずに手を振つて、逃げろといふ心を表はす意を、古い鶯にかけた。○いき方—意氣、心意氣。○なづまぬお馬—武家の心意氣につれて、物に拘泥せぬ馬が…。○うはもり—逆上する。○万角がない—方角が分らぬ。○闇峠—大和と河内の境。○何と加賀笠—何とかせうといふ意にかく。加賀笠はその頃菅笠として流行した女向の笠で、今お吉がそれをかぶつてゐるのだ。○地獄の地藏—地獄にて遇つた地藏。地藏は慈悲の化身を意味す。

【譯】馬上の主人小栗は、「やい〳〵森右衛門、見ると、そちの大小の鞘口は、つめ方がゆるいやうだ。ふと鞘がぬけて、怪我でもして、血を見ると不吉の爲に、御代參も叶はず歸らねばならぬことになる。歸りまでは隨分鞘口に氣をつけて供をせい」といふと、森右は「はあ」とお詞を添く頂いて、「おのれ歸り途には首を討つ、暫くの命だ」といつて突はなし「伯父の目に懸らぬやうにせよ」といひたいが、武士氣質のこととて、夏の鶯の如く、默つて手を振るのみである。又武家の心意氣につれて、物に拘泥せぬ馬は、足を早めて、「はい〳〵」と急がされる。與兵衛はうつとりとして、夢か現か醉ふたが如く、「南無三寶伯父の下向の際には斬られる筈だが、斬られたら死ぬだらう、死んだらどうしよう」と思ふと、心は沈み、氣は逆上して、逃げやうと駈け出すが「はあ、かう行けば野崎。大阪はどつちやら方角が分らぬ。此方は京の方、あの山は闇り峠か、それとも比叡山か。どこへ行つたら遁れられう」と眼も血迷ふてろくに見えず、狼狽して、「あゝ、どうせうか、何とかならぬか」と思つてゐると、加賀笠をかぶつた姿が見える。それがお吉だと思ふと、與兵衛はまるで地獄で地藏に遇つた心地である。「やあお吉様お歸りか、わしや今斬られる、助けて下され。大阪へ連れて行つて下され。後生ぢや〳〵」といつて泣きながら拜むのである。

吉「イヤこちやまだ下向じや無いはいの。七八町行たれど、あんまり人せり。こちの人待合せにこゝ迄歸つた。エゝけうとなげな、身も顏も泥だらけ。氣が違ふたか與兵衛様」與「尤々喧嘩して泥を掴み合ひ、はね馬に乘つた侍に、其泥がかゝつて、それで下向に切らるゝ筈。賴みます〳〵」と立去らず。

吉「エ、あきれはてた。親御達の病に成るがいとしぼい。向ひ同士のけん〳〵共ならず。茶屋の内借つて振濯いで進せましよ。顔も洗ひ、とつと〻大阪へ歸つて、以後を嗜ましやんせ。又こゝかります。お清よ、父様が見へたら、母に知らしやや」と、二人葭簀の奥長き、日影も正午に傾けり。

【注】○人ぜり—人が込み合ふこと。○けうとげな—驚いた。○はね馬—跳ねる馬。○病になるがいとしぼい—いとしぼいは、いとほしいの轉で、氣の毒の意。即ちそんなことをして、親御の苦勞になるのが氣の毒。○けん〳〵ともならず…突慳貪、不愛想なことも出來ず。○とつとと—疾く〳〵。さつさと。

【譯】お吉は「いやこちはまだ私達は歸りぢやないわいのう。七八町行つたが、餘りに人がこんでゐるので、主人を待合せする爲に此處まで歸つて來た。ゑゝ驚いた。體も顏も泥だらけぢや。與兵衛樣、氣がちがひでもしたのか」。與「いや仰しやる通りぢや、實は喧嘩をして泥土をつかみ合ひをして、その泥が跳ねて馬に乘つてる武士にかゝつて、その故に武士の歸りに斬られる筈ぢや。助けて下され賴みます」といつて立去らぬ。お吉は「ゑゝ呆れ果てた。又親御達の苦勞になるのが氣の毒ぢや、向ひ同士のことだから慳貪にすることも出來ぬ。茶屋の内をかりて、洗ひすゝぎをしてあげませう。顏でも洗つて、さつさと大阪へ歸つて、以後を慎みなされ。又此店をかります。お清や父様の姿が見えたら、母様に知らしておくれ」といつて、二人は葭簀の奥にはいる。その中には長い日影もたけて午になつた。

「さぞや妻子が待つらん」と、辨當かたげかた〳〵に、姉の手を引タ豐島屋の七左衛門、喉が乾けど呑間も急ぐ、茶屋の前にて中娘、「アレ父様か」と縋り寄る。七「ヲ、待兼たか。母は何處に」と尋ぬれば、娘「母様はこゝの茶屋の内に、河内屋の與兵衛樣と二人、帶解いて衣服も脱いででござんする」七「ヤア河内屋與兵衛めと、帶解いて裸に成てじや。エ、口惜い目を拔かれた。そうして跡はどふじや〳〵」娘「そうして鼻紙で拭ふたり洗ふたり」と、聞くよりせき立つ七左衛門、顏色がはり眼もすはり、門口に立はだかり、「お吉も與兵衛も是へ出よ。但出ずばそこへ踏ごむ」と、呼はる聲に、吉「こちの人か。子共がお晝の時分も忘れ、何處に何してゐさしやんした」と、出る跡から與兵衛が、「七左衛門殿面目ない。ふとした喧嘩に泥にはまり、色々お内儀樣のお世話。是も七左衛門殿のお蔭、忝い」といふ小鬢さき、髪の髷も泥まぶれ身は濡鼠、腹立ッやらをかしいやら、挨拶もせず七「是お吉、人の世話もよい比にしたがよい。若い女が若い男の帶といて、そうして跡で紙で拭ふとは、尾籠至極疑はしい。餘所のことはほからかして、サア〳〵參ふ日がたける」吉「ヲ、〳〵待て居ました。委い事は道すがら」と、姉が手を引きおとは抱く、中は爺親肩くまに、法の教も一ッは遊山、群集をわけてぞ急ぎける。

【注】○目を拔かれた—ごま化された。○せき立つ—氣がいら立つ。○尾籠—不體裁。○ほからかして—放って、打やって。關西語。○おと—おと娘、妹娘。○肩くま—肩車即ち子供を肩に乘せ、頭をもたせることをいふ。○法の教も一つは…肩車にのせるをのりといって佛法にかけた。即ち佛法をきゝにゆくのも半分は遊びだ。

【譯】「さぞ妻子がまつてゐるだらう」と辨當をになつて、片手には姉娘の手を引いた豐島屋の七左は、喉がかはきながらも、水茶をのむ間も急きながら進んでゐると、茶屋の前で中の娘がそれを見つけて「あれ父様か」といつて縋り寄る。七左は「おゝ待遠かつたか、母さんは何處にだ」と尋ねると「母様は此處の茶屋の内に、與兵衛さんと二人で、帶をといて着物も脱いでゐなさる。」七「や、與兵衛と帶をといて裸になつてると？　えゝ口惜しい、誤魔化された。そしてそのあとはどうした〳〵」といふと「そして鼻紙で拭いたり洗つたりして」といふ話をきくなり七

左は、いら立つて、顔色は變り、眼を睨みつけて、門口に立ちふさがつて、「お吉も與兵衛もこれへ出て來い、出ないとそこへ蹈ごむぞ」といふ聲につれてお吉は「お前さんか、子供がお膳飯をたべる時も忘れて、何處に何をしてゐなされた」といひながら出て來る後から、與兵衛は「七左殿面目ない、ふとしたことから嗔嘩をやつて泥水の中へはまつて、色々とおかみ樣のお世話になりました。これも七左殿のお蔭ぢや、有り難い」といふ彼の小鬢さきや髷なども、泥まみれで、體は濡れ鼠のやうである。腹が立つやらをかしいやらで、挨拶もしないで「これお吉、他人の世話も程々にしたがよい。若い女が若い男の帶をといて、後で紙で拭ふなどとは、不體裁至極だ、疑はしい。他所のことは打やつておいて、さあ參詣しよう。遲くなる」お吉「おゝ待つてゐました。委しいことは途中で話しませう」といつて姉の手を引き妹娘は抱く。中の娘は父親が肩車にのせて、法の歌をきゝにゆくのも、半分は遊山氣分で、群集を押分けていそいだ。

與兵衛一人茶屋の見世、とほんとして居る所に、亭主を初め、あたり在所の者共五六人、「先にからこな人は參りか下向か。一ッ所にうろ〳〵と、合點いかぬ。サア通つた」と追立つる。折から「はいはい〳〵」の、聲に交はる轡の音。小栗八彌下向の徒歩立、與兵衛うろたへ逃損ひ、押わる供先伯父の目に、かゝる不祥の出合頭、引捉へ捻すへ、彗「最前は御參詣、今は御下向愼みなし。討つて捨てる」と、刀の柄に手をかくる。

【註】 ○とほんとして—ぼんやりして。○こゝな人—此人、こゝに居る人。○徒歩立—馬から下りて歩くこと。○かゝる不祥の…伯父の目にかゝるといふ不幸に出遇ふなりすぐと、即ち不幸にして伯父の眼にかゝるなり忽ち。

【評】 與兵衛は一人茶屋の店にぼかんとして居る處へ、茶屋の亭主を始めとして、あたり近所のもの五六人が來て「先程から此處の人は、參詣するのか、歸るのか、同じ處にうろ〳〵してるのが合點がゆかぬ。さあ通去つたがよい」といつて追立てる。折しも「はい〳〵はい」の聲に轡の音がまざつて、小栗八彌が歸途を馬から下りて歩いて來る。與兵衛は狼狽して逃げそこなひ、供先が押わけて進む折柄、彼が伯父の眼にかゝるといふ不幸な際に、與兵衛を引捕へ捻すえて、「先程は野崎御參詣の途中であつたが、只今は御歸りの道であるから、遠慮は入らぬ、討つてすてる」といつて、刀の柄に手をかけた。

八「待て〳〵森右衛門、その者討つて捨てんとは何故〳〵」彗「彼奴は最前の慮外者。他人ならば少々は見遁しにも致し、御免なされ下し置るゝ樣の、取成をも申べき所、彼奴が母は拙者が兄弟、現在の甥。何とも助け難し」と申しも敢ぬに、八「シテ其咎と云は何ごと」彗「御尋に及ばず、御服に泥を投かけ、御身を穢し汚したる科」八「イヤ〳〵此八彌が身を汚せしとは心得ず。是見よ著類の何處に泥が付いたるぞ」彗「イヤ召替られぬ以前の御小袖」八「さればよ〳〵、著換れば、泥をかゝらぬも同然では有まいか」彗「御意とは申ながら、已に御馬の鞍鐙も泥に染みお徒歩でお歸りなさるゝは、旦那に恥辱を與ゆる、慮外者」と申上れば、八「默れ〳〵。馬の皆具には泥のかゝる物故に、障泥といふ字は、泥をへだつと書く。泥のかゝらぬ物ならば、何しにへだつるといふ字の入るべきぞ。恥辱も慮外も咎もなし。武士たる者の恥辱とは、只一滴の濁水も、名字にかゝるは洗ふにおちず、すゝぐに去らず。あれら體の雜人、身が目からは泥水。泥より出て泥に染まぬ蓮の八彌、名字は汚れぬ助けてやれ」彗「ハアはつ」と、又有難き御意を大事に、振る手を揃へ足そろへ、行列立てゝぞ三重

【註】 ○取成し—善き樣に取計ふ。　○現在の甥—甥に對して助命を乞ふことは武士としては恥かしいといふ所謂面目本意の

我慢から、かういふのである。○**泥をかからぬ**—泥をかけられぬ。○**一滴の濁水**—一滴の濁り水でも、苗字にかゝつて洗つても落ちず、すゝいでもとれないのが本當の恥辱だ、即ち破廉恥な行とか盜みなどの如きをいふ。○**雜人**—下賤の民。

【譯】八彌は即ち「まて〳〵」森右、その者を討つて捨てんとは何故ぢや〳〵」森右「きやつは先程の武禮者、全く關係のないものなら、多少は見のがしもし、御免し下さるやうにと取計らひもすべき所だが、あれの母親は私の兄弟にて、彼は私にとつては現在の甥であるから、如何にも助けられません」といひも終らぬに、八彌は「そしてその罪といふのは何事だ。」森「お尋ねあるまでもなく、お服に泥を投げかけ、御身を汚した罪でござります」八「いや〳〵此八彌の身を汚したとは分らぬ。これ見ろ着物の何處に泥がついたか」。森「いやお召しがへなさらぬ前のお小袖をよごしたので。」八「それだ〳〵着換へてしまへば泥をかけられぬも同じことではないか」。森「仰せの通りではござりますが、既に御馬の鞍や鎧などにも泥がつき、徒歩でお歸りなさるのは、旦那に恥辱を與へたと申すべきで、無禮者でござります」と申上げると、八「默れ〳〵、馬具には泥がかゝるものだから、障泥といふ字は泥をへだてると書く。泥のかゝらぬものなら、どうして障といふ字の入ることだらう。恥も無禮も罪もない。武士たる者の恥辱といへば、只一滴の水でも、苗字にかゝるやうなことで、洗つてもとれず、すゝいでも取れないのをいふので、あれ等のやうな風態の賤しいものは、私しの目から見ると泥水ぢや。泥から出て泥にそまぬ蓮の如き八彌、苗字を汚されはせぬ。助けてやれ」といふと森右は「はゝつ」といつて、有難き御意を大事にしながら手をふり、一同は手振を合せ足をそろへて、行列を立てゝ進んだ。

中之巻

掲諦〳〵〳〵、波羅掲諦、波羅僧掲諦掲諦〳〵。波羅掲諦波羅僧掲諦、唵呼魯〳〵旋茶利摩登枳、唵阿毘羅吽欠。おん油屋中間の山上講、俗體ながら數度のお山、院號請けたる若手の先達、新きやくまじり十二とう組、吹出す法螺のかひ〳〵しげ成金剛杖。腰に腰當首に數珠、巾著代りの水のみ、河内屋德兵衛店前に立より、先達「何と與兵衛内にか〳〵。講中何事なふ、お山勤めて有難い。今日の下向は知れた事。念比な友達は、桑津迄迎ひにじや。お主一人見へぬは氣色でも惡いか。忝い御利生見て來た。是が土產先話さふ。西國者とやら、兩眼つぶれた十二三な盲が、大願かけて山上し、行者樣を拜む中、兩方共にくはつと開き、小篠の坂を杖もつかず、つゝと下る。お山の衆が考へ、ア、有がたい、此秋から世の中直る御告。あれ合點いかぬか。ちいさい盲は小盲、則ち米藏開いて、やす〳〵と下り坂は、下り口とのをしへ。手透なら夕方おじや。色々お山の話して、旅の疲をはらそうぎやてい、ぎやてい〳〵」とのゝめきける。

【註】○**掲諦〳〵**…掲諦〳〵は般若心經の呪文即ち祈り詞にて、之を山參りの人々が、先達の音頭につれて云ひつゝ進むのである。こゝでは山上講の人々が來る爲に、此言葉を先づ出し、やがて山伏が來ることを此處で豫告してゐるのだ。○**唵呼魯々々々**…此一句は藥師如來の呪文である。○**唵阿毘**…これは大日如來の呪文で、つまり色々なものがまざつて呪文をとなへつゝ山へ上つたり下つたりしてるのだ。○**おん油屋**…これは大日如來の呪文にまねて書出したのだ。○**山上講**—これは大和國山上獄即ち吉野大峯山の藏王權現に上る講中をいふ。○**院號**—俗人であつても數度も此山に上つて、年功をつんだ先達は、山伏同樣に、何々院といふ院號をさづけられ、幅がきくのである。○**新客**—新しく講中となつた人。○**十二とう組**…とうは燈にて、蠟燭の意。即ち蠟燭一本は一文にあたり、十二ケ月にあて、十二本の蠟燭をお燈明とし、十二文をあげる組を作つて講といつたのであつて、十二燈は十二文の燈明料をあげる意である。○**かひ〳〵しい**…法螺の貝とかい〳〵しい即ち健なげな樣とをかく。○**腰當**—山に上つたり旅行したり狩をしたりするものが、もとは毛皮の腰當を携へたものだ。○**巾著代の**—巾著を腰につる代りに、水呑の皮袋を携へた。皮を河内屋にかけた。○**桑津**—天王寺の東南。○**利生**—御利益。○**行者樣**—山上樣は役の行者の開基したものだとさ

る。○小篠の坂―大峰山の入口にある。○世の中が直る…豊年で米價が下落し世の中の生活が樂になる意。○下り口―米の價が下り口即ち世の中が立直るといつたのだ。○疲をはらそう…疲をはらそうと、例の呪文のはら僧ぎやていとをかく。○のゝめく―わめく。

【譯】 揭諦々々……唵阿毘羅吽欠、おん油屋仲間でこしらへた山上講にて、俗人でありながら、數度お山に上つて、晥號までうけた若手の先達や、新しい信者達がまじつて、作つた十二燈組は、法螺の貝を吹き出しかひ〳〵しげに金剛杖をとつて、腰には腰當をつけ、首には數珠をかけ、巾着代りの水呑をもち、河内屋德兵衛の店前に立寄つて、「どうぢや與兵衛は内にか、講中は何事なく、お山上りを勤め得て有りがたい。今日の下山は知れた事であるので、親切な友達は、皆桑津まで迎ひに來た。ところがお前一人の姿が見えぬのは氣分でも惡いのか。有りがたい御利益を見て來た。此土産話を先づ話さう。西國の者とかで、兩眼のつぶれた十二三歳の盲が、大願をかけてお山に上り、行者樣を拜む中に、兩眼ともかつと開いて、小篠の坂を杖もつかないでつつと下つた。そこでお山の人達が考へたものだ。あゝ有りがたい、此秋から世の中が立直るといふお告げぢや。あれ分らぬか、小さい盲はこめくらだ、即ち米藏が開いて、やす〳〵と下り坂とは、米の價が下りかけるといふ敎へだとさ。手がすいてゐたら夕方に來なされ、色々山の話をして旅の疲れでもはらそう。ぎやてい〳〵」とわめきたてた。

親德兵衛走出、「若い衆下向か殊勝にござる。こちのどろめは山上參りの行者講のと、今年も身共が手から四貫六百、順慶町の兄太兵衛から四貫、以上十貫近い錢取つて、どれどこに迎ひにも出をらぬ。神佛の罰も思はぬどろく者。友達がひに引しめて、異見賴みまする」といふ所へ、奥より母親兩手に茶碗、「なふ〳〵目出度い下向、マア一ッづつ參れ。こちの與兵衛が、山上樣へ嘘ついた其咎か、妹娘のおかちが十日計、風引いて枕あがらず。醫者も三人替て今に熱がさめかね、節句は近付く聟を入るる談合極り、先からは急いで來る。何かに付けて女夫の苦勞、皆與兵衛ののらめが、行者樣へ嘘ついた祟。お若衆お佗の祈禱賴みます」と、しみ〳〵語れば講中の先達、「いや〳〵お山の祟なれば、與兵衛に罰が當る筈。役の行者共いはるゝ佛が、若輩らしう何の脇がかりなされふ。娘どの熱病は又外のこと、その樣な煩ひには、藥も醫者もいらぬ事、皆樣知らずか、あんまり奇妙で、異名を白稻荷法印と申す、今の世の流行山伏、與兵衛も定めし知つてゐよ。此法印を賴めば、本復はたつた一加持。是から直に立寄り、賴むに否は有まい」と語れば悅び、母「ナフ〳〵忝い。是も行者のおしらせ。私は醫者殿へ參ります、是で緩りとお休み〳〵」と立出れば、先達「いや我々も面々の、親々妻子の顏も見たし」互に無事で悅びの、貝吹く降伏惡魔を祓ふ眞言の、聲もちり〳〵ばら〳〵ぎやてい、おんころ〳〵に別れ帰りけり。

【註】 ○どろ―どら、だら、放蕩者、與兵衛をさす。○四貫六百―これは銀でなく錢だとあるから、即ち四千六百文、大凡金一兩と六百文だ。一貫は一貫文、千文。○どろく者―道樂者。○友達がひ―かひは價。○節句―端午をさす。○のら―野良、闘四でだらしないものをいふ。のらりくらりする意。○佛…役行者を佛として尊んでゐるのだ。○若輩らしう―其技術に未熟なものゝ意。○脇かゝり―脇の人即ち罰をあてるべき筈でない人に、のりうつるとかたゝるなどはせぬ。○白稻荷法印…白狐即ち稻荷とされてゐる、白狐は迷信的に尊敬されてゐるから、それののりうつつた法印といふ意、法印は山伏の意。○加持―祈禱。元來佛に對してやるのだが、神佛の力をかりて病人を直さんとする祈をいふ。○おんころ〳〵に別れ―呪文の詞をかりて別々の意にかけた。○眞言―呪文の意。○ばら〳〵―波羅々々、呪文の詞。

【譯】 與兵衛の親德兵衛は走り出て、「若い衆達、お帰りか、殊勝なことでござります。此方の放蕩者は、山上參り

だとか行者講だとかいつて、今年も私の手から四貫六百文を、順慶町の兄太兵衛から四貫文、合計十貫文近い錢を取つておきながら、それ、どこへも迎ひには出てをらぬ。神佛の罰のあたることも考へない道樂者ぢや、友達がひに、うんと異見をして下され」といふ所へ、奥から母親が兩手に茶碗をもつて「なう〳〵、目出度、山を下りられた、まあお茶を一つ召しあがれ、こちらの與兵衛が、山上様へうそをついた其罰か、妹娘のおかちが、十日許り風を引いて、枕から頭をあげることが出來ず、醫者も三人をかへて、今に熱がさめず、端午の節句は近づく、掣を入れる話がきまり、先方からは急いでくる。何かにつけて、女夫は苦勞してをります。皆與兵衛の野良息子が、行者様へうそをついた祟りぢや。お若い衆達、お詫の御祈禱を頼みます」としみ〴〵いふと、講中の先達は「いやお山の祟なら、他人でなくて、當人の與兵衛に罰が當る筈ぢや。役の行者ともいはれる佛が、未熟者か何かのやうに、どうして他の人にたゝりなどなさるものか、娘御の熱病は行者様のたゝりではなくて、又外のことだ。その様な患ひには藥も醫者もいらぬことぢや。皆様御存じないか、餘りにも奇妙で、別名を白稻荷法印と申す所の、今日流行の山伏、あの人は與兵衛も定めし知つてゐるだらうが、此法印にたのめば恢復はたゞ一度の加持で出來る。是からすぐに立寄つて賴んで差上げようが、御異存はないであらう」といふと、母親は悅んで「まあ〳〵忝けない、これも行者様のお知らせぢや。私は醫者殿へ參ります。これでゆるりとお休みなされ」といつて立出ると、先達は「いや我々も各親子女房の顏も見たい」といつて互に無事で悅びの貝を吹き、惡魔を降伏させ祓ふ呪文の聲もぢり〳〵ばら〳〵になり、はら〳〵ぎやてい、おんころ〳〵といつて別々に分れ歸つた。

ぎやくな弟に似ぬ心、順慶町の兄河内屋太兵衛、用有りげにも浮ぬ顏付。進「ヤ太兵衛來てか、おかちが氣色見舞か。書出し何か忙しい時分、見舞には及ばぬ事」と、いへば太兵衛傍近く寄り、「母には道でお目にかゝり、立ながら委しう物語致せしが、高槻の伯父森右衛門様から、たつた今飛脚の狀に、もつけな事がいふて來ました。見さつしやれ跡の月、御主人の供して、野崎參りの折節、どくだうの

與兵衛めも參り合せ、友達喧嘩に掴み合ふひやうし、御主人へ段々の慮外。當座に與兵衛めを切殺し、ぬしも腹切る合點の所、御主人の御了簡おとなしく事相濟、歸つて後御家中町屋是沙汰。のめ〳〵と面さげて奉公ならず、暇を願ひ浪人し、四五日中に大阪へ下り、二度侍の立つべき思案せずば、此ぶんで刀はさゝれぬとの文體なり」と、

【註】○**ぎやくな弟**—温順でない意から逆なといつた。○**順慶町**—弟の逆に對して順といつた。○**書出何か忙しい**…店の書附けや何かで多忙な時といふのは此頃の支拂勘定は節句前々々、即ち一ケ月おきにやつてゐたからで、端午前は又勘定時であつたのである。○**飛脚の狀**—飛脚がもつて來た手紙。飛脚は今日の郵便のやうなものだ。○**もつけな事**—意外なこと。とんだこと。○**どくだう**—放蕩者、ならずもの。○**慮外**—無禮。○**ぬしも腹切**…伯父も自分で切腹のつもりのところ。○**御家中町屋是沙汰**—御一家中は申すに及ばず町屋の人までがかれこれと噂をし批評し。○**のめ〳〵**—おめ〳〵とした面で。○**侍の立つべき**—武士としての面目の立つとき。

【譯】逆な弟に似ぬ心をもつた順慶町の兄河内屋太兵衛は、用がありさうな、沈んだ顏でそこへやつて來た。德兵衛は「や、太兵衛來たか、おかちの病氣を見舞に來たのか、書付けや何ぞで多忙な時分だから見舞なんどには及ばぬ事ぢや」といふと、太兵衛は傍近く寄つて、立ちながら委しく話したが、高槻の伯父森右衛門様からたつた今飛脚の屆けた手紙によると、意外なことをいふて來ました。御覽なされ。先月、御主人の供をして野崎參りの折、極道者の與兵衛奴も參り合せ、友達喧嘩をして掴み合ひをする拍子に、御主人に對して段々の御無禮をした。そこで其場で與兵衛奴を斬り殺し、自分にも腹を切る所存であつたが、御主人の御了簡によりて穩かに事はすんだものゝ、歸つてから後御一家中は云ふまでもなく、町屋のものまでが彼れ是れと噂さをし批評をするので、おめ〳〵とした面をさげて奉公も出來ず、暇を願ひ出て浪人となり、四五日中に大阪へ下り、二度と武士の顏の立つ思案をしないと、此儘では刀はさゝれぬといふ文言である」と——

いふよりはつと膝を打ち、徳「扨こそな、何處ぞて大事仕出そふと思ふつぼ、かて〻加へて、おかちが煩ひ、おちの難義。まだ此上に、どろめが何を仕出そふやら、分別にあたはぬ」と頭をかけば、太「イヤ分別も何もいらぬ、ぼい出して退さつしやれ。ぢたい親父様が手ぬるい。私と與兵衛めは、お前の種でないとて、あまり御遠慮が過ぎまする。腹に宿つた母者人と連添ふお前、眞實の父と存ずる。やがて聟を取程脊丈伸びた、おかちは打擲きなされても、あんだらめには拳一ッ當ずほたへさせ、萬事に遠慮が皆身の仇。たゝき出して此方へこさつしやれ。どれぞひどい主にかけ、ため直してくれませふ」と、いへば親は無念顔。

【註】○思ふつぼ―思つて居たが其通りになつた意。○分別にあたはぬ―考がつかぬ。○ぢたい―一たい。○あんだらめ―馬鹿者。阿呆。○ほたへさせ―關西語。增長させる、ふざけさせる。○こちへこさしやれ―私の方へ來させろ。○どれぞひどい…誰か嚴重な主人を見つけてその手にかけて。

【譯】と太兵衛がいふなり、徳兵衛は、はつと膝を打つて「さてさうであつたか、何處かで大事を仕出すだらうと思つてゐたが、ぴたりと思つた通りであつた。おまけに其上に、おかちの病氣、伯父の難儀がある。此上まだ放蕩者が何を仕出さうやら、考もつかぬ」といつて頭をかくと、太兵衛は「いや考へることも何もいらぬ。逐出しておしまひなされ。一體親父様が手ぬるい。私と與兵衛めは、お前の種でないからといつて、餘り遠慮をなされ過ぎます。私達を腹に宿した母と連れ添ふお前を、私は眞實の父と思ふてゐる。やがて聟をとる程に大きくなつたおかちは、打擲なさつても、阿呆に對しては拳一つあてないで、我儘の仕放題にさせ、萬事に對して遠慮しておいでなさるのが皆身の仇になるのぢや。叩き出して私の方へおよこしなされ、だれか手嚴しい主人をさがして、その手にかけて矯め直してやりませう」といふと、親徳兵衛は無念らしい顏付である。

徳「エ、口惜い。尤繼父なれば迚親は親、子を折檻するに遠慮はない筈なれど、そなた衆兄弟は、身共が親方の子。親旦那往生の時は、そなたが七ッのらめは四ッ、『坊さま兄様』『徳兵衛どうせいこうせい』と、いふたを彼奴が急度覺えて居る。嚊も始めはおかが了簡で、『そちが家を見捨ては、後家も子共も路頭に立。兎角森右衛門次第に成てくれ』と、だん〳〵の賴みゆへ、親方の内儀と此如く女夫になり、親方の子を我子として、守立し甲斐有て、そなた自分の獨かせぎもめさるゝ。與兵衛めに商の手を擴げさせ、手代も置き倉の一軒も立る樣にと、あがいても尻のほどけた錢ざし、籠で水汲む如く跡からぬけ、壹匁もうければ百匁遣ふ根性。異見一言いひ出せば、千言でいひ返す。エ、元が主筋下人筋の親と子、釘ごたへせぬ筈。身の境界が口惜い」と、齒をくひしばれば、

【註】○坊様兄様―徳兵衛が與兵衛と太兵衛とを、かう呼んでゐたのだ。○次第になつてくれ―云ふやうになれ。○めさるゝ―しなさる。○あがいても―あせつても。○尻のほどけた…當時の穴のあいた錢をまとめるに、繩の尻を結んで、それに通してゐたからいふ。即ち幾ら錢を繩に通しても、下からぬけてしまふのである。○籠で水くむ…何の役にもたゝぬをいふ。○釘ごたへせぬ…地盤のだめなものには、釘を打ち込んでもきゝめがない意。

【譯】徳兵衛「そゝ口惜しい。尤も繼父だからといつても、親は親であるから、子を攻めるに遠慮はいらぬ筈だがお前達兄弟は、私の親方の子である。親旦那の死なれる時には、お前が七つで、野良の與兵衛は四つ。私が坊樣、兄樣といふと、お前達は徳兵衛どうせいかうせいといふ。その時のことを彼奴は屹度覺えて居るのだ。嬶めも始めの間はおか樣だとか、内儀樣とか私から呼んだ人だ。おち樣森右衛門樣の御考で、『汝が家をすてゝ去ると、後家も

子供も路頭に立つてくへなくなる、兎角森右衛門がいふ次第になつてくれ』と、だん〳〵のお頼があつたので、親方の内儀とこのやうに夫婦になり、親方の子を我子として、守り立てた甲斐があつて、お前は自分獨りで稼ぐことも出來るやうになつた。そこで與兵衛の奴に商の手を擴めさせ、手代も置いて、倉の一軒も建てることが出來るやうにと、あせつても、尻の結び目の解けた錢さし繩に錢をさすか、籠で水を汲むやうなもので、あとから〳〵とぬけて、一匁もうけると、百匁遣ふといふ根性である。その上一言異見をすれば、千言の云ひかへしをする。元來が主筋と下人筋とが、子となり親となつたのだから、地の腐つたものに釘を打つても手答のないが如くに役に立たぬ筈だ。自分の身の境遇が殘念だ」といつて齒を食ひしばると——

太「サア此方の其正直を見拔て、どろ〳〵者めがしたい甲斐に踏付ける。親仁樣の蔭でこそ、親子三人橋にも寢ず、人の門にも立たず、名跡立て下された、其恩德は本の親にも變らずと、毎度母も其の悔み。子共に遠慮あるからは、現在腹に宿した母にも、氣兼が有かと、思はぬ心置かるゝ。因果ざらしの物にならずに飽果てた。太兵衛賴む、江戸長崎へも追下し、死をらば死に次第、二度面も見とふない。みぢんも愛著殘らぬと、如來かけての母が云分からは、何御遠慮。勘當なされ」と評議の聲に目を覺し、「ア、づつ無い母樣〳〵。かゝ樣は未歸らずか」と、おかちが苦しむ屏風の内。門には「物もう、河内屋德兵衛殿は此方か。山上講中賴みに付、稲荷法印御見舞申」と案内す。太「扨はおかちが祈禱なさるゝか。一だん〳〵。私は高槻の返事が急く。お暇申す」と表に出、太「德兵衛宿に罷ある。早々御出忝し。あれへお通り遊ばせ」と、太兵衛歸れば法印は、端の間にこそ通りけれ。

【註】○どろく者—道樂者。○したい甲斐—したい放題、したいまゝ。踏付るは、人を踏つけたやうな態度をとる意。○橋にも寢ず—親父のお蔭で橋の下に寢るやうなことなく、即ち乞食にもならず。○名跡を立てる—家をつぎ跡をとる。○現在腹に宿した・子供に對して遠慮するからには、その子を腹に宿した母に對しても遠慮があるのだらうかと思ひもよらぬ心配をする。○因果さらしの物にあらず—因業ざらしの人間であり、何にもならぬもの、役に立たぬもの。○如來かけて—佛にかけ、佛に誓つて。○づゝない—術ない。つらい苦しい。○一だん〳〵—一段と結構、ありがたい。○端の間—外に近い室。

【譯】太兵衛「お前のその正直な所を見ぬいて、道樂者が仕度い放題に振まふて、人をふみつけた態度をとる。親父樣のお蔭でこそ、親子三人は乞食になつて、橋の下に寢るやうなこともなく、他人の門先に立つて憐みを乞ふこともなく、家督をついで下された御恩は、本當の親にも變らないと思つてゐる。それだのにあの樣に、子に對してあまくなさるといつて、母は毎度その悔みをいつてゐる。子供に對して遠慮をなさるからは、現にその子を腹に宿した母親に對しても氣がね遠慮が有るのではないかと、思ひもよらぬ心配をなさる。因業者の、何にもなれぬ奴には飽いてしまつた。太兵衛賴む、江戸や長崎へも強いて追ひやつて、死なば死に次第にしてしまへ。二度と面も見たくない。微塵も愛着の念は殘らぬと佛に誓つての母の云ひ分であるからには、何の御遠慮も入りませぬ。勘當なされい」といつて相談する聲に目をさまして、おかちは屏風の内にて苦しみながら、「あゝつらい、母樣々々、かゝ樣はまだ歸られないのか」といふ。折柄門には「物申す、河内屋德兵衛殿は此方か、山上講の講中の人が賴みに來れたので、稲荷法印が御見舞に來ましたと」いつて案内を乞ふ。太兵衛「おゝおかちに對して祈禱をなさるのか、それは一段と結構ぢや。私は高槻の方への返事をいそがねばならぬ、御暇を申します」といつて表に出て「德兵衛は家に居ります。早々お出で下されて忝けない、どうぞあれへお通り遊ばせよ」といつて太兵衛が歸ると、法印は端近い間に通つた。

踏締も無く世の中を、すべり渡りの油屋與兵衛、賣溜錢は色狂ひ、絞り取られて元も利も、かすも殘らぬ油桶、重げに見せる汗はなつ、中はすゞしき明樽を、擔ぐて宿へ歸りしが、與「ヤ珍らしいお山ぶ、

こなたは見知つた白稲荷殿、妹が病氣祈の爲か。あの付物が其方衆の祈でのいたら、此與兵衛が首がけ。母者人は藥取にか。耆婆でもいかぬ死病、いはれぬ氣骨をらるゝ。ヤこれ親仁殿、おかちが煩ひより、何より大事が有。其當座に母者人にはいふたれど、夫よりはつたりと打忘れ、今日ふつと思ひ出し、商やめて歸つた。跡の月野崎で、おぢ森右衛門樣に行合、『わざ〳〵飛脚もやる所、幸ひの便親達へいふてくれ。主人の金四ッ寶三貫目餘り引負ひ、此節季にたてねば、切腹かしばり首、一生の無心。兄太兵衛は義理も法も知らぬ奴。沙汰なしに三貫目調へ、與兵衛に持せて下され』と段々の言傳。二貫目や三貫目で伯父に腹切らせて、こなた衆の外聞世間が立つまい。今日は二日、際といふて明日明後日。萬事を差置き今日の中、三貫目調へて渡さつしやれ。あす夜明にかけ出せば、晝迄に往て戻る」と、たつた今直筆のおぢの文の裏表。

【註】○**諧謔もなく**―踏しめて、きちんとした所ない、即だらしなく。○**汗は夏**…汗は夏の如く出してはをれど、中は空つぽで秋の如く凉しい明樽を…○**お山ぶ**―山伏を略したのだ。○**付物**―物の怪がついてるので山伏が退散せしめようといふのだ。○**首がけ**―首を賭ける。○**耆婆**―釋迦時代の天竺の名醫。○**いはれぬ**―益のない。餘計な。○**四つ寶**―四寶銀と稱し、（第二卷口繪參照）寶の四が四つ打つてあり、正德元年に鑄造したもので、銅八分銀二分の甚だ粗惡なる銀貨である。その後正德四年九月に改鑄したのは新銀といつて、非常に質がよくなつてゐる。新銀との換算割合は、天の網島にある如く四寶銀三貫が新銀七百五十匁にあたる即ち惡貨は四分の一換へになつてゐる。故に新銀六十匁を金一兩とすると、十二三匁にあたる。○**引負ひ**―他人の爲に寶買取引し、損失消費を引受けること。○**此節季**―昔は三月の節句五月の節句といふやうに四季に一年六回の節季を設けて勘定支拂をした。だから、口入屋即ち金貸が金の催促をし、七左衛門は懸金取にまはつてゐるのだ。だから節季は支拂勘定の節季をいふのだ。○**一生の無心**―一生一命をかけての無心、御願だから貸せといふのだ。○**義理も法も**―義理も世間の習はしも、○**沙汰なしに**―默つて、太兵衛には默つて○**外聞**…お前達の外聞が惡くて、世間に對する顏が立つまい。○**際**―節季、つまり晦日の際で、その一兩日前のこと。○**おぢの文の裏表**―前の伯父の文に對して裏表のやうな、眞反對のことをいふ。

【譯】だらしなく、世の中を、すべり渡る油屋與兵衛は、賣溜金は色狂ひに絞りとられ、元金も利子も淳も何も殘らぬ油桶を、夏の如く汗を流しながら、秋の如く凉しいあき桶を、重さうに見せながら擔ふて歸り、「やあ、珍らしいお山伏、お前は見知つてゐる白稲荷殿だな。妹の病氣を祈りの爲に來られたのか。あれに取りついてゐるものがお前達のやうな祈禱で退散したら、此與兵衛が首をかけよふ。お袋は藥を貰ひに行かれたか、耆婆のやうな名醫でもなをらぬ死病に對して益にもたゝぬ氣骨を折られることぢや。や、これ親父殿、おかちの病氣よりも、何よりも大事件がある。其當座にお袋にはいふたが、それからばつたり忘れてゐて、今日ふと思出し、商賣をやめて歸つた。先月野崎で伯父森右衛門樣に行合ふた時、わざ〳〵飛脚でもやる處であつた。幸便だから親達へいつてくれ、主人の金の四寶銀三貫目餘りを引負ふて、此五月の節季に返さないと、切腹させられるか、縛り首に遇ふのぢや。一生一命をかけての無心だ。兄太兵衛は義理も習はしも何も知らぬ奴だから、彼には默つて、三貫目調へて、與兵衛にもたせてよこしてくれと、段々の賴みの傳言がありました。二貫目や三貫目の銀で伯父に腹を切らせては、お前達の外聞が惡くて、世間に對して顏が立たぬであらう。今日は五月二日ぢや節季の際といつた所で明日と明後日しかない。萬事を差しおいて、今日の中に、三貫目の銀を調へてお渡しなされい。さすれば明日の夜明にかけ出せば、晝までには往つて戻る」と、今しがた太兵衛がもつて來た伯父の直筆の文言とは、あべこべのことをいふのである。

憎く可笑しく、態「如何な伯父でも、主の金引あふ樣な侍、腹切らせたがまし。何じやこだくさんに三貫目。三匁もおじやらぬ。お主が商、去年から一文も見せぬ。算用したら、三貫目や四貫目は殘る筈。やりたくば其金やれ。追付聟を呼び入るる大事の娘が病氣、どんな評定する隙がない。ヤ法印樣お待

遠。おかちが樣體、御覽なされ下され」と、餘のことといふて取あはず。與「ヲ、〳〵手柄に聟が呼れふば呼ふで見や。見物せふ」と親の前に足踏伸し、そろばん枕の胸算用、ぐはらりと違ふて見へにけり。父がそろ〳〵抱起す、おかちが顏の面やつれ、法印とつくと見、「ム、年はいくつ」父「十五」法「病付は」父「跡の月十二日」法「ム、藥師如來の緣日、十五はあみだ」と、懷中の書籍くりひろげ、指を折り、子細らしき聲付、「そも〳〵、法藏比丘の淨瑠璃に曰く、阿彌陀と藥師は御夫婦と云々。則此病は一時も早く聟殿を呼入れ、夫婦に成たいと思ふ氣病に、少外の魅入有」と、いふより德兵衛尤顏。

【註】○引あふ—引負ふ。○こだくさん—小澤山。隨分澤山。○おじやらぬ—ない。○どんな—鈍な。下らぬ。○手柄に：聟を呼ぶ手柄が出來るなら、卽ち立派に聟がとれるなら。○違ふて：胸算用をして見るが、豫定とはまるでちがつたらしい。○病付—病始め。○跡の月—先月。○藥師如來の緣日。十二日は藥師の緣日。○十五は阿彌陀—十五日は阿彌陀如來の緣日。○法藏比丘の淨瑠璃—舊時の說敎節の一淨瑠璃に「法藏比丘」といふのがある。それによると、法藏比丘は天竺國王世饒王をいふ。此淨瑠璃はそれのことを、物語にしたもので、彼が太子の時讖にあつて妃と共に山にかくれ、妃は二子を生んで、やがて死んだが、太子は迎へられて國王となつたといふ筋であるが、阿彌陀と藥師が、身を此國王夫婦に示現したものだといふことになつてゐる。要するに此處は作者が眞面目さうにふざけてゐるのである。○ちと外の魅入有—少し他につきものがしてゐる。

【譯】德兵衛は憎くもあり可笑しくもあり「幾ら伯父だとて、主人の金を引負ふやうな侍は、腹を斬らせたがましだ。何だ、隨分澤山に三貫目なんて。三匁だつて有りはせぬ。お前の商ひだとて去年から一文も金を見せぬが、本當に算用したら、三貫目や四貫目は殘る筈だ。伯父さんにやりたければその金をやるがよい。追つけ聟を呼び入れるといふ大切な娘の病氣の最中に、下らない評定をする隙はない。やあ法印樣お待遠樣であつた。おかちの容態を御覽になつて下されい」といつて、他の事をいつて與兵衛をとりあはない。與兵衛は「おゝ立派に聟がとれるものならとつて見るがよい、見物しよふ」といつて親の前に足を蹈のばし、十呂盤を枕にして胸算用をしてゐるが　その計算は豫想とはがらりとちがつたやうに見えた。

父親が徐かに抱き起すおかちの顏のやつれたのを、法印は篤と見て「むゝ年は幾つ」ときく。父は「十五」と答へる。又「病始めは」父「先月十二日」法印「むゝ藥師如來の緣日だな、そして十五は阿彌陀の緣日」といつて、懷中してゐた書籍を繰ひろげて、指を折り數へ、譯のありさうな聲にて「そも〳〵法藏比丘の淨瑠璃に曰ふ、阿彌陀と藥師とは御夫婦云々、して見ると、此病は、一日も早く聟殿を呼入れて、夫婦に成りたいと思ふ氣病が元であつて、その外にもちとつきものがしてゐる」といふと、德兵衛は尤もらしい顏付をしてゐる。

法印圖に乘り、「稻荷大明神の使者、白狐の敎髮筋程も違はぬ祈。加持も藥同前。神佛にもその役〳〵、熱病さまし冷すには、比叡山の廿一社、溫むるには熱田明神、あたまの病は愛宕權現、足の病は阿閦佛、走り人盜人動かせぬは、不動の鐵縛、咳氣を祈るは風の宮、老人達の老病には、白髭明神白髮藥師、若衆の病の祈には、大慈大悲の地藏菩薩、骨牌の繪の付祈禱に、麻布の明神釋迦牟尼佛、どう取の祈は四三五六しや大明神、八ッこうなゝの社。別て此法印が得物、錢小判俵物の相場商ひ、上ふと下ふと高下は自由。持のお方が値上したい祈には、强氣に上り高天が原の八百萬神、はたした衆のさがりを祈るは、高きお山を時の間に、麓に下る嵯峨の釋迦、安井の天神、持とはたと兩方一度の祈には高からず安からず中を取つて、河內の國高安の大明神、法力のあらたなこと、棚な物取て來る如く、禮物は大方卅兩何時でも受取る。いで一祈」と錫杖ふり立て、いらたか數珠、さらり〳〵と押もんだり。

【注】○**白狐の數**…稲荷神の使者白狐の數へであるから、少しもちがひはない。○**祈加持も藥同然**…祈禱は對照を神とし、加持は病人などを對照として神に祈るのだ。その祈禱も加持も藥と同樣に、用ひ場がある意。○**冷すには比叡**　ひやすとひゑと駄じやれで、下のも皆さうである。○**温むるに熱田**—温と熱のしやれ。○**愛宕**…あたまとあたごのしやれ。○**阿閦佛**…あしとあしゆくとのしやれで、阿閦佛は大日如來の下に發願して、東方に成佛せる佛。○**走り人盗人**…逃亡者だとか、盗賊などが動けないやうにするには、動くことの出來ぬ金縛りの祈りを不動明王にするといふのだ。それは兩手を合せて指をいろ〳〵に結んでやるのであつて、さうすることを印を結ぶといふ。金縛はその印の結び方の一つだ、○**風の宮**—風を引くと嗅が出るから、嗅が出ればたのだらう。○**白髭明神**…近江滋賀郡小松村鵜川にある。白髭白髭といふのは、老人のことだから、老病に祈るとしやれたのだ○**若衆の病**…若衆は男色に關係があるから、その病を痔といつて、地藏としやれたのだ。地藏は慈悲の佛なる故大慈大悲といつた。○**骨牌の繪のつく**…カルタの中でも繪のついた札は位が上である、卽ちその繪のついたカルタを手に入れるには麻布の明神と釋迦牟尼佛に祈るといつたのだ。麻布の明神といふのは、遊びの名人といふ意にかけてしやれたのであらうと思ふ。然し遊びの名人にかけたといふ說は今まで唱へられたことなく、これまではカルタが麻で出來てゐたから麻布といひ、又うんすんカルタの一種は十の札が坊主から成つてゐるとあるから、釋迦に祈るといつたのだとされてゐる。然し麻布の明神なるものは大阪の附近では明にされてゐないやうだ。○**どう取**…賭博の胴親を取つて、利益を占めようとするには。○**四三五六社明神**—四三五六と數へたので、數が多く出て來ると親となり胴となれるから出したのだ。六社明神といふのは、國府を中心に、各國にあつたもので國内の神社六社を集めて祭つたものをいふ。そしてそれが凡て明神なら六社權現といひ、權現なら六社大神宮ならば六社大神宮といつた。その攝津の六社明神に祈るといふのだ。これも數の緣で引いて來たのである。○**八ツこう**—八講は昔比良山の重法寺にて、二月二十四日に朝夕二回四日間法華を講じた。之を法華八講といつた。數の勢でかういつて來て、序に八講にも祈るといつたのである。○**七の社**—京都大宮通の北、春日明神に併祀された伊勢、石清水、稻荷、加茂、松尾、平野の六つを加へ合計七社をいふ。○**禍物**—得意とするもの。○**俵物**—米など俵に入れたもの。○**持のお方**—現に品物をもつてる人。○**强氣**—相場商ひの語にて、買つて値上りを豫想する人。反對に賣つて値下りを豫想する人を弱氣といふ。○**高天原**—値が上り高くなるといふから、高天原の八百萬の神に祈るとしやれてふざけたのだ。○**はたした衆**—これは弱氣のことで、卽ち果したは賣果した意で、他にも賣つてしまつた意に果したと用ひてある例は澤山ある。つまり賣つて値下りをねらふ弱氣の人の意。樋口氏談。○**嵯峨の釋迦**…見る見る下る坂にかけて、釋迦と安井天神に祈るといつた。安井は値が安いに緣をもたせた。○**安井の天神**—天王寺の四天王寺内にあつた。○**高安の天神**—高いと安いとの中をとるといふしやれだ。○**いらたか數珠**—數珠の珠が、丁度碁石の如く兩面凸になつたものをいふ。

【譯】法印はつけ上つて「稲荷大明神の使者、白狐の數であるからには、髮筋程の違ひもありはせぬ。祈禱も加持も藥と同じことで、用ひ場があり、神佛にも各其受持々々の役がある。例へば熱病をひやすには比叡山の二十一社に祈るべく、温めるには熱田明神、頭の病は愛宕權現に祈り、足の病は阿閦佛に、走り去る人や盗人を動かさぬ爲には、不動明王に鐵縛の祈禱をなすべく、咳を治するには風の宮に祈り、老人達の老病を治するには白髭明神や白髮藥師に、若衆の病たる痔の祈には大慈大悲の地藏菩薩に祈り、繪のついたカルタの手に入るやうにと祈るには、あさぶの明神(遊びの名人)や釋迦牟尼佛に祈り、賭博の胴親を取る祈りには、四三五六、六社大明神や、八講や七の社に祈り、殊に此法印が得意なものといふのは、錢や小判や、俵物の相場の商に對する祈りで、相場を上げようと下げようと高下は自由自在で、現品持の方が値上げをしたい祈をするには、强氣になつて高天が原八百萬の神に祈り、又弱氣で賣果して、相場の下りを祈るには、高い山を一時の間に麓まで下るさがの釋迦や安井の天神に祈り品持と、はたと兩方の爲一度に祈るには、高からず安からず、中間をとつて、河内の國高安の大明神に祈るのであつて、いづれも法力の顯著なことは、棚にあるものを取つて來るが如くで、お禮は大方三十兩を何時でも受取ります。さ一祈りしませう」といつて錫杖をふりたて、兩面凸狀の數珠をさら〳〵ともんだ。

印をも未だ結ばぬに、病人重たき顏を上げ、「なふ祈もいらぬ祈禱もいや。おかちが病直すには、聟取の談合止めてたも。あの與兵衛が若氣故、借錢に責らるゝ、其苦しみが冥途の苦患。是ぞ呵責の責と

成。ながれ動の女子なり共、與兵衛が契約の思ひ人を請出し、嫁にして此所帶を渡してたも。是非に聟を取ならば、おかちが命は有まいぞ。思ひ知つたか思ひしれ」と、あたりをきよろ〳〵睨廻し、「ア、づつない苦しい」と、悶へわななきそゞろごと。父は驚き色違へ、法印少もおくせず、「汝元來何處より來る。疾く去れ〳〵。行者の法力つくべきか」と、鈴錫杖をちりゝんがら〳〵、「急々如律令」と責めかくる。與兵衛むつくと起き、「何を知つて去れ〳〵。どう山伏置おれ」と、落間にがはと突落せば、法「ヤア山伏の法を知らぬか。驗を見せずば置まじ」と、駈上りん〳〵鈴りん〳〵、引ずり下せば又駈上る、不動の眞言どたくたぐはつたりばつたりだ。引ずりおろされ山伏も、錫杖がら〳〵命がら〳〵歸りけり。

【注】○印を結ぶ—前節の不動の鍵縛の所にて說いた如く、修驗者が、兩手の指にて、色々な形をつくり、佛の誓の形を表はすことをいふ。つまり祈禱をする時の修法の仕方である。○冥途の苦患—冥途にての苦み。○呵責の責—地獄にて責め罰まれる折かん。○つくべきか—法の力が盡まはせぬ。○急々如律令—山伏が呪文の終りにとなへる語にて、遮り止めて、近づくなといふ意をもつてゐると。○どう山伏—どうは罵の意を有し、どうずりのどうなどと同じ。○落間—低い間。○印を見せずは—印は驗にて効驗の意。卽ち山伏の祈りの効驗を表はさずにおくものかの意。○不動の眞言—眞言は呪文の意。○どたくたぐはつたり…これはどろ〳〵ところがる音に、不動に祈る時の呪文の音を通はせたのだ。その呪文をあげて見ると、「のうまくさらば、だだびやくていびやく、さらばもけいびやく、さらばだ、たらだ、せんだ、まかろしやだ。けんぎやきぎやき、さらばびきなん、うん、うんだらだかんまん」は大呪といつて、その次にこれよりずつと短い中呪小呪があるが、要するに、此呪文の音を通はせてゐることはばつたりだと、だて作者がとめてゐる所でも察せられる。

【譯】法印がまだ印を結んで祈禱もしないのに、病人のおかちは重さうに顏をあげて「なう、祈りもいらぬ、祈禱もいや。おかちの病を直すには、聟を取る話をやめて下され。あの與兵衛は若氣のために借錢に責められてゐる。その苦みが、おかちの冥途の苦みとなり、地獄の呵責の折檻となる。流れ勤めの女郎でもよいから、與兵衛が約束をしてゐる心思ひの女を請出して、此家の嫁として此世帶を渡して下され、是非聟をとるとすると、おかちの命はないぞ、わかつたか、承知せよ」といつて、四邊をきよろ〳〵と睨み廻はし「あゝつらい苦しい」と悶え泣いて、とりとめもないことをいつた。父親は驚いて色をかへたが、法印は少しもびくつかないで「汝は元來何處から來たのだ、速に去れ〳〵、行者の法力がどうして盡きるものか」といひ、鈴と錫杖とをちりりんがら〳〵と振つて、「急々如律令」と附加へておかちの靈に向つて責めたてた。與兵衛はむつくと起き上つて「汝は何を知つてゐるか、逃げろ〳〵此馬鹿山伏、置きをれ」といつて、低い處につき落すと、法印は「山伏の法を知らぬか、効驗を見せないでおくか」といつて、駈上つて、りん〳〵と鈴をふり鳴らす。引ずり下すと又駈上り、不動の呪文をとなへて、どたくたぐはつたりと、引ずり下ろされて、錫杖がら〳〵と鳴らし、命から〳〵逃げて歸つた。

與兵衛親の傍に膝まくり、「是親仁殿、今のそゞろ言耳へ入たか。死んだ人を迷はせ、地獄へ落しても、此與兵衛が好た女房持せ、所帶渡すことは否かならぬか」惣「ヤイかしましいあたり隣も有ぞかし、餘程にほたへあがれ。此德兵衛は、死んだ人の跡式とらいでも、五人七人は、ゆるりと過る術しつたれど、年忌命日もとぶらひ、地獄へ落さず迷はせまい爲に、名跡ついで苦勞する。和御寮が好いたお出請出し、女房に持せ、半年も立ぬ中所帶破つて、親方の弔ひもならぬ樣には得せまい」與「扨は是非聟取つて妹に所帶渡すな」惣「ヲヽ、渡す」與「ムウよふいふた道知らずめ」と立上り、俯ぶけに踏のめらし、肩骨脊骨うんうん〳〵と踏付る。かち「なふ悲しや淺ましい兄樣」と、妹が縋れば、惣「おかち構ふな。

彼奴が腹のゐる程、存分に踏しや〳〵」と、身も働かず座も去らず。妹堪へかね、「あんまりな兄様。私は何も知らぬ者。死霊の付いた顔して、此よに〳〵いふてくれ。それからは商も精出し、親達へ孝行盡し、逆らふまいとの誓文立。それが嬉しい計に、病ほうけた此なりで、こはい〳〵恐ろしい、死人のまねして、嘘つかせ、父様を踏づ蹴つ、それが親孝行か。年よつた父様目でもまふたら、それは〳〵聞く事じやないぞ」と、縋り取付き泣わめけば、「いき女郎め、吐すまいと誓文立て〻口かため、憎いほうげた。死霊より與兵衛といふ生霊の苦しみ、覺えておれ」と同じくがはと踏伏せたり。

【註】○餘程にほたへあがれ―關西では、ふざけることをほたへるといふ。即ちふざけるにも程があらう。よい頃につけあがり冗談をいへの意。○跡式とらいても―跡をつがなくとも。○名跡つぐ…家督をついで苦勞する。○和御寮―汝、おのれの意。○お山―女郎。○道知らず―道理の分らぬ奴、分らずや。○ゐる程―いえるほど。○死霊のついた顔して…死人の霊のたゝった風をして。○誓文立―誓をたてた。○病ほうけた―病衰へた。○いき女郎め―いきは罵の接頭語でいきずりなどのいきと同じ。○憎いほうげた―いやな頑桁、憎い面の意。

【譯】與兵衛は親の側に行つて、膝をまくりながら「これ親父殿、今のおかちのたはことが耳にはいつたか。死人を迷はせ、地獄へ落すやうなことをしても、此與兵衛には、好きな女房をもたせ、世帶を渡すことはいやか、出來ぬか。」德「やい、やかましい、隣近所もあるではないか。いゝ頃にふざけておけ。此德兵衛は死んだ人の跡を相續しなくとも五人七人の家族は樂々と養つてゆく術は知つてゐるが、年忌や命日の弔ひもし、死人を地獄へ落さず、中有に迷はせまい爲に、家督をついで苦勞をしてゐる。お主が好きな女郎を請出し、女房に持たせて、半年もたゝぬ中に世帶をつぶして、親方の弔ひも出來ぬやうにはさせることはならぬ。」與「それでは是非聟をとつて、妹に世帶をわたすといふのだな。」「おゝ渡す。」與「むゝよくいふた。分らずやめ」といつて立上り、うつぶけに踏たふし肩骨、脊骨をうん〳〵と踏つけた。おかちは「おゝ、悲しや、あきれた兄様」といつてすがりつくと、德兵衛は、「おかち構ふな、あいつが腹の癒るほど、思ふ存分に踏ませろ〳〵」と體を動かしもせず、座つた所を逃げもしない。妹はたまりかねて、餘りな兄様、私は何も知らぬ者ぢや。それを死人の霊がとりついたやうな顔をして、此様に〳〵いふてくれ。それから後は商賣にも精を出し、親達へも孝行を盡し、逆らひもすまいとの誓ひを立てられた、それが嬉しさに、病み衰へた此風で、恐い〳〵恐ろしい死人の眞似をして、私に嘘をつかせ、父様を踏んだり蹴つたりするなんて、それが親孝行か。年の寄つた父様が目でもまふたら、それは〳〵承知しませんぞ」といつて縋りついて泣くと、與兵衛は「このいき女郎め、いふまいと誓つて、口がためをしておきながら、一切をばらしてしまふなんて、憎い面だ。死霊のたゝりよりか、與兵衛といふ生きた魂の與へる苦みを覺えてをれ」といつて、父と同様に、がはと踏みつけてしまつた。

「病疲れた妹を踏殺すか、畜生め」と、取付く父親はつたと蹴とばし、與「腹のゐる程踏といふたな。是で腹をゐるはい」と、顔も頭もわかちなく、さん〳〵に踏む最中、母立歸り、はつと計藥投げすて、與兵衛がたぶさ引攫んで、横投にどうどのめらせ、乘りかゝり目鼻もいはせぬ握り拳、母「ヤイ業晒しめ、提婆め、如何な下人下郎でも、踏むの蹴るのはせぬこと。德兵衛殿は誰じや、おのれが親。今の間にその臓が、腐つて落ると知らぬか、罰あたり。おとましや〳〵、腹の中から盲で生れ、手足かたわな者もあれど、魂は人の魂。己が五體何處を不足に生付た。人間の根性何故さげぬ。父親が違ひし故、母の心がひがんで、惡性根入るといはれまいと、さす手引手に病の種。をのれが心の劍で、母が壽命を削るはい。をのれ先度も高槻の伯父御が、お主の金を引おひしと、よふも〳〵此母を、ぬく〳〵と

欺したなア。たつた今兄太兵衛に行合、をのれが野崎のあばれ故、伯父は侍一分たゝず、浪人し大阪へ下るとの便。をのれが嘘が顯はれた。其時母がつか〳〵と親仁殿へ話し、跡で知れては、扨は親子の云合と疑はれ、夫婦の義理もかけはてる。内でも外でも己が噂、ろくなことは一度も聞かぬ、其度毎に母が身の肉を一寸づつ、そいで取様な因果晒しめ。半時も此内に置くことならぬ、勘當じや出てうせふ。出され〳〵」と打つゝくはせつ、たゝく片手に押ぬぐふ、涙手のひまなかりけり。

【註】○**腹をゐるわい**—これにて癒すわい。○**目鼻もいはせぬ**…目といはず鼻といはせず撲拳でなぐつて。○**提婆め**—提婆達多のことで、彼は佛を害せんとして、却つて大地がさけて阿鼻地獄に落ちんとしたが、南無佛と一唱して、その功德によつて救はれ、辟文佛となつた。こゝでは惡人めの意。○**腐つて落る**—腐つてとれてしまふ。○**おとましや**—うとましや、忌はしや。○**さす手引く手**—何やかにつけて。○**侍一分たゝず**—武士としての面目たゝず。○**つか〳〵と**—すつと、眞すぐに。○**半時**—今日の一時間。○**出てうせろ**—出てゆけ。○**出され**—出て去れ。○**食はせつ**—拳などをくはせることで、打つ意。○**涙手のひま**…ぬぐひ去る間もないほど涙が出る。

【譯】「病疲れた妹を踏殺すか、畜生め」といつて取りつく父親をばたりと蹴とばして、與兵衛は「腹のいえる程蹈みつけろといふたな？　これで腹を癒すわい」といつて、顏と頭の差別なく、さんざんに蹈みつける最中に、母親は立歸つて、はつとばかりに藥を投出し、與兵衛の髻をつかんで、どうと横に投げて倒し、その體の上に乘りかゝつて、目といはず鼻といはず握り拳で打ち「やい業晒しの提婆のやうな惡人奴。どのやうな下々のものや下郎に對しても蹈むとか蹴るとかはせぬことだ。それに德兵衛殿は誰だと思ふ。おのれが親ではないか。今の中に、脛が腐つてとれてしまふのが分らぬか。罰あたり、忌はしいこと〳〵。世の中には生れた時から盲であつて、手足の不具のものもあるが、それでも魂は人間の魂をもつてゐる。おのれは五體のどこを不十分に生みつけられたのだ。少しも不十分な所のないのに、何故人間らしい根性をもつてをらぬのぢや。父親がちがつてゐるから、母の心がひがんで、それでおのれの頭の中へ惡い性根が入りこむのだと他人からいはれまいとして、おのれの一擧一動は、何かにつけて皆病の種になるのぢや。かうしておのれが心の中にもつてゐる劍でもつて、母の壽命は削られるわい。おのれは此間も、高槻の伯父御が御主人の金を引負いなさつたなどと、よくも〳〵此母をうま〳〵と欺しをつたなあ。たつた今兄の太兵衛に行き合うて聞けば、おのれが野崎であばれた爲に、伯父は武士としての面目が立たないで、浪人して大阪へ下るとの便りだ。これでもつて、おのれの嘘がすつかりばれてしまつた。あの時母がすつと德兵衛殿へ話しでもしてゐて、あとで事實が知れでもしたとすると、さてはあの事件は親子の云ひ合せの出鱈目であつたかと疑はれ、夫婦の義理もかけてしまふ所であつた。内でも外でもおのれが噂さに一度だつてろくなことを聞きはせぬ。その惡い噂をきく度に、母の體の肉は一寸づゝそぎとられてゆくやうな心地のする因業晒しめ。半時だつて此家におくことはならぬ。勘當ぢや出て行け。出てしまへ〳〵」といつて片手で打つたり擲つたりしつゝ、又片手では涙をぬぐふのであるが、拭ふひまのないほど涙は流れるのである。

與「此與兵衛がこゝを出て、どこへ行く所がない」母「ヲ、己が好たお山が所へ出てうせう」と、小腕取つて引出す。かち「ナフ兄樣追出し、私は此跡取ることいやや。堪へて進ぜて下され」と取付けば、母「何知つて。退いておれ。是德兵衛殿、きよろりと見て居て誰に遠慮。エはがいひ、殿き出してくれん」と、朸追取り振り上れば、ひらりと外しひつたくり、與「此朸でわごりよを打」と、はた〳〵と打ちつくる。德兵衛飛かゝり、朸もぎ取り、つゞけ打に七ツ八ツ、息もさせず打ちすへ、はつたと睨む眼に涙。

【註】○何知つて　お前が何を知るか。○枕―關西で天秤棒をいふ。荷物をかつぐ棒。○ひつたくり―烈しくひきとるをいふ。○わどりよ―そなた。

【譯】與兵衛は「此與兵衛は此處を出ては、どこへも行く處がない。」母「おゝ己れが好きなお山の處へ出て行け」といつて腕首をとつて引出す。おかちは「なう、兄樣を逐出し、私は此跡を相續することはいやぢや。こらへてあげて下され」といつて取りつくと、母は「お前が何を知るか、どいてゐるがよい。これ德兵衛殿、きよとんとして見てばかり居て、誰に遠慮をなさるのぢや、何故知らぬ顏をしてゐなさる。えゝ齒がゆい。では私しがたゝき出してやる」といつて天秤棒をとつて、振りあげると、與兵衛は、ひらりと體を外して、それを引とり「此枕でお前を打つぞ」といつて、ぱた〳〵と打つける。德兵衛は飛かゝつて、枕をもぎとり、續け樣に七八つ、息もつかせず打ちすえて、はつたと睨むのであつたが、その眼には涙が出てゐる。

德「ヤイ木で造り、土をつくねた人形でも、魂入れば性根が有。耳あらばよふ聞け、此德兵衛は親ながら主筋と思ひ、手向ひせず存分に踏まれた。腹を借つた生の母に今の樣。傍から見る目も勿體なふて、身が震ふ。今打つたも德兵衛は打たぬ、先德兵衛殿冥途より、手を出してお打ちなさるゝと知らぬかやい。おかちに入聟取るといふは、跡方もないこと。エ、無念な、妹に名跡繼がせては、口惜しと恥入、根性も直るかと、一思案しての方便。あの子は餘所へ嫁入さする氣遣ひすな。他人どし親子と成は、よく〳〵他生の重緣と、可愛さは實子一倍。疱瘡した時日進樣へ願かけ、代々の念佛捨て百日法華に成。是程萬面倒見て、大きな家の主にもと、丁稚も使はず肩に棒、稼ぐ程遣ひほつく。己今の若盛り、一働きかせぎ、五間口七間口のかど柱の主にと、念願を立てこそ商人なれ。たつた一間まなかの門柱に念かけ、母に手向ひ父を踏、行さき僞り騙ごと。其根性がつづいたら、門柱は思ひもよらず、獄門柱の主にならふ。親は是が悲しい」と、わつと叫び入りければ、

【註】○土でつくねた人形　これは人形淨るりを批評したものとも見ることが出來る。實際巧につかへば魂あるが如く見えるからである。○主筋と思ひ…お前は主人の子だから、お主人の血筋と思つて…。○先德兵衛殿―先代德兵衛、卽ち死んだお澤の夫。此邊忠義精神の巧なる現はれは時代の姿を描き出して殘す所ないと思ふ。○他生の重緣―前生の緣が重なつて愈々深い因緣となつたこと。○日進樣―日親樣の事。日蓮宗の名僧にて、應永年間立正治國論を書いて、將軍義敎を諫め、却つて怒にふれて、燒け鍋を頭にかぶされたが、動かず、鍋かぶりの日親といはれた。高津の正法寺に日親堂がある。○代々の念佛―代々淨土宗とか眞宗などで念佛をとなへてゐるものが。○百日法華―他宗のものが一時日蓮宗になるをいふ。○遣ひほつく―遣ひすてる。○一間まなか―一間半。○行さき―行つく先では、方々では。○獄門柱の主―刑場にて首を斬られて棚や柱の上でさらしものになるだらうの意。

【譯】德「やい、木で造つたり、土をつくねて作つた人形でも、魂がはいると性根がある。耳があらばよく聞け。此德兵衛は、そちに對しては親でありながら、そちは主人の血筋であると思つて、手向ひもしないで、思ふ存分にそちに蹈まれた。だが腹をかりた生みの母に對して、今のざまは何だ。はたから見てゐる目にも、勿體なくて身體がふるへる。今打つたのも德兵衛が打つたのではない。先代德兵衛殿が冥途から手を出してお打ちなされるのだとは知らぬか。おかちに聟を取るといふのは跡方もない嘘だ。えゝ無念な、妹に家督をつがれては口惜しいと思つて、そちが恥入つて、自然と根性も直すだらうかと思つての上の方便なのだ。あの子は他所へ嫁入させるから、心配するな。他人同士が親となり子となるのは、よく〳〵前世からの因緣が重なつてのことだらうと思つて、可愛さは實の子一倍だ。そちが疱瘡を病んだ時だとて、日親樣へ願をかけて、代々念佛を唱へてゐたものが、一時法華宗に改宗したりした。これほど何かにつけて面倒見て、大きな家の主人にもなるやうにと、丁稚もつかはず肩に棒をかついで稼ぐのに、稼げは稼ぐほど遣ひ捨てゝしまひをる。おのれは今の若い盛りに一働きかせいで、五間間口七間間

口の門柱の主人にもなるやうにと、念願をたてるこそが商人ともいふべきに、たつた間口一間半の門柱に思をかけ、母に手向ひをしたり、父を蹈みつけたり、おまけに行きつく先では僞りをいひ謾りをやる。その根性が續いて行つたら、門柱なんか思ひもよらぬこと、獄門柱の主人になることであらふ。親はこれが悲しい」といつて、わつと叫び入ると——

母「エ、もどかしい徳兵衛殿。石に謎かける樣に口でいふて聞奴か。出てうせ〳〵。うぢ〳〵ひろがば町中よせて追出す」と、又追取つて母がつゝばる枕の先、怖ひめ知らぬ無法者、町中といふにぎよつとして、と胸つきたる怪顛顔「なふ兄樣出してわしは跡に殘らぬ」と、縋る妹を押留め、母「きり〳〵うせふ。枕が喰ひたらぬか」と、振上げこすり出されて、越ゆる敷居の細溝も、親子別れの涙川、徳兵衛つく〳〵と、後妻を見送りて、わつと叫び聲を上げ、慾「彼奴がかほ付背恰好、成人するに從ひ死なれた旦那に生寫。あれあの辻に立たる妻を見るに付け、與兵衛めは追出さず、旦那を追出す心がして勿體ない悲しいはいの」とどうと伏し、人目も恥ぢず泣聲に、憎い〳〵も母の親、たしなむ涙堪へ兼、見ぬ顔ながら伸上り、見れ共餘所の繪幟に、影もかくれて三重

【註】○もどかしい—じれつたい。はがゆい。○石に謎かける—一向にたへぬ意。○うぢ〳〵…ぐづ〳〵するなら。○町中…町中の人を集めて…。町の人とは年寄とか五人組の人々などの意であるが、これにても當時の個人が何の力なく、社會の力が如何に強いものであつたかゞ分るのである。すぐ次にも、町中の聲で與兵衛がぎよつとするとある。○と胸つく—とむねは胸、心、とむねつくはびつくりする、胸をつく。○けでん顛—驚き怪む顔。○きり〳〵—さつさと。○枕が喰ひ足らぬ—なぐられ足らぬか。○憎い〳〵も母の親：憎い〳〵といふ母親も慣み我まんしてゐる涙をたえられなくなつて。○見ぬ顔ながら—見えぬ顔ながら。

【譯】母親は「えゝぢれつたい徳兵衛殿、石に謎でもかけるやうに、口でいふたとて、それを聞き入れる奴であるものか。出て行け〳〵。ぐづ〳〵すれば、町中を呼びよせて逐ひ出す」といつて、又母が枕を取つてその先でつつばると、何一つ怖い物を知らぬ無法者の與兵衛も、町中といふ聲にぎよつとして、胸をつかれたやうな、驚き怪む顔をしてゐる。妹が「なう兄樣を出しては、私しは後には殘らぬ」といつて縋るのを押とめて母は「さつさと出て行け、まだ擲られたいか」といつて、枕を振り上げ、それでこすり出すと、與兵衛は敷居を越えて出てゆくのであるが、其敷居の細い溝にも、親子の別れの涙が川と流れるのである。徳兵衛はつく〳〵と與兵衛の後ろ姿を見送つてわつと叫び聲をあげ「あいつが顔付や脊恰好は、大きくなるにつれて、死なれた先の旦那に生寫しのやうだ。あれあの辻に立つた妻を見るにつけても、與兵衛めを逐出しはせず、旦那を逐出す心地がして、勿體無くもあり、悲しくもあるわいのう」といつて、どうと伏せて、人目も恥づることなく泣く聲につれて、憎い〳〵といつて慣みがまんしてゐた母親も、涙をこらへることが出來なくなつて、見えない顔であるにも係らず、伸び上つて見ると、他所の端午の繪幟にかくれて影も見えなかつた。

下之卷

貴きなれし、年もひさしの、蓬菖蒲は家ごとに、幟の音のざはめくは、男子持の印かや。娘計の豐島屋は、亨主は外の掛一まき、内のしまひと小拂ひと、油賣つたり舞ふたりに三人の娘の世話、まあ姉からと、櫛笥取出しときぐしに、色香揉込む梅花の油。女は髪より形より、心の垢を漉櫛や。嫁入先は夫の家、里の住かも親の家、かゞみの家の家ならで、家といふ物なけれ共、誰が世に許し定めけん、五月五日の一夜さを、女の家といふぞかし。身の祝ひ月祝ひ日に、何事なかれ撫付けて、髪引ゆづの爪

櫛の齒の、吉「ハア悲し一枚折れた」呆れてとんと投櫛は、別れの櫛とて忌むことをと、口にはいはず氣にかゝる。何ぞのつげのお櫛かや。

【註】○**葺きなれし**—毎年蓬や菖蒲を、庇の上にあげて、端午を祝ふから、葺き慣れるといつたのだ。○**年もひさし**—慣れたといつたから、久しいといひ、庇にかけた。○**蓬菖蒲は家ごとに**—邪氣を拂ふといふので、家毎に之を庇にあげたものだ。○**幟**—端午の節句五月五日の日を祝ふ爲に、男の子のある家では幟を戸外に立て、鯉吹流しもたてた。○**掛一まき**—掛即ち貸金一切の始末をする。○**内のしまひ**—家内の整理。小拂は少々の支拂、此等は女房がやるといふのだ。○**舞ふたり**—鼓を打つたり舞ふたり忙しい意にかけ、賣つたり鮮ふたりといつた。○**櫛箱**　櫛箱を取出して、解櫛をとつて、○**色香揉込む**…髪の艶を出す爲に、梅花油といふ、香のいゝ水油を、髪の中へもみこんだものだ。○**心の垢を流櫛や**—女といふものは髪形よりも心の垢をすきとつて美しい心が一番よいものぢや、といふ意から、流櫛にかけた。○**鏡の家**—鏡を入れる箱をさす。元來鏡は女にとつて魂だともいふから、鏡の家即ち鏡より外に女の家はないとしやれたのだ。○**女の家**…五月五日の一夜を女の家といふことに關しては、藤井博士は、丈草の寢轉草にも「裏も隣もぬけて留守居のさびしさ、菖蒲ふく一夜は女の宿なるものを…」などあることから、說明してゐるやうだが、樋口氏によると、それは五月五日のあやめを、家の寶として愛するといふ意のある古人の歌から出たものであらしい。○**身の祝ひ月祝ひ日**—五月五日をさしていつたのだ。○**ゆづの爪櫛**…ゆづは五百非、即ち澤山の意にて、爪櫛は齒の細い櫛。○**投櫛**…古事記によると、伊邪那岐命が、伊邪那美命を黃泉國に訪れ、歸りに、しこ女に追かけられ、ゆづの爪櫛を引き缺いて投げすて、兩者の交通が全く絶えたとあることから、櫛の齒の折れることを忌み、櫛を投げると別れを暗示するとなし、即ち別れの櫛といつてゐる。○**つげのお櫛**—何かをつげる小櫛、と黃楊の櫛とかく。

【譯】年久しくも、庇を葺きなれた菖蒲や蓬は、五月五日の家ごとにかざられ、殊に幟の音のさわ〳〵とするのは男子を持つた家のしるである。娘の子ばかりの豐島屋では、亭主は外の掛乞ひ一切のことを受持ち、女房は内の整理と、小拂ひと、油を賣つたりや何か、その他三人の娘の世話をする。即ちまづ姉の子からと、櫛箱を取出し、解き櫛に梅花の油をつけて、髪の毛に色香を揉み込むのである。女は髪よりも形よりも、心の垢を流きとるのが最良の事である。女にとつては嫁入した家は夫の家であり、里の家は親の家であつて、鏡より外には、女にとつては家といふものはないのであるが、世に誰が許し定めたのか、五月五日の一夜だけは女の家といふのである。豐島屋のお吉は、此五月の端午に、何事もなく大平無事なれと、姉娘の髪を撫つけてゐたのであるが、髪を引つぱつてゐる間に、澤山の細かい齒のある櫛の齒が缺けたので、「はあ一枚折れた」といつて、呆れて櫛を投げたが、投げ櫛は別れの櫛といつて、昔から忌きらはれてゐるので、口にはいはないで氣にしてゐたが、それはそも何かのおつげの櫛であらうか。

掛も十ヲに七左衛門、大かた寄つて中戻り、吉「ア、思ひの外早い仕舞。内の拂もさらりとしまひ、兩替町の錢屋から、燈油二升梅花一合、今橋の紙屋から通帳持つて燈油一升、當座帳に付けてをく。まあ洗足して早ふお休み。明日はとふから禮に出さしやんせ」七「いや〳〵早ふ休まれぬ、天滿の池田町へ往かねばならぬ」吉「フウきやうとい最ふ宜いはいの。池田町は北の端、近所の掛さへ寄つたらば過てのこと」七「こな人何いやる。節季に寄らぬ金の、過て寄つた例はない。今日暮てから渡さふと詞つがふた。つい一走往てこふ。此うちがひに新銀五百八十目、財布の錢も戸棚へ入れて錠おろしや。やがて歸ろ」と立出る。

【註】○**掛も十に七左**…端午の節季に掛金取をするのであるが、それも十中七は集つた意に、七左衛門をかけた。○**内の拂**…小口の支拂の事。○**洗足**…足を洗つて。○**禮**—五月の節句の禮まはり。○**けやうとい**…いとはしい。忌はしい。いやなこと。○**過きてのこと**—節季を過ぎてのこと。○**節季**—前にも說いた如く、此頃は二ケ月毎に節季といつて、支拂勘定をしたものだ。だから節季に集らぬ金は、それを過ぎると集らぬといつたのだ。○**詞つがふた**—約束した、誓つた。○**うちがひ**—金入の胴卷になつた

ものゞ、一種の帶樣の袋の底のないもの。○**新銀**—寶永六年頃から、正德元年頃までに出來た銀貨は改鑄毎に惡質となり、遂には其價も四分一位になつてしまつたが、正德四年九月以後に出來た銀貨は寶永前の銀貨と同質以上になつた、此正德四年後の銀貨を新銀といつてゐる。六十匁を大凡金一兩と計算した。

【譯】掛金を十に七つ、卽ち大かた寄り集つたので、七左衛門は中途で立戻つたのを見ると、お吉は「あゝ思ひの外に早いお仕舞だ。內の方の小拂もすつかり仕舞つて、兩替町の錢屋から、燈油二升、梅花油一合と、今橋の紙屋から通ひ帳をもつて燈し油を一升、買ひに來たから、それは當座帳につけておきました。まあ足でも洗つて早くお休みなされ。そして明日は早くから禮廻りにお出なさんせ」。七左「いや〳〵早く休まれぬ。天滿の池田町まで行かねばならぬ。」お吉「ふう、いまはしい、もうよいではないか。池田町は北の端だ、近所の掛金さへ寄つたら、節季過ぎてのことになされい。」七左「お前は何をいふのだ。節季に寄らぬ金が、節季を過ぎてから寄り集つた例しはない。今日暮れてから渡さうといふ約束だつた。つい一走り行つて來う。此胴卷に新銀が五百八十目ある。財布の錢も戸棚へ入れて錠をおろしておくがよい。ぢきに歸るわ」といつて立出た。

吉「申々そんなら酒一ッ。姉それ燗して進じや」と、立つて戸棚へ德利からちろりへうつせば、七「アこりや〳〵、燗せいでも大事ない。肴も盃もいらぬ、中がさ添へて持つて來い。夜が短かい氣がせく。そこからつげ」姉「あい」とは云へどとどしては、手もとどかねば立上り、つぐも受くるも立酒を、お吉見付けて「そりや何ぞ、忌々しい。子共は頑是がないにもせい、立酒のんで誰を野送り。ア氣味わる」と、いはれて夫もちやつと腰掛取直し、七「掛乞に行く門出にはか行の立酒。此世に殘らぬ〳〵」と、祝ふ程なを哀世の、永き別れと出でゝ行く。母を見習ふ姉娘、夜るの衾をしき〳〵に、歌「呉座よ枕よ、蚊帳の釣手は長けれど、屆かぬ足の短か夜や」姉「おでんをろくに寢させて、母樣もちとおやすみ」といひければ、母「ヲ、でかしやつた。父樣もまだ遲かろ。蚊帳の內から表は母が氣を付ける。我身もねゝしや」姉「いゐ〳〵、わたしは眠たふござらぬ」と、いひつゝ眠ぶるもおとなششし。

【注】○**ちろり**—銚子。一卷口繪。○**中がさ**—關西で塗物の木皿をかさといふ。その中位の大きさのを中かさ。○**とどし**—とどしは坐止。十歲にかく。姉娘は上の卷に、九歲とあつたから、十歲位では、丈が低くて、坐しては手が屆かぬといつたのだ。○**頑是がない**—頑も是もない、卽ち理非のわきまへがない。○**立酒**—葬式の時飲むものだから緣起が惡いといつたのだ。○**野送り**—野邊送り、葬式○**はか行の立酒**—はかゆきは、はかがゆく、卽ちはかどる意と、墓行とをかく、云ふてる人は前者の意でいつてるのだが、作者は後の意でいつてるのだ。卽ち門を出る時に、掛乞が拂るやうに立ち酒をのむといふのは、うまく事件が拂るやうに立酒をのむといふ意から、此世に思ひ殘すことはないといふのだ。それを作者では墓へ行くから殘らぬとかけたのだ。かうして作者は例によつて、此作の結果を豫想させようとしてゐるのであるが、作の効果からいふと非常に損なやり方である。○**祝ふ程なを哀**…七左の方で緣起よくと祝つてゆくから、それが永き世の別れとなる結果を思ふと、出てゆくのが一層あはれだといふのだ。○**しきりに**—布團をしきながら、莫蘆よ枕よと歌つてるのだ。○**足の短夜や**—丈が低くて釣手が屆かぬのに、足の短いのと、時候の上から夜が短い時といつた。○**おでん**—末の娘、○**ろく**—平、○**おとなششし**—音無しと大人らしく眠るとをかく。

【譯】お吉は卽ち「もし〳〵それでは酒でも一つ召上れ、姉娘よ、それ燗をして差上げよ」といつて、立つて戸棚へ行つて、德利の酒を銚子へ移すと、七左は「あゝこれ〳〵燗をせずともよい。肴も盃もいらぬ。中位の木皿を一つもつて來い。夜が短いから氣がせく。そこから注げ」といふと、姉娘は「あい」といふが、坐つては手も屆かぬので、立上つて注ぐ。受ける方でも立つてゐるので、お吉はそれを見つけて、「それはどうしたのぢや、忌々しい、子供は幾ら物が分らぬにもせよ。立酒をのんで出るなんて、誰を野邊送りなさるのぢや。あゝ氣味が惡い」といはれると、夫の七左もちやつと腰掛を直して、「掛乞にゆく門出に、拂がゆくやうにとの立酒をのむ。これでは此世に掛錢は殘らぬ〳〵」といつて緣起祝をするのであるが、それほど猶更、永き世の別れとなるやうに出てゆくのがあ

はれである。母親を見習つて心掛のよい姉娘は、夜の衾をしくべく、莫蓙よ枕よ、蚊帳よと歌つてゐるが、その蚊帳の釣手は長いけれども、丈が低く足が短くて、手の屆かぬ如く、夜は短夜である。姉娘は卽ち「おでんを平らに寢かせて、母様もちとお休みなされ」といふとお吉「おゝよくいふた、父様もまだ遲いことであらう。表の方は蚊帳の中から私が氣をつけるから、お前も寢るがよい」といふと、姉娘は「いえ〳〵私はねむたくありませぬ」といひながら、すうと眠つてしまふのも靜かでありをとなしいことである。

此節季越すにこされぬ河内屋與兵衛、手筈の合はぬ古袷、心計が廣袖に、提たる油の二升入、一生さゝぬ脇差も、今宵こじりの詰りの分別。勝手知つたる豐島屋の、門の口覗く後より、「與兵衛殿じやないか」與「ヲ、與兵衛じやが誰じや」と、振返れば上町の口入綿屋小兵衛。「アこなたは順慶町へ行けば、本天滿町親御の所へと云はるゝ、親御へゆけば、『追出したこゝにはゐぬ』と有る。貴様は留守でも判は親父の判。新銀一貫目、今宵延びると明日町へことはる」與「ハテこゝな人はいきかたの惡い。手形の表こそ一貫匁、正味は二百目、今宵中にすませば別條ない約束では無いかいの」小「されば明日の明六ツ迄にすめば二百匁、五日の日がによつと出ると一貫匁。元二百匁を一貫匁にしてとれば、こつちの德の樣なれど、親父殿にひごうの金を出さするが笑止さに、こなた最員でせつくぞや。今宵急度すましやや」與「小兵衛こりや念いるゝな、河内屋與兵衛男じや〳〵あてが有る。鷄の鳴く迄には持ていく、眠たくと待つてもらを」小「はて今宵すまして入用なれば、明日又直に貸すはいの。此方も商賣、一貫目や二貫目は何時でも、其男氣を見屆けた」と、詞で與兵衛が首しめる、綿屋小兵衛は歸りけり。

【注】○越すに越されぬ—金がなくて拂が出來ぬことをいつてゐるのだ。○手筈のあはぬ古袷—豫想と實際とが合はぬ意に、袖口の合はぬ古袷の廣袖を着てゐたとかく。○廣袖—所謂丹前式に、どてらのやうに、袖口がすこしも縫つてないのをいふ。心は大きなことを考へてゐるが、手筈は一寸も合はないで、一向に思ふやうにならぬ狀態をうつしたのだ。○一生さゝぬ—上に二升といつたから、一生と一升とかけた。めつたにさゝぬ脇差。○こじりの詰り—上の處で脇差といつたから、鎗といひ、小尻のつまつた、卽ちどうにもかうにも動けなくなつた意を表はした。○口入—くにふといひ、金錢貸借、地所買賣などの世話をするをいふ。○町へことはる—町の年寄などの役人へ屆出る。役所へ屆出る。○いきかた—こゝは意氣方。心だて。○手形—證文。證文の面には。○明け六つ—朝の六時。○ひごうの金—非道の金。○笑止さ—氣の毒さ。○せつく—お前をひいきにするからこそ催促する。○念いるゝな—念を入れていふには及ばぬ。○今宵すまして…今宵一旦返濟すれば。節季だから一旦返せよといふのだ。○何時でも…何時でも商賣だから貸す意。○詞で首しめる…眠くとも今夜きつともつてゆくといふから、男氣を見屆けたからには、大丈夫であらうなと、詞をはいて、ぬきさしならぬやうにすることを、首をしめるといひ、與兵衛の死をこゝでも豫想し、更に眞綿で首しめる意もふくませたのだ。

【譯】此節季を越さうとして、なか〳〵越すことの出來ぬ河内屋與兵衛は、手筈の合はぬのに、袖口をぬはぬ古袷を着て、心ばかりは廣々として、二升入りの油入れをさげて、めつたに差さない脇差も、今宵どうにもかうにもならなくなつた分別の上でさして、勝手を知つた豐島屋の門の口を覗くと、そのあとから、「與兵衛殿ではないか」といふものがある。與兵衛「おゝ、お前は、順慶町の兄御の處へゆけば本天滿町の親御の處へ行けといふ、親御の處へゆけば逐出してしまつて、此處にはをらぬといふ。それにしてもお前は留守をあけたとて、判は親父の判になつてゐる。新銀一貫匁今宵を延びると、明日は町役所へ屆けるぞ」。與兵「はてお前は心意氣の惡い人ぢや。證文の面こそ一貫匁になつてるが、借りた正味は二百目だ。今夜の中に返せば一向差支ない約束ではないか」。小兵衛「さうとも明朝六時までに戻せば二百目だが、五日の日がによつと出てしまふと一貫匁の約束だ。元金二百匁を一貫匁にして貰へば、おれの方の德のやうだが。お前の親父殿に、非道な金を出させるのが氣の毒さに、お前をひいきするからこ

そ、かうして催促するのぢや。今宵の中にきつと返すがよい」。與「小兵衛、これ念を押すには及ばぬ。與兵衛は男ぢや〳〵、ちやんと當がある。鶏の鳴くまでにはもつてゆく。眠くてもそれまで起きてゐてまつてもらはふ」。小兵「はて今宵すましてしまつて、またあとでその金が入用とあらば、明日になれば又貸すわい。此方も商賣ぢや、一貫目や二貫目の金はいつでも貸すよ。必ず返すといふ男氣を見届けた、大丈夫だらうな」といつて、與兵衛の首を詞で絞めておいて、綿屋の小兵衛は歸つて行つた。

與兵衛見事に請合は請合しが、一錢のあてもなし、茶屋の拂ひは一寸遁れ、拔差ならぬ此二百匁。「有所には有ふがな。世界は廣し二百匁などは、誰ぞ落しそふな物じや」と、後を見れば小提灯、「河といふ小文字は此方の親父。南無三寶」と、鎖いたる店に平蜘蛛の、ひつたり身を付け身を忍ぶ。德兵衛は氣も付かず、豐島屋のくゞりそつと明け、「七左衛門殿お仕舞か」と、つゝといれば、吉「是は〳〵德兵衛樣、此方のはまだ仕舞はず、天滿の端まで行かれます。私は取紛れお見舞も申さぬに、よふこそ〳〵。此際は與兵衛樣の事に付、いかひお世話でござんしよ」と、蚊帳より出れば、

【註】○一錢―當時錢にあたる金といへば、孔のあいた錢で、つまり錢は文にあたる。だから一錢は一文のこと。○一寸遁…一寸何とかいつて遁れる法もあるが、此借金に對しては、刀が拔きもさしもならぬが如くどうにもならぬ意。○有所には…金のある所には二百目でも一貫目でもあるだらうがな。實際今日の世界でも、一錢の金もない所にはないが、有る所には百萬でも千萬でもあるといふ不合理が世の通弊であるのだ。これは與平ならずとも誰しも叫びたいことだ。○平蜘蛛の…蜘蛛の如く、ぴつたりと身をすりつける。○お仕舞か…もう用事もすんで暇かの意。關西の挨拶だ。○際―節季の際。端午などの一兩日前をいふ。

【譯】與兵衛は見事に請合ひは請合つたものゝ、一文の當てがあるではない。茶屋の拂ひに對しては一寸遁れの態度もやるが、此二百匁に對しては拔きも差しもどうにもならぬ。「有る所にはこんな金位はあるだらうがな。世の中は廣いから、二百目位の金は誰か落してをりさうなものぢやが」と思つて後を振り向いて見ると、小提灯が見える。それに「河といふ小文字があるからには、此方の親父にきまつた、これはしまつた」と思つて、閉めた店に平蜘蛛のやうに、ぴたりと身をつけて忍びかくれる。德兵衛は氣もつかないで、豐島屋のくゞり戸をそつと開けて、「七左衛門殿お仕舞か」といつて、つとはいると、お吉は「これは〳〵德兵衛樣、此方の主人はまだ仕舞はないで、天滿の果まで行きました。私は取紛れてお見舞もしませぬのに、よくこそお出で下さいました。此節季間際には與兵衛樣の事で、さらいお心配でござりませう」といつて蚊帳を出ると――

德「さればよ〳〵、こなたは稚い娘御達の世話、我等は成人の與兵衛に世話を燒く。何れの道にも子に世話をやむは親の役、苦勞共存せぬ共、引付けて一所に有中は氣も落付く。あの樣な無法者を勘當すれば、やけを起し、明日火に入るも構はず、謀判似せ判、一貫匁の銀に十貫匁の手形して、一生の首綱かゝる例も有る事と思ひながら、生の母の追出すを、繼父の我等輕薄らしう止られず。聞けば順慶町兄が方に居るとやら。若此あたりへうろたへて見へましたら、七左衛門殿御夫婦云合せ、父親はがつてん、隨分母に佗言いたし、どしやう骨入替、二たび內へ戻る樣に、御異見偏に賴み入る。こちの女房お澤が一家一門皆侍。共習はかしか思ひ切つては見返らず、義理がたい生れ付。夫に似ぬ道樂者、本親の旦那もぎやうぎづよく、義理も情も知つたる人。二人の子共に心をつくすは、皆古旦那への奉公。今與兵衛めを追出し、一生荒い詞も聞かぬ親方に、草葉の蔭より恨を受くる、無果報は此德兵衛一人。推量なされお吉樣」と、烟草に涙まぎらして、むせ返るこそ道理なれ。

【註】○引付て一所に…自分の所へ引つぱりよせて同居してゐる時分は、何といつても心は落ちつく。○謀判…賢の判。偽判。○一貫匁の銀に…貸證文をこしらへて、價格をごまかすのだ。○輕薄らしう—お追從らしく。お愛想らしく。○うろたへて…うろ〳〵して、まちがつて來てもしたら。○どしやう骨—性骨にどをつけたのだが、どは詈の意をもつてゐる。○習はかしか—習慣か。○思ひ切つては見返らず—一旦思ひ切ると、ふりむかぬ。○本親の旦那…死んだ旦那である與兵衛の本當の親の德兵衛のこと。○行儀强く—きちんとした處がある。○無果報—不運、不幸。

【譯】德兵衛は「さうぢや〳〵、お前は小さい娘御達の世話心配をなさる、私は大人の與兵衛に心配する。どの道子に世話をやくのは親のすべき役目であるから、苦勞とも思ひませぬが、側に引つけて、一緒に住んでゐる間はそれでも心が落つく。あの樣な無法者を勘當すると、自棄を起し、明日火の中へはいるといふやうな危い目にあふことも何とも思はず、僞印似せ判をして、一貫匁の銀に對して十貫匁の證文をこしらへて、一生涯首に綱をかけられるやうなことも有らうも知れぬと思ふものゝ、さりとて現在生みの母親が逐出すといふのを繼父の私が、追從らしく止めることも出來ません。聞けば順慶町の兄の所に居るとか、若し此邊りへまちがつて、うろついて來でもしましたら、七左殿御夫婦が云ひ合せて、父親は承知だから、母に詫びをして、性根を入れかへて、また家へ戻つて來るやうに、偏に御意見をお賴みします。私の女房のお澤が一家一門は皆侍であるので、其習慣か、お澤も一度思ひ切ると、あとをふりかへらぬといふ義理がたい生れつきであるのに、あの道樂者はそれに似もしませぬ。本親の旦那もきちんとしたきつい所があつて、義理も情も知つた人でありました。私が二人の子供に對して心を靈すのは、皆先の旦那への奉公ぢや。今與兵衛めを逐出して、一生の間荒い詞もかけられなかつた親方から、草葉の蔭で恨まれるのは、何といふ不幸なことか。德兵衛の不運を御推量なさつて下され、お吉樣」といつて、煙草にむせたやうな恰好をして、涙をまぎらすのも尤もである。

吉「ムムウ思ひやりました。こちのも追付歸られふ、逢てお話しなされませ」德「いや〳〵何方も今宵のこと萬事のお邪魔。是此錢三百、女房が目顏を忍び、つい懷へ入れて出た。與兵衛めがうせたらば、追付正氣に赴き、さつぱりと肌の物でも買いをれと、ゆめ〳〵我等の名を出さず、七左殿の心付かどう成共、御機轉賴み入」とさし出す。後の門口、「お吉樣お仕舞か」と、をとづるゝは女房お澤が聲。德兵衛びつくり、「ハッ逢ふては氣の毒隱れたい。卒爾ながら御免なれ」と、かくるゝ蚊帳のうしろ影、澤「是々德兵衛殿、我女房に隱るゝとは何事」と、聲かけられて夫も敗もう、お吉もどまくれ挨拶なく、そとには與兵衛、「サア母のかまがわせた。何いはるゝ」とくるゝの穴、耳を付けてぞ聞きゐたる。

【註】○今宵のこと…今宵節季のことだから忙がしからう。○三百—三百文。○うせたらば—來たら。○正氣に赴き—眞人間になつて。○肌の物—着物の意と解すべきだ。○卒爾ながら—ぶしつけながら。○敗もう—どうすることも出來ず、あはて騒ぐ意。○どまくれ—うろたへて度膽をつぶすこと。○母のかま—かまは鎌の意ととり、曲つた心と解する場合もあるが、此處は暮しやと取るがよい。○わせた—來た。

【譯】お吉は「むゝよく分りました。主人もやがて歸りませう。逢つてお話しなされませ」。德「いや〳〵、今宵は何方も忙がしい時だから、萬事のお邪魔になります。これ此錢三百文、これは女房の目や顏を忍んで、つい懷へ入れて來ました。與兵衛めが來ましたら、追付け正氣に立歸つて、さつぱりと着物でも買へといつて、決して私の名を出さず、七左殿の心付であるか、それとも何とでも御機轉をおきかしなされて、やつて下され、お賴みします」といつて差出す。後の門口から「お吉樣お仕舞か」といつて、此時訪れて來たのは德兵衛の女房お澤が聲である。德兵衛はびつくりして「はッ逢つては氣の毒だ隱れたい。ぶしつけながら、御免下され」といつて、かくれる蚊帳の後ろ影を見つけて、お澤は「これ〳〵德兵衛殿、自分の女房に隱れるとは何事ぢや」と聲をかけられて、夫もうろたへ騒ぎ、お吉もあはてゝ度を失ひ、挨拶もせず、外では與兵衛が「さあ、やかましやの母が來た。何をいふだ

らう」と思ひながら、くるゝの穴に耳をすりつけて聞いてゐた。

女房お澤腰打かけ、「ナフ徳兵衛殿、七左衛門様もお留守といひ、内のことはそこ〳〵に。何時あはふと儘の向ひどし、互に忙しいきはの夜さ、こゝへは何の用が有る。「惡性する年でもなし」、ムウ又與兵衛めが事くやみにか。如何に繼しい子なればとて、餘りに義理過た。しんじつの母が追出すからは、こなたの名の立つことはない。此三百の錢のらめに遣るのか。つね〳〵に身をひづめ始末して、あいつに遣るは淵へ捨つるも同然。其あまやかしが皆毒がひ。此母はそふでない。サア勘當と云ふ一言口を出るがそれ限り、紙子著て川へはまらふが、油ぬつて火にくばらふが、うぬが三味、惡人めに氣を奪れ、女房や娘は何になれ。サア〳〵さきへいなしやれ」と、引立る袖をふりはなし、「エ、嘸むごいぞやそふで無い。生立から親は無い。子が年よつては親と成。親の始は皆人の子。子は親の慈悲で立つ、親は我子の孝で立つ。此徳兵衛は果報少なく、今生で人は使はず共、いつでも相果し時の葬禮には、他人の野送り百人より、兄弟の男子に先與跡與舁れて、あつばれ死光りやらふと思ふたに、子は有りながらその甲斐なく、無縁の手にかゝらふより、いつそ行倒れのしやかになひが、ましでおじやるは」と、又むせ返るぞあはれ成る。

【註】○内のことは…内のことはいゝところにしておいて。○何時あはふと…向ひ同士だから逢はうと思へばいつでも逢へるに。○惡性―道樂。○義理過ぎた―義理を立て過きた。○ひづめ―苦め、歪め苦む。○毒がひ―毒で飼ふことになる。毒を飲ませるも同じだ。○紙子著て川へはまる―自棄自滅に例へる諺。藤井氏說。○うぬが三味―自分の思ふがまゝ、したいまゝ。○何になれ…何うにでもなれといふのか。○果報少く―薄倖で。○死光り　死んでの後の光榮を得ようと思つたに、○無縁の手に…縁もゆかりもない人の手にかゝるより。○しやか荷ひ―釋迦の寢像の如く、仆れて死んだまゝ、戸板などにのせて荷ふこと。

【譯】　女房お澤は腰をかけて「なう徳兵衛殿、七左衛門様もお留守ではあるし、内のことをそこ〳〵にして何しに來やつた。向ひ同士のことだから、何時遇はうと思ひの儘ぢやに、互に忙しい際の夜來るなんて、一體此處へ何の用事があるのぢや。「道樂する年でもなし」、むゝ又與兵衛めが事を悔みに來やつたのだな。如何に繼子のことだからとて、餘りに義理を立て過ぎた。眞實の母親が逐出すからには、お前の惡名の立つことはない。此三百文の錢も野良息子にやるのか。平生自分達が身をくるしめ始末して、あいつに遣るのは、まるで淵へすてるも同樣だ。そのやうなあまやかしの態度が皆毒飼をするといふものぢや。此母はそのやうなことはせぬ。さあ勘當といふ一言が口から出るなり、それ限り、あれが紙子着て川へはまらうが、油を體にぬりつけて火にくばらうが、自分の思ふ儘にするがよい。それをお前は惡人の奴に氣をつけてばかり居て、女房や娘は何にでもなれといふのか。さあ〳〵先へ歸らつしやれ」と引立る袖をふりはなして、徳兵衛は「ゑゝ嬶、むごいことをいふぞ、決してさうではない。あの子は生れた時から父親はない。一體で子が年をとると親になり、親の始は皆人の子である。その子は親の慈悲により て立ち、親は我子の孝で立つものぢや。此徳兵衛は仕合が少く、此世では他人を召使などにはしないでも、いつでも死んで葬はれる時には、他人の百人から野邊送りをされるよりも、男の子の兄弟に輿の前後を舁がれて、あつばれ死後の光榮を得ようと思ふたに、子はあつても其甲斐がない、緣もない人の手にかゝつて葬はれうよりか、いつそ行倒れとなつて、釋迦にないにされる方がずつとましぢや」といつて又あはれにも涙にむせるのであつた。

澤「ア與兵衛め計が子では無い。兄の太兵衛、娘なれ共、おかちはこなたの子でないか。サア〳〵早ふ先へ」と押出す。徳「ハア去るなら連立ふ。そなたもおじや」と引立つる、母の袷の懷より、板間へぐはらりと落ちたは何ぞ。粽一わに錢五百。澤「なふ情なや恥かし」と、我身をおほひ押かくし聲を上げ、

「徳兵衛殿眞平許して下され。是は内の掛の寄、與兵衛めに遣りたい計、わしが五百盗んだ。二十年添ふ中、隔心隔ての有るやうに情けない。たとへあの惡人め、お談義に聞様な、周利槃特の阿房でも、阿闍世太子の鬼子でも、母の身でなんの憎からふ。いか成惡業惡縁か、胎内に宿つてあの通りと思へば、ふびんさ可愛さは、父親の一倍なれ共、母が可愛い顔しては、へだてた心に、餘り母があいだてない。かうばりが強ふて、いよ〳〵心が直らぬと、さぞ憎まるゝは必定と、態と憎い顔してぶつつたゝいつ、追出すの勘當のと、むごふつらふあたりしは、繼父のこなたに、可愛がつてもらひたさ。是も女の廻り智恵、許して下され徳兵衛殿、私に隱してあの錢を遣つて下さる心ざし、詞ではけん〳〵と慳貪に云ふたれど、心で三度戴きし。何を隱さふ、あいつは立派好もする奴。取わけ祝月鬢付元結を調へ、人交りもしたからふ。生れて此かた節句〳〵、祝儀缺ぬに此月計、身祝ひもしてやりたさ。見苦しい此恥辱を晒すも、お吉様頼んで屆けん爲。まだ此上に根性の直る藥には、母が生肝を煎じて飲せといふ醫者あらば、身を八ッ裂も厭はぬ共、一生夫の錢金、文字ひらなかちがへぬ身が、子故の闇に迷はされ、盗みして顯はれた。恥かしゆござる」と計にて、わつと叫び入りければ、「道理々々」と夫の歎き、子を持者は身にこたへ、行末思ふお吉の涙、折からに泣く蚊の聲も、いとゞ涙を添へにけり。

【註】○隔心隔ての…隔て心があり、物隔てをすることがあるやう思はれて情けない。○お談義—お說教。○周利槃特—佛の弟子中最も愚鈍なものであるとされてゐた。○阿闍世…印度の摩揭陀の太子にて、父王を殺し、母韋提希夫人を幽閉して王位につき、後に悔悟した。○あいだてない—分別ない意。○かふばり强ふて—剛情張りで。○けん〳〵—慳貪。○立派好きもする奴—はで好みな奴。○祝月—元來正五九月は忌月であつたのが、緣起直しに祝ふ意から祝月となつた。こゝは五月の端午のこと。○身祝もしてやりたさ…身の前途も祝はうてやりたく。○文字ひらなか…文字は一文字即ち一字の計算の意。ひらなかは半文。計算少しも一文も半文もの意。

【譯】お澤「あゝ與兵衛めばかりが子ではない。兄の太兵衛の外には、娘ではあるが、おかちはお前の子ではないか。さあ〳〵早く先へお歸り」といつて押出す。徳「はあ歸るなら一緒に連れて歸らう。お前も來い」といつて引立てると、お澤の袷の懷から、板の間へがらりと落ちたものがあるが何であらう。粽一把に錢五百文である。お澤「なう情なや、恥かしい」といつて、身をその上へおひかぶせて隱し、聲をあげて、「徳兵衛殿眞平許して下され、これは内の掛の寄り集つたもので、與兵衛めにやりたい計りで、わしが五百文盗んだ。二十年間連れ添ふ中に、心で隔て實際に隔てたことがありでもするやうに思はれて情けない。たとへあの惡人めが、お說教に聞くやうな、周利槃特のやうな馬鹿者でも、阿闍世太子のやうな鬼のやうな惡人でも、母親の身から見て、どうして憎からう。どういふ惡い業因か惡緣か、自分の腹に宿つて、あの通りの惡い者と思ふと、ふびんさ可愛さは、父親の思ふ倍もであるが、母の私が可愛いといふ顔をしては、餘りに隔て心をもつた無分別といふものである。剛情張りで、いよいよ心が直らぬと、さぞ憎まるゝことであらうと思うて、わざと憎い顔をして打つたりたゝいたり、追出すだの勘當するだのと、むごたらしくつらくあたつたのは、つまり繼父のお前に可愛がつて貰ひたさからであつた。これも女の廻り智恵から出たものであるから、許して下さい徳兵衛殿、私に隱してあの錢をやつて下さるお心ざし、詞では慳貪なことをいつても、心では三度も頂いてをりました。何を隱さう。あいつは派出好みもする奴で、殊に祝月のことであるから、鬢付油や、元結なども買つて、人附合がしたからう。生れてから節句ごとに祝儀を缺いたことのないに、此月ばかりは、それが出來なくなつたので、身の前途を祝ふてもやりたさから、見苦しくも此恥を晒すのも、お吉様にお頼みして屆けてやらう爲であつた。まだ〳〵此上に、あいつの根性が直る藥として、母の生肝を煎じて飲ませよといふ醫者がありでもすれば、身を八つ裂にされたつて、それは厭ひはせぬが、一生の間に、夫の金

を一文字半文もごまかさない身が、子故に心が暗くなつて迷つて、盗みをしてばれてしまつた。恥しう思ひます」といつて、わつと叫び聲をたてると「道理々々」といつて夫も歎く。子をもつからにはお吉も身にこたへ、行末を思ふて涙を流し、折から泣く蚊の聲さへ甚だ涙を添へしめるのであつた。

惣「ヤ祝日に心もない泣わめき不調法。其錢もお吉様頼み、與兵衛にやつてお暇申しや」と、いへ共女房涙にくれ、「こな様の遣つて下さる其深い心ざしに、盗んだ錢がなんと遣らりよ」惣「ハテ大事ないひらに遣りや」澤「いや許して下され」と、女夫が義理の遣るかた無さ。お吉も涙とゞめかね、吉「ア、お澤様の心推量した。遺憎い筈、こゝに捨てゝ置かしやんせ。私が誰ぞ能さそな人に拾はせましよ」澤「ア、忝い迚ものお情、此粽も誰ぞ能さそな犬に、喰はせて下さんせ」と、又泣出す二親の、心隔てぬくゞり戸も、子の不孝より落ちたるくろゝ、明けて夫婦は歸りけり。

【注】○心もない—無考な。○ひらに—是非に。○義理の遣る方なさ—互に義理を立てあつて、仕方がないので。○迚ものお情—一層のお情け序に。○落ちたるくろゝ—元來互に心を隔てないのだから、樞が落ちて隔てが出來る筈はないが、與兵衛の不孝の爲に、一時くるゝが落ちて、二人の間に隔てが出來てゐた。その隔ての戸もあけ、内外のくゞり戸もあけたといふのだ。この邊の技巧はすばらしいものだ。

【譯】徳兵衛「やあ祝ひ日に無考な、泣きわめいたりするなんて、不調法なことだ。其錢もお吉様に頼んで、與兵衛にやつてお暇して歸れ」といふが、女房は涙に目も暗くなつて「お前が與兵衛に錢をやつて下さるといふ深い志に對しても、盗んだ錢がどうして遣られるか」徳「はて大事ない、是非にやるがよい」。お澤「いや、許して下されゝ、やれない」といつて、女夫が互に義理を立て合つて仕方がない。お吉も涙を止めることが出來ず、「あゝお澤様の心を推量しました。與兵衛様にやり悪い筈だ。此處へすてゝ置きなされ。私しが誰かよささうな人に拾はせませう」お澤「あゝ忝い、一層のことお情によりて、此粽も、誰かよささうな犬に喰はせて下さんせ」といつて、又泣出す兩親の、互ひの心の間には、元來何の隔りもないのであるが、子の不孝の爲に、隔てのくゞり戸が出來てゐた、そのくゞり戸も明けられると同時に、内外を隔てる潜り戸をあけて夫婦は歸つて行つた。

父母の歸るを見て、心一ッに打うなづき、脇差拔いて懐に、さいたるくゞりさらりとあけ、つゝと入るより胸もくろゝも落し付、與「七左衛門殿は何方へ。定めて掛も寄りましよ」と、餘所の方から裏問ひける。吉「誰かとこそ思ふたれ、與兵衛様か。こな様は仕合な。後共いはずよい所へござんした。是此錢八百此粽、こな様へやれと天道から降りました。戴かしやんせ。なんぼ浪人でも際の日の寶、まんがなをろ」とさし出せば、與兵衛ちつ共驚かず、「是が親達の合力か」吉「ハテ早合點な、追出した親達が、なんのこな様へ錢金を遣しやんしよ」與「いや隠さしやるな。先にから門口に蚊に喰はれ、長々しい親達の愁歎聞いて、涙をこぼしました」吉「ム、そんなら皆聞いてか。よふ合點參りしか。他人でさへ目を泣きはらした。此錢一文も空には成まい。肌身に付けて一かせぎ、お二人の葬禮に、立派な乘物に乘せふと云ふ氣が無ければ、男でもくゐでも無い。夫を御背なされたら、天道の罰佛の罰、日本の神々のさか罰が當つて將來がよふ有るまい。先戴いて」とさし出せば、

【注】○心一つに—獨りで。○さいたる…腹にさしてゐた脇差をぬいて、ふところにさし込みを、閉したくるゝにかくゞ閉ざすことをさすといふ。○落しつけ—胸も强いて落しつけ、樞も落して、○裏問ひける—裏から内面の事實をさぐつた。○思ふたれ

…思つたらば。**○後共いはず**—前ともいはず後ともいはず、卽ち早過ぎもせず後すきもせず丁度善い時。**○濃人**—ぶら〳〵して、るものゝ意。**○際の日の賣**—節季際に手に入る財寶。**○まん**—東京では間といふ。關西ではのばしてまんといふ。**○合力**—助力**○仇にはなるまい**—むだに費ふことは出來ない。**○肌身につけて**…徒らに散せず肌身につけ、大事にして。**○乘物**—輿。輿に乘せて野邊送りをするのだ。**○男でも杭でもない**—男でも何でもない意。狂言に「人か杭か」といふのがある。それに對して人でも杭でもないといふことを、男でも杭でもと直したのだ。樋口氏說。**○逆罰**—逆刺などいふやうに、逆は甚しい、きつい意。

【譯】 與兵衛は父母の歸るのを見て、獨り心にうなづき、腰に差した脇差をぬいて、懷にさしこみ、閉さした樞をさらつとあけて、つとはいつて、胸も落つけ、くるゝも落し、「七左殿はどこへおいでになつたか、定めて掛けも寄り集つたでせう」と遠方から裏の事實を問ひかけた。お吉は「誰かと思ふたら、與兵衛樣か、お前樣は仕合せな人ぢや。丁度よい所へ來なされた。これ此錢八百文と此粽、お前にやれといつて、天から降つて來ました。お戴きなされ。いくら浪人でも、節季の際に賣が手に入るとは、間がよいであらう」といつて差出すと、與兵衛は少しも驚かず「これが親の助力か」。お吉「はて早合點な、お前を逐出した親達が、どうしてお前樣へ錢金をお遣りなさるものか」。與「いや隱しなさるな、先きから、門口に立つて、蚊に食はれながら、長々しい親達の愁歎をきいて、涙をこぼしました」。お吉「むゝ、それでは皆聞きなさつたか、よく合點がゆきましたか。他人でさへが目を泣きはらしましたよ。此錢一文だつて、無駄遣ひはなりますまい。大事に肌身につけて、一かせぎなさつて、親御二人の葬の時には、立派な與にのせてかつぐといふ氣がないとすると、男でも何でもありはせぬ。それを背きなされたら、天の罰佛の罰、日本の神々の嚴罰があたつて、先々決してよくないであらう。先づお戴きなされ」といつて差出すと——

與「いかにも〳〵。よふ合點しました。只今より眞人間に成つて孝行盡す合點なれ共、肝腎お慈悲の錢が足らぬ、といふて親兄には云はれぬ首尾。こゝには賣溜掛の寄金も有筈。新でたつた二百匁計、勘當のゆりる迄貸して下され」吉「それ〳〵〳〵、おくを聞ふより口開け、どこに心が直つた。嘘にも金貸してくれとはいはれぬ義理。世間の義理を欠いても、金借つて惡性所の拂ひして、跡から段々行こふでな。成程金は與の戶棚に、上銀が五百目餘り、錢もありは有りながら、夫の留主に一錢でも貸すことはいかな〳〵。いつぞやの野崎參り、著物洗ふて進せたさへ、不義したと疑はれ、云ひ譯に幾日かゝつたやら。なふうとましや〳〵。歸られぬ內其錢持つて、早ふいんで下さんせ」と、いふ程傍へにじり寄り、與「不義に成つて貸して下され」吉「ハテならぬといふにくどい〳〵」與「くどふ云ふまい貸して下され」吉「イヤ女子と思ふてなぶらしやると、聲立てゝ喚くぞや」

【注】 ○新で—新銀卽ち正德の末に出來た新しい銀の意で、その以前の四賣銀などに比べると四倍の價がある。**○二百匁**—此は新銀であるから、凡そ六十匁が一兩にあたる。卽ち大凡三兩餘。**○奧を聞ふより口聞け**…夕霧にも用ひられてゐる。奧の腹の中をきかなくても、口先き丈け聞けば分る意。**○世間の義理**—世間へ對する義理。**○惡性所**—廓などの放蕩の場所。**○後から段々行こふ**…その後で段々と又遊ぶ意。**○上銀**—卽ち新銀さす。**○いかな〳〵**—どうして〳〵。**○うとましや**—忌はしや。**○不義になつて**…前に疑はれた程なら、此度は一層のこと不義をして貸して下され。此邊の恐ろしい力をもつてゐる技巧は絕唱に價する。

【譯】 與兵衛「如何にも〳〵、よく合點がゆきました。只今から眞人間に成つて、孝行を盡すつもりだけれど、肝腎なお惠の錢が八百文では足りませぬ。といつて、事情を親や兄にはいふことの出來ぬ場合ぢや。ところが此處には賣溜の掛金の寄つたのも有る筈だから、新銀でたつた二百匁計り、どうか勘當を許されるまで貸して下され」。お吉「それ〳〵與を聞ふより口をきけで、そのやうなことをいふやうでは、どこに心が直つたといへます。嘘にも金を貸せとはいはれぬ義理合ではないか、世間への義理は缺いても、借金して、茶屋廓の拂をすまして、そのあとから段々とまた出かけて行かふといふのだろ。成程金は與の戶棚に上銀が五百匁餘りあります。錢はあるけれど、夫の留守の間に、例へ一文でも貸すことは、どうして〳〵成りませぬ。いつぞやの野崎參の時、著物を洗ふてあげて

さへ、不義をしたと疑はれて、云ひ譯をするに何日かゝつたやら知れぬ。なう、いやなこと〳〵。七左さんが歸らぬ間に、その錢もつて早く歸つて下され」といふに從つて、側へすり寄つて、與兵衛は「それなら一層不義者になつて貸して下され」。お吉「はて貸すことならぬといふに、くどい〳〵」。與「くどくいふまい、貸して下され」。お吉「女と思ふてなぶりなさると、聲をたてゝわめきますよ」。

與「ハテ與兵衛も男、二人の親の詞が、心魂に浸こんで悲しい物。なぶるの侮るのといふ所へ行くことか。何を隱しませふ、跡の月の廿日に、親父の謀判して上銀二百匁、今晩切に借りました。ヤ、まあ跡を聞いて下され。手形の表は上銀一貫目、借つた金は二百匁、明日になれば手形の通り、一貫目匁で返す約束。夫よりも悲しいは、親兄の所はいふに及ばず、兩町の年寄五人組へ、先樣からことはる筈。今に成つて此金の才覺、泣いても笑ふても叶はぬこと。自害して死ふと覺悟し、是懷に此脇差さしはさいて出たれ共、只今兩親の歎御不便がりを聞いては、死んで此金、親父の難義にかくること、不孝の上ぬり上身上の破滅。思ひ廻せば死ぬるにも死なれず、生ては居られず、詮方なさに見掛けての御無心ぞや。無ければ是非もなし、有金たつた二百匁で、與兵衛が命を繼いで下さるゝ御恩德、黃泉の底迄忘れふか。お吉樣どふぞ貸して下され」と、いふ目の色も誠らしく、そふした事もと思ひながら、かねての僞り是も又、其手よと思返して、言「フウ、まが〳〵しいあの嘘はいの。まだ尾鰭付けていはしやんせ。ならぬと云ふてはきつうならぬ」與「是程男の冥利にかけ、誓言立てゝも成させぬか。ハアはあ何とせふ借りますまい」と、いふより心の一分別。

【註】○なぶるの侮るの…お前をなぶるだの、侮るだのいふやうな所まで心持がゆくことか、さうは氣がならぬ。○今晩切…今晩限りに返す約束で。○兩町—親と兄の居る西方の町、卽ち本天滿町と順慶町。兩町の役人へ屆けるといふのだ。○年寄五人組—年寄は町の事務を取る人、卽町長の如きもの。五人組は五戸を一組として、これに公けの事に關して責任を負はしめたものをいふ。○先樣からことはる—先方貸主の方から申告する。○才覺—工面、金を調達すること。○歎御不便がり—歎きあはれみ。○難儀にかゝること…親父に難儀をかけることになるから。○黃泉の底—死んで後までもの意。○そふした事も…そのやうな事もあるかも知らぬがと思ひながらも。○まが〳〵しい—眞らし。○きつう—斷じて。○男の冥利—男としての仕合。○心の一分別—心の中で一思案した。

【譯】與「はて、與兵衛も男ぢや、二人の親の詞が魂までしみこんで悲しいものを、お前樣をなぶるだの侮るなどいふ所まで心持がゆくものですか。何を隱しませう、先月の二十日に、親父の盜印をして、新銀二百匁を、今晩限り返す約束で借りました。や、まあ、あとを聞いて下され、證文の表は新銀一貫目となつてゐるが、借りた金は二百目、明日になれば證文の通り一貫目として返す約束。夫よりも悲しいのは、親と兄の處はいふまでもなく、親と兄の居る兩方の町の年寄と五人組へ、先方貸主の方から屆け出る筈ぢや。今になつて、此金の工面は、泣いたつて笑つたつて出來ることではない。それで自害して死なうと覺悟して、これ懷に此脇差を差入れて家を出はしたが、只今兩親の歎と憐の樣子をきいては、死んでしまふと、此金によりて親父に難儀をかけることゝなり、不孝の上ぬりをする上に、身代の破滅を來すことになると考へると、思へば思ふほど死ぬにも死なれず、といつてその儘生きてはゐられぬので、仕方なさに、お前樣を見込んで御無心を申すのぢや。無ければ是も非もない、仕方ないが、有る金をたつた二百目丈け貸して下され、そして與兵衛の命をつないで下さらば、その御恩は死んでの後までも忘れはしませぬ。お吉樣どうぞかして下され」といふ目の色も誠らしく見え、或はさういふ事もあるかも知らぬがと思ひながらも、またいつもの僞りで、これもその手であらうと、再び思ひ返して、お吉は「ふう眞らしい、あの嘘はどうぢや、まだ此上尾や鰭をつけて、何とでもいひなされ、ならぬといつたら斷じてなりませぬ」。與「これほど男の身の仕合をかけて、誓をたてゝもなりませんか、はあ、どうせう、借りますまい」といふなり心の中で一思案した。

「そんなら此樽に油二升取替へて下さりませ」吉「夫は互の商ひ内、貸借せいでは世がたゝぬ。成程つめて」と賣場にかゝり、消る命の燈火は、油量るも夢の間と、知らで升取る柄杓取る、後に與兵衛が邪見の刀、拔いて待て共見ず知らず。吉「祝ふて節句も御仕舞なされ。こちの人共割入つて相談、有金なれば役に立てまい物でなし。五十年六十年の女夫の中も、儘にならぬは女のならひ。必私を怨んでばし下さるな」といふ内に、燈油に映る刃の光。お吉びつくり、「今のは何ぞ與兵衛様」與「イヤ何でも御座らぬ」と、脇差後に押隠す。與「それ〳〵急度目もすはつて、なふ恐ろしい顏色。其右の手こゝへ出さしやんせ」與「をつ」と脇差持かへて「是見さしやれ。何も無い〳〵」といへ共、お吉身もわな〳〵、「ア、こな樣は小氣味の惡い、必傍へ寄るまい」と、跡退りして寄る門の口、明けて逃んと氣を配れど、與「ハテきよろ〳〵何おそろしい」と、付廻し〳〵、「出合へ」とわめく一聲。

【註】○取替へて—貸せの意。借りて行って錢にするつもりで云ったのだ。○商ひ内—商賣の内。○つめて…樽につめてあげませう。○夢の間と…命の燈は油をはかるやうな夢の間に消ゆるとも知らず、○邪見の刀—非道の刀。○ばし—強める助辭。○出合へ…さあ來い〳〵といって人を呼よせる聲。

【譯】與兵衛は「それでは此樽に油二升貸して下さりませ」。お吉「それはお互同士の商賣の内で、貸借しないでは世が立ちませぬから、成程つめてあげませう」といつて、賣場の方へいつて、命の燈の消えるのは、油をはかる程の夢の間であるとも知らないで、桝をとり柄杓をとつた。その後の方では與兵衛の奴が非道な刀をぬいて待つてゐるとも知らず、見もせず「節句も祝つて御かたづけなされ、主人ともよく相談し、有る金なら用立てまいものでもありませぬ。五十年六十年連添ふ女夫の仲でも、思ふ儘にならぬのは女の習であるから、必ず私を怨んで下さるな」といふ中に、燈に刀が照つて光るのである。お吉はびつくりして、「與兵衛樣、今のはどうしたのぢや」。與「いや何でもありませぬ」といつて、脇差を後の方へ押隠す。お吉はそれを見ると「それ〳〵たしかに目もすはつて、まあ、恐ろしい顏色だ。其右の手を此處へ出しなさんせ」といふと、與兵衛はうろたへて、「おつ」といひながら、脇差をもちかへて、「これ見さつしやれ、何もない〳〵」といふが、お吉は身もわな〳〵と震ひながら「あゝお前さんは小氣味の惡い人だ、必ず側へ寄りなさるな」といつて、後しさりをして、門口によりて、門をあけて逃げようと氣を配つてゐるが與兵衛が「はて、きよろ〳〵して、何が恐ろしいのだ」といつてつけまはり〳〵するので、お吉は「誰か來てくれ」といつて一聲叫び立てるのであつた。

二聲待たず飛懸り取て引締め、「をとぼね立つるな女め」と、喉笛の鎖をぐつと刺す。刺されて惱亂手足をもがき、吉「そんなら聲立てまい。今死んでは年はもいかぬ、三人の子が流浪する。夫が可愛ひ死共無い。金も入程持つて御座れ。助けて下され與兵衛樣」與「ヲ、死に共ない筈尤々。こなたの娘が可愛ひ程、己も己を可愛がる親父がいとしい。金拂ふて男立てねばならぬ。諦らめて死んで下され。口で申せば人が聞く、心でお念佛南無阿彌陀、南無阿彌陀佛」と引寄せて、右手より左手のふと腹へ、刺いては抉ぐり拔いては切る。お吉を迎ひの冥途の夜風、はためく門の幟の音、あをちに賣場の火も消えて、庭も心も暗闇に、打まく油流るゝ血、踏のめらかし踏すべり、身内は血潮のあかづら赤鬼、邪見の角を振立て、お吉が身をさく劔の山。目前油の地獄の苦しみ、軒の菖蒲のさしもげに、千々の病はよくれ共、過去の業病遁れえぬ、菖蒲刀に置く露の、たまも亂れて三重いき絶へたり。

【註】 ○そとぼね―屋。○縁―つながり。○流通する―頼る人がなくなる意。○金拂ふて男立て…顔を立て名をたてるが爲には、殺人もやるのである。これか此當時の一つのほこりであつた。あはれむべき虚榮心であつた。○あをち―煽り風。○蹈のめらかし―ふみ倒し。ふみには强い意はない。○身内は血潮の…體中が血で眞赤になり赤鬼のやうである。○劍の山…劍をもつてお吉の身をさくといふのを、地獄の劍の山で身をさかれるとせり、それから地獄の苦といつた。此次の句からは、お吉の心や境遇をいつてゐるのだ。○さしもけに―揮しとかく。さすがに。○病はよくれ共―菖蒲の力で、色々の病氣はよけることが出來るが、過去の業病即ち業はのがれられね。これでも作者の佛敎の因果說を取り入れてゐることがある。○業病―人間の世界の一切現象は、凡て因が果を生み、果が因となりて現はれるのだが、そのつもつたものを業といひ因果といふ。○菖蒲刀　業をのがれることと出來ずして、刀によつての意に、菖蒲刀の意をかけ、菖蒲におく露といつた、五月の節句に菖蒲をかざることから縁をとつたのである。元來菖蒲刀は木刀にて、金銀紙にて飾り、男が生れると之を贈つて祝つたものだが、此處では刀の意と、菖蒲の意とに用ひた。○露の玉―菖蒲におく露の玉と露の命の如き魂とにかけ、亂れて死んだといつた。

【譯】 お吉の二聲と呼ぶのをまたず、與兵衛は飛かゝつて、其の體をとつて引しめ、「聲をたてるな女奴！」といつて、咽笛のつながりをぐつと刺した。お吉は刺されてなやましく氣を亂して、手足をばた〳〵とし「それでは聲をたてぬ。今死ぬると、年もゆかぬ三人の子がよるべがなくなる。それが可哀相で死にたくない。金も入るほどもつて行きなされ、助けて下され與兵衛樣！」與兵衛「おゝ死にたくない筈だ、尤も〳〵。お前の娘が可愛いほど、おれもおれを可愛がる親父が可愛い。それにつけても金を支拂つて男の顏をたてねばならぬ。諦めて死んで下されい。口でいふと人が聞くから、心で念佛をとなへる、南無阿彌陀佛々々」といつて引寄せて、右ぢから左の胴腹へ、刺してはえぐり、拔いては切りした。折柄、お吉を迎へる冥途からの夜風が吹いて、門の幟がはた〳〵と搖れる音がする。そして煽り風のために、賣場の火も消え、庭も眞暗になり、與兵衛は心も暗になり、闇の中に撒きちらす油と、流るゝ血との上にお吉を蹈倒し、自分にも踏すべりして、全身は血潮にまみれて、赤づらの赤鬼の如くになり、恐ろしい角を振りたてゝ、劍をもつてお吉の身を引さくのであつた　お吉はまた劍の山にのぼり、目のあたりに地獄の苦みを味ひながら、軒にあやめをさすことによりて、さすがに、誠に色々の病は避けながら、過去の因業の病は遁れることが出來ないで、菖蒲刀にかゝりて、それにおく露の如き魂もみだれて息は絶え果てた。

日比の强き死顏見て、ぞつと我から心もをくれ、膝節がた〳〵がたつく胸を押しさげ〳〵、提たる鍵を追取て、覗けば蚊帳のうちとけて、寐たる子共の顏付さへ、我を睨むと身も震へば、つれてがらつく鍵の音、頭の上に鳴雷の、落かゝるかと肝にこたへ、戸棚にひつたり引出すうちがひ。上銀五百八十匁、宵に聞きたる心當。ねぢ込ねぢ込むふところの、重さよ足もおもくれて、薄氷をふむ火焰踏む。「此脇差はせんだの木の橋から川へ、沈む來世は見へぬ沙汰、此世の果報の付時」と、內をぬけ出一さんに、足に任せて三重

【註】 ○日比の强き死顏―日頃の氣强さの現はれた死に顏。○心もをくれ…恐ろしくなり。○うちとけて…蚊帳の內に、うちとけ、安心して。○ひつたり…戸棚にひたりと、身をよせて引出すのだ。○うちがひ…胴卷。○心當…心當の通り丁度あつた意。○おもくれて…足もおもくるしくなつて。○せんだの木の橋…栴檀の木の橋にて、中の島から船場へかけた橋をいつたと。此橋から沈めようの意。○沈む來世は…川へ沈めようからかけて、未來はどうせ沈んで浮ばれぬが、その來世のさばきはまだ見えぬがの意。○果報のつき時―此世の運の盡きる時。

【譯】 お吉の平生の氣强き姿の現はれた死に顏を見て、ぞつとして、自ら氣をくれがし、膝節をがた〳〵とふるはせ、がたつく胸を押へ〳〵して、お吉の提げてゐる鍵をとつて、蚊帳の中にのぞいて見ると、子供達は皆打とけて寢てゐるが、その顏つきさへも我を睨むやうな氣がして、身がふるひ、それにつれて鍵の音がが〳〵とすると、頭の上で鳴雷が落ちるのかと思ふほど肝にこたえ、こはくなつて、戸棚にひたりと寄り添ふて、うちがひを引出すと、上銀五百八十匁が、宵にきいた心當の通りである。それをふところにねぢ込み〳〵すると、懐の重さに足も重

くなつて、薄氷をふみ火焔をふむが如く、恐ろしくもつらくもあり、「此脇差は梅檀の木の橋から川へ沈めよう、どうせ浮ばれぬ未來のさばきはまだ見えぬし、此世の遐のつき時だ」と思ひながら、内をぬけ出して一さんに足に任せて走つた。

をしてるや、浪華の春は京に負け、京は浪華の景色より、劣るみな月なつ神樂、廓四筋は四季共に、散こと知らぬ花揃。妓の風俗揚屋のかゝり、富士も及ばぬ戀の山、第一日本の名所なり。一年ン三百六十日、紋日が三日足らぬとて、忘八はなげく、女郎は夫程客に厄介を、變替に行く客も有り、好んで賴み賴まるゝ、客は一際いかつげに、籠を飛ばする揚屋客、扇で忍ぶ茶屋の客、一座遊びは女房めく。肩で風切るからぞめき、位を問ふは田舍客、寢て物語る名染客、太鼓過てと咡くは、女郎の手もめのふる舞客、親おや方の持客有り、我身上の滅却有り。飛脚も交り行通ふ、道の間をしばらくも、口たゞ置くは恥らしく、役者物まね地の物まね、小歌淨瑠璃口てんがう、西口東口々に、ゆくも歸るもさはりなき、夕べ〳〵の大寄は、豐成世のいさをしなり。

【註】○をしてるや―浪華の枕詞。○京は浪華の…六月の浪華の新町が京にまさるといつて、新町の賑かさをたゝへたのである。○夏神樂―大祓などの神樂があるのだ。○四筋―新町の遊廓は中央が瓢箪町、右が佐渡島町と吉原町、左が佐渡屋町の四筋を主なる町としたのだ。○散ること知らぬ…人間の花が咲揃つてゐて、四季にも散らぬといつたのだ、○よね―女郎をいふ。○かゝり―構へ、○富士も及ばぬ戀の山―戀の山としては日本第一といふから、富士も及ばぬといつたのだ。つまり新町の當時が如何に盛であつたかを描いたものとも見ることが出來る。○一年三百六十日―これは陰暦の平年の總日數をあげたのだ。ところが此年は閏年と始に出してある。○紋日が三日足らぬ―紋日はもの日にて、廓などでは、此日馴染の客に遊興の約束をさせて費用を支拂はせる習慣がある。ところで此年は閏年で、七月が二度あると上卷に出てゐる。七月が二度あると、自ら紋日も增加するのである。その增加する紋日は三日だと見えて、平年にも、此三日の紋日の增加が望ましいといふ意で、三日足らぬといつて、揚屋の主人が歎くといふのだ。○くつは―揚屋又は揚屋の主人のことで、亡八や忘八の字をあてるは、仁義禮智孝悌忠信の八つを忘れ亡くする場所だからと。くつはの意は、伏見の撞木町の廓を○に十形即ちくつわの形につくつた爲だとも云ひ、又それは吉原のことだともいふ。○客に厄介を…女郎の方では其年閏年だといふので、紋日が多くなつて客に厄介をかけること多く、從つて、折角の約束を變改しに行く客もあるといふのだ。○好んで賴み賴るゝ…反對に自ら進んで、多い紋日の約束を賴まれる客もある。○いかつげに―いかめしげに。○扇で忍ぶ―茶屋で遊ぶ客は扇で顏をかくして忍びゆくといふのだ。○一座遊び―各の客が一人づゝの遊女を侍らして、大一座に集つて遊ぶのは、女房をづれた遊びの觀があるといふのだ。○からぞめき―から騷ぎのひやかし客。○位を問ふ―遊女の階級などをきゝ合せるのは田舍の客のすることだ。○寢て物語る―馴染客は寢物語をひそ〳〵とする。○大鼓過ぎて…三番まで大鼓を打つて、いよ〳〵大門をしめるのであるが、その限りの大鼓即ち最終の三番大鼓（寶永の頃は丑の刻）を過ぎての客は、女郎の情夫だといふのだ。○手もめ…自腹を切る、自分で費用を拂ふ意。振舞客は即ち御馳走する客にて、情夫に對しては女郎が自分から手前振舞をするのだ。○親おや方の持客…親や親方がその費用をもつ客即ち、親や親方からしぼり取る客の意に、沒却即ち親や親方を沒した客忘れた客の意をかく。○身上の滅却…これは駄じやれにて、自分の身上を減ぼす客。○飛脚も交り…語呂の上から客の音につれて出したに過ぎぬものだ。○口たゞおくは…暫くでも默つてゐるのは恥かしい故に、しやべるといふのだ。○役者物まね―歌舞伎のことを昔此名によつて許されたことがあるが、役者の聲色や手まねなどの意。○地の物まね…淨るりには、地と記された所に珠にふしや面白い處がある。そこをまねるのだ。○小歌淨るり―地の物まねの處と重るやうだが、小唄や淨るりなどの意。○口てんがう―てんがうは出まかせの出鱈目、○東口々に…廓の四口や東口を出入するものの口々に歌ふの意。○さはりなき…廓なればこそ、さうしたことも自由自在にやれるをいふ。○大寄―澤山の人の集り。○いさをし―現はれ、てがら。

【譯】浪華の春は京の春に及ばず、之に反して京の夏は浪華の夏景色に及ばず、六月の浪華には夏神樂もあり、新町の廓四筋は、四季共に散ることなき人の花をそろへて、女郎の風俗から揚屋の構まで、富士山も及ばぬほどの戀

の山にて、日本第一の名所である。陰暦の平年一年には三百六十日あるが、閏年に比べると、紋日が三日足らぬといつて、揚屋がなげゝば、またその反對に閏年には、紋日が多いので、女郎はそれほど客に厄介をかけ、また折角承諾した紋日遊びの約束を變改にゆく客もあり、或は自ら好んで約束をなし、頼まれる客もあるが、それは一際威張つて見え、籠を飛ばすのは揚屋客で、扇で顔をかくして忍んでゆくのは茶屋の客である。各女郎をつれて大きな一座に集つて遊ぶのは女房づれのやうに思はれ、肩で風を切つて歩くのは空騒ぎのひやかし客で、遊女の階級をきくのは田舎客である。寢て物語をするのは馴染の客で、大門のしまる限りの大鼓の鳴る時を過ぎてからといつて囁くのは女郎が自拂をする手前振舞の客で、或は親や親方がその費用を拂はせられる客もあり、自分の身上を滅すものもある。又飛脚も交つて、行き交ふ道を、暫くでも口を只でおくのを恥ぢてでも居るらしく、或は役者の壁色をまねたり、或は淨るりの地をまねたり、小唄などを口から出まかせに、西口や東口を出たり入つたりするもの皆口口にしやべつて、自由自在に何のさはりも感じないといふ、毎夜〳〵の人だかりは、まことにゆたかな大平の世の功であり大平の姿の現はれである。

されば山本森右衛門、與兵衛が身持の知せに驚き、暫く主人に暇請ひ、大阪へ立越へしが、女殺して金取しも、慥に夫とは知れぬ共、衆目の見る所、與兵衛に指差す身の放埒、若やと詮義も寄付かねば、先々尋ね廓の内、東口にて尋ねしに、そんじよ其處とは敎へしかど、何れも同局のかゝり。こゝや備前屋、是や敎へし備前屋かと、見まがひたたずみ居る折ふし、手にかさ高な文持て、西の方からくる禿。森「是々物問はふ。備前屋と申傾城屋はいづかた。其御内に松風殿と申傾城、御存じならば敎へてたべ。我等當所不知案内頼入る」とぞかたくろし。禿「フウ子細らしい物の云様、備前屋は此家、西の端に戸のさいた、客の有る局が松風様でござんす。コレお侍様、左の足上げさんせ、ソレ〳〵又右の足も上げさんせ。ヲヽよふ上げさんした。いかい世話の」と、なぶつてひんしやん行過る。

【註】○衆目の見る所…十目の見る所、十手の指す所それ嚴乎の大學の句から來る。○若やと詮義も…若しやさうではなからうかと詮議をしようとするが寄りつかぬので。○先々…行く先々を尋ね。○そんじよ其處…そ所其處、そこら邊の意。○局のかゝり…部屋のかまへ。○子細らしい—鹿爪らしく、勿體らし。○ひんしやん—おてんば、小生意氣。

【譯】そこで山本森右衛門は、與兵衛が身の持方の報告を受けると、驚いて、暫く主人に暇を請ひ受けて、大阪へ來たのであつたが、女を殺して金を取つたのが、たしかに與兵衛だとは分らぬが、大勢の人々の見る所も同じで、皆與兵衛の放埒に對して指をさすので、若しやさうであらうも知れぬと、詮議をしようとするのであるが、少しも寄りつかないので、行く先々を尋ねて新町の廓の中に來り、東口にて尋ねると、そこら邊りとは敎へられたものゝ、何の家も同じやうな家、同じやうな部屋がまへである。これが備前屋か、此が敎へられた備前屋だらうかと、紛らはしくなつて分らないでゐる折柄、大きやかな文をもつて、西の方から來る禿がある。森右は卽ち「これ〳〵、一寸物を尋ねる。備前屋といふ女郎屋はどれだ。その内に、松風といふ女郎があつて、知つてゐるなら敎へて下されゝ、私は此地は不案内だからお頼み申す」とかたくろしくいふ。禿は「ふう、しかつめらしい物の云ひ樣、備前屋は此家ぢや、そして西の端に戸をしめた客の有る局が松風樣でござんす。これお侍樣、左の足をあげさんせ、それ〳〵又右の足も上げさんせ。おゝよう上げさんした。大きにお世話樣」といつて、からかつて小生意氣に通り過ぎてゆく。

森「所柄とて人に馴れ、エ氣輕い奴」と打笑ひ、敎へし局に立寄れば、内に火影は有りながら、戸口ひつしと立詰たり。森「扨こそ客は與兵衛に極る。出るを捕へ逢はん物」と、待間程なく戸を開き、編笠かづき立出る。すかさずひんずとひん抱かゆる。女郎も續いて「こりや誰ぞ。卒爾せまい」と引別る。

森「苦しからず卒爾で無い。をのれ與兵衛め、隱れたらば逢ふまいか」と、笠引ちぎり顏見合、森「ヤアこりや與兵衛で無い人違。まつぴら〳〵面目なや」と、腰折つて手をすれば、きやつも忍びの戀やらん、うなづく計顏かくし、東の方へ走行く。森「河內屋與兵衛に深い中と、音に聞く松風殿。昨日にも今日にも、與兵衛はこゝ元へ參らずか。氣遣の無い用事有つて尋ねる者、隱されては彼が爲ならず。サア眞直が聞きたい〳〵」松「まちつと先に見へまして、是から直に曾根崎へ、叶はぬ用とて御座りました」森「何じや曾根崎へ。南無三寶遲つた。拙者も跡から參らずば成まい。次手に、も一ッ尋ねさせふ。五月の節句前か、後か、六月へ入てば漸〳〵六日。其間にこゝ元で金銀の拂ひ、金澤山に使ふたこと御座らぬか。是も隱さずお知らせなされ」松「どふござんすぞ、金のことは存じやせぬ。やり手にお問なさりんせ」と、いひすて局についと入る。森「是は我等不調法。よしそれとても與兵衛に逢へば知るゝこと。道も知つたる曾根崎へ、たつた一飛一走り」と、尻三のづ迄ひつからげ、揉にもふでぞ三重

【註】○立詰めたり―びしやりと戸をしめてゐた。○編笠―編笠をかぶつて廓などへは出入するが習であつた。○亟萬せまい―輕卒なことをすな。○苦しからず―一向かまはない、仔細はない意。○逢ふまいか…逢ふことないと思ふのか。○眞直ぐが…正直な所を隱さずと。○叶はぬ用とて―行かないではならぬ用があるとて。○三のづ―三の頭は馬の尻についての語で、脊骨の下から三つ目の脊椎をさす、卽ち腰高くの意。○揉みにもふでぞ―ゑいや〳〵と腰をもみ動かすをいふ。脚を進めるにつれて、尻の骨がもむやうに動くのである。

【譯】森右「場所柄のことゝて、人馴れた氣輕い奴だ」といつて笑つて、教へられた部屋へ立寄ると、家の內には火影はあるが、戶口はびしやりと立てつめてある。森右は卽ち「さてこそ客は與兵衛にきまつた。出て來る處を捕へて逢はう」と思ひながら、待つてゐると、間もなく戶を開いて、編笠をかぶつて出て來る。すかさずむづと引抱いた。女郎も續いて出て來て「これは誰だ、輕卒なことをなさるな」といつて二人を引別ける森右は「一向かまはない、輕卒ではない。おのれ與兵衛奴、隱れたら逢はないだらうと思つてるか」といつて、編笠を引ちぎつて顏を見ると、人違ひである。森右「や、これは與兵衛ではない、人違だ、眞平御免、面目もない」といつて、腰を折つて手を合せると、その男も忍びの戀の身であるか、うなづく計りで顏をかくして東の方へ走つて行くのである。森右は「河內屋與兵衛と、深い仲になつてゐるといふ噂をきいてゐる松風殿、昨日も今日も與兵衛は此處へは來ませぬか。お氣遣のない、用事があつて尋ねて居るものだから、お隱しなさると、あれの爲になりません。さあ、正直な話を聞きたい〳〵」。松風「今少し前に來れまして、これからすぐに曾根崎へ行かねばならぬ用事があるからとて行かれました」。森右「何ぢや曾根崎へ？　しまつた遲かつた。拙者も後から行かねばなるまい。次手にも一つ尋ねませう。五月の節句前か、後か、六月へ入つては漸く六日だが、その間に此家にて、金銀の拂ひはどうであつたか、金を澤山に使ふたことはないか、これも隱さずと、お知らせなされ」。松風「どうですか、金のことは知りませぬ。遣り手にお問ひなされ」といひすてゝ、つと局に入つてしまつた。森右「これは私しの不調法であつた。よしそれとて與兵衛に逢へば分ることだ。道も知つてる北の新地曾根崎へ只一飛一走りだ」と尻を三のづまで、引つからげ、腰をもんで走つた。

歌「君を待夜はよやよやよ、西も東も南もいやよ。兎角待夜は北がよい」さきにも待ちは待ながら、こちからひたと行通ふ。道の犬さへ見知る程、うつゝ拔かせし河內屋與兵衛、小菊にあふせを賴もの鴈よ。新町の花を見棄て蜆川、こゝの花屋にたどり寄る。後家のお龜出迎ひ、「たま〳〵見へるお客にこそ、よふお出がさうあうなれ。與兵衛樣はこゝが家、ちと風變り御出を止めて、戻らしやんしたか。小菊樣呼びましや。內は上下座敷もつまる、濱の床几で大く酒盛。きり〳〵と呑かけましよ。小菊樣

サアこゝへ、行燈に油さしやや。油の次手に油屋の女房殺、酒屋に仕替て幸左衛門がするげな。殺手は文藏憎いげな。與兵衛様まだ見ずか。小菊様連ましてちとお出。やれま盃持てこい」と、たつた獨でべり立る。與「後家たしなめ。ちと人にも物云はせい。生れて與兵衛こんなむさい床几の上で、酒呑んだ事なけれど今日は許す。東隣借り足して、與兵衛が座敷分に一ッこしらや。材木諸色諸入目、見事に我等仕る。きつい物か〳〵。エげびた此蒲鉾の薄い切様は」と、潛上たら〳〵暴酒、しばらく時をぞ移しける。

【注】○**君を待つ夜は**…松の落葉五、おもやこそ。「君を待つ夜は、のほんほ、ほんにさ、四も東も南もいやよ。ほんにさ、とかく待つ夜は來たがよい、のほんほ、ほんに〳〵さ」の歌をそのまゝ取つたものだ。此歌をかりて、與兵衛の曾根崎新地行きを歌つたのである。此處北は來たと曾根崎が北にあたりて、北の新地とさへいふからあてたのだ。○**さきにも待は**…小菊の方でもまつてるが、此方から一心に通つてゆくといふのだ。○**あふせを頼もの**…頼もは頼むと、田の面にかける。田の面にゐる雁の如く逢ふことを頼みにして。○**新町の花を見棄てゝ**…南の方の新町に咲く花を見すてゝ、北の方の曾根崎即ち蜆川の花をたづねて花屋に來るといふから、雁が南から北に移るにたとへたのである。巧なる表白である。蜆川は今はつぶされてしまつて、堂島ビルヂンクの前に、蜆橋の停留場によつて僅にその名をとゞめてゐる。なほ此處は古今集の「春霞立つを見すてゝ行く雁は花なき里にすみやならへる」に多少の趣をもつたものだ。○**ようおいてが**　たまに來る客に對しては、よくお出でなされたといふ言葉で迎へるのが相應だ。○**ちと風變り**…ちと風變りな言葉だが、おいでなどいふ詞をやめて、よくお戻りなされたといふが適當だといふのだ。此邊詞をつめて簡潔によくその趣を表はしてゐる。實に名文である。○**濱**—蜆川の岸をさしてゐるのだ、大阪では川岸を凡て濱といつてゐる。○**床几**—幅の廣い緣臺のこと。○**大く酒盛**—これは大きく酒盛ではなくて、大工酒盛であることは、此後で普請のことなどもいひ、大工の酒宴の如く、屋外でやつてゐるから見ても、極めて明なことである。○**きり〳〵と呑かけ**：さつさとやりませう。○**酒屋に仕替へて**…油屋を酒屋に直して、あたりさはりをさけて、七月の七日から中座の歌舞伎に演じられた。そのあとで此淨るりが出來たのだ。○**幸左衛門、文藏**—當時の歌舞伎俳優、竹島幸左衛門と、佐川文藏。○**べり立つる**—喋り立てるを略したものだ。○**たしなめ**—つゝしめ。○**むさい**—むさくるしい、きたない意。○**きついものか**—ゑらいものだらう、素晴しいものだらう。○**僧上だら〳〵**—がらにないゑらがりをしやべるをいふ。

【講】「君をまつ夜は西も東も南もいやだ、兎角待つ夜は來たがよい」といふ歌の心にひかれて、——小菊の方でも待ちは待つてゐるものゝ——與兵衛は自分の方から一心に通つてゆく。かうして路傍の犬さへも見覺えするほど、うつゝを抜かした河内屋與兵衛は、小菊に逢ふのを頼みにして、新町の花を見すてゝ蜆川の茶屋花屋に辿りついた。後家のお龜は迎ひに出て、「たまにお出でになるお客に對してこそ、ようお出でなされたといふのが相應した詞だが、與兵衛様は此處が御自分の家も同然入びたりだから、少し風變りではあるが、御出でなされたといふのをやめて、よくお戻りなされたといひませう。小菊様をお呼びなされませ。家は上も下も座敷がふさがつてゐるから、川岸の床几で大工の酒盛のやうに、野天で大酒盛をなされい、さつさとやりませう。さあ小菊様此處へお出でなさい。行燈に油をさせよ。油といつたついでに、油屋の女房殺を酒屋の女房殺に直して、幸左衛門がやるさうな。殺し手の方は、文藏がやるが、隨分憎いさうな。與兵衛様はまだ見なさらぬか、小菊様をつれて、ちつとおいでなされ、やれお盃をもつて來い」と自分一人で喋りたてる。與兵衛は「後家、つゝしめよ、ちと人にも物をいはせろ。おれは生れて、こんな穢い緣臺の上で酒をのんだことはないが、今日は許す。東隣りの空地を借り足して、與兵衛の座敷として一つこしらへろ。材木一切色々の費用は、立派におれが出すぞ。ゑらいだろ〳〵。ゑゝ、下卑た、此蒲鉾の薄い切り方はどうだい」と、柄にもない空威張をだら〳〵としやべつて、暴れ酒をのんで暫く時を移した。

「與兵衛こゝに居るか、知らす事が有て來た」と、はけの彌五郎床几に腰かけ、「我を侍がさがすぞよ」與「ヤしてそりやどんな侍が」と、胸にぎつくり横たはるも、心に包む惡事の塊。俄に顚動うろ〳〵眼。彌「ハテきよろ〳〵すないやい。昨日から兄が所へ來て居る侍じやとやい」與「ア、夫で落付いた。

高槻のおぢ森右衛門逢ふては難義。こゝへ尋ねて來ふもしれぬ。早ふはづして逢ひともない」と、思へど急にも立たれねば、「何がなしほに」と見廻し〳〵、「アヽ、思ひ出した。新町に紙入忘れて來た。中にうめく程金入れて置いた。つい一走り取てこふ。はけも來い」と立出る。小菊引留、「アざは〳〵と何じやの。有所の知れた紙入、明日なととらんせ」與「イヤそふで無い〳〵。ふところが重とふ無ければ、つんと遊ぶ心がせぬ」と、袖引放し二人連、根から忘れぬ紙入の、空費吐いてぞ急ぎける。

【註】○はけの彌五郎—既に説明したやうに刷毛鬢の綽名。○我—汝。○すないやい—するない、やいは感歎を表はす。○何がなしほ—しほは機會、何かの機會があつたらと。○うめく—うなる、唸をたてる意、澤山の意にいふ。○根から忘れぬ　實際は忘れたのでない紙入と、殺しによつて手に入れたのだから、根本から忘れようとしても忘られぬ紙入。○空費…借上。うそばちの大威張。

【譯】「與兵衛は此處に居るか、知らせる事があつて來た」といつて、刷毛の彌五郎が緣臺に腰を下ろし「お前を侍がさがしてるぞ」といふ。與「や、そして、それはどんな侍だ」といつて、惡事の塊を胞に包んでゐるので、胸にぎくりと、答へるものがあるのである。即ち俄に顫動して目をうろ〳〵させる。彌平は「はて、きよろ〳〵するな い、昨日からお前の兄の處へ來てゐる侍ぢやとよ」與「はあヽ、それで落ついた」といひ、高槻の伯父森右衛門だ、逢ふては難儀だ。此處へ尋ねて來るかも知れぬ。早く逃げて逢ひたくないと思ひながら、急にも立つことが出來ないので、「何かの機會があればなあ」と見廻し〳〵して「あヽ思ひ出した、新町に懐中を忘れて來た。その中には金がうめく程はいつてゐた。つい、一走りで行つて、取つて來ふ。刷毛も行かふ」といつて立かける。小菊はそれを引とめて「あヽ、さは〳〵と何のことぢや。有る所の知れた紙入を、明日にでも取りに行きなされ」といふと與兵衛は「いやさうでない、ふところが重くないと、とんと遊ぶ氣がせぬ」といつて、留められた袖を引放し、土臺から忘れもせねば、忘れることも出來ぬ紙入に關して、空々しい大きなことをいつて二人連で急いて行つた。

熱い茶四五服呑程の、間もすかさず森右衛門、行燈目あてに花屋の門口、「花車に逢はふこゝへ〳〵」と呼出し、「河内屋與兵衛が跡追うて參つた。二階に居るか下座敷か、罷通る」とつゝと入る。花「是々申、新町に紙入忘れたとて、たつた今お歸り」森「何だ歸つた」花「まだ梅田橋越すか越さずか」森「是はしたり又跡へん。然らば明日にも與兵衛が參り次第、酒でも呑せこゝに留置、早々本天滿町河内屋德兵衛方迄急度知らせ。只今參りがけ櫻井屋源兵衛へも立寄、吟味致せば五月四日の夜、大金三兩錢八百受取つたと有る。こゝ元へは何程拂つた。隱しては其方が爲にならぬ。眞直にいへ〳〵」花「私方へも五月四日の夜に入つて、大金三兩錢一貫文」森「シテ其夜は何を著て參つた」花「廣袖の木綿袷、色は慥花色か、しつかりとは覺えませぬ」森「ムウよい〳〵。はひれ〳〵」といひすてゝ、元來し道を引返し、又新町へと三重

【註】○問もすかさず　その位の間もなく、ぢきに。○花車—茶屋などの女將をいふ。○罷通る—御免といふやうな意。○梅田橋—これも昔、蜆川にかゝつてゐたが、今日は蜆川がなくなつたので、電車の停留場として名が殘つてゐる。○跡へん—後だの意。後のこと後へんといひ、同じといふことを、同へんといつた。○櫻井屋　與兵衛の出入してゐた事實によつたものと見える。○一貫文—錢一千文で金一分にあたる。金四分が一兩。○廣袖—袖口をつめぬ着物。○花色—はなだ花。

【譯】熱い茶を四五杯も飲む間もたつかたたぬに、森右衛門は行燈を目あてにして茶屋花屋の門口に立つて「おかみに逢ひたい、此處へ出てくれ」といつて呼出し、「河内屋與兵衛が後を追うて來た。二階に居るか下座敷に居る

か、御免」といつて、つとはいる。おかみは「これ〳〵申し、新町に紙入を忘れたといつて、たつた今お歸りになりました」。森右「何だ、歸つた？」「まだ梅田橋を越すか越さぬ位でござりませう」。森「これはしたり、又後だ、では明日でも與兵衛が來次第、酒でも飲ませ、こゝに留めおいて、すぐに本天滿町河内屋徳兵衛方まで屹度知らせてくれ、只今來がけに、櫻井屋源兵衛方へも立寄り、調べて見ると、五月四日の夜、大金三兩と錢八百文とを受取つたといふ。此家へは何程拂つたか。隱すとお前の爲にならぬ。正直にいふたがよい」おかみ「私方へも五月四日の夜になつて、大金三兩と錢一貫文」。森「してその夜は何を着てゐたか」。おかみ「袖口のあいた木綿の袷で、色はたしか花色であつたか、はつきりとは覺えませぬ」。森「むゝ、よい〳〵、はいれ〳〵」と云ひすてゝ、元來た道を引かへして、又新町へと進んだ。

和讃變生男子の願を立、女人成佛誓ひたり。願以此功徳平等施一切同發菩提心往生安樂國。釋の妙意、三十五日お逮夜の心ざし、お同行衆寄集り、勤も既に終りける。中にも同行中の老體、帳紙屋五郎九郎「昨日今日の樣に思ひしが、早三十五日の逮夜に罷成。廿七を一期として不慮の横死。平生の心立人に優れ、上人の御恩德報謝の心も深かりし。此世こそ劒難の苦は有れ共、未來は諸々の業苦を除き、本願往生疑ひはよも有まじ。此御さいそくに心驚き、彌一遍の稱名も悅んでお勤めなされ。必歎かせらるな七左殿。殺手も其内知れませふ。たゞ御息女の介抱が第一。先立人も夫をこそ滿足」と、しめせば有がた涙ぐみ、七「さやう共〳〵。お吉がことは思ひ忘れ、是も如來のお蔭と、信心堅固に悅びを重ね、行住坐臥に稱名は欠かしませぬ。去ながら乙のおでんめは二ツ子、乳がなふてはと不便に存じ、死んだ翌日金付けて餘所へもらかします。姉はよふいひ聞かせたれば合點して、香花のきれぬ樣に佛壇について計ねますが、なふ中娘めが朝から晩迄、母樣〳〵といふてほゑ居ります。是には困果てました」と、ちやつと後の壁向いて、聲を呑だるすゝり泣。「尤、さこそ」と同行衆も、濡さぬ袖はなかりけり。

【註】○**和讃**—日本語での佛陀讃美の唱歌のこと。○**變生男子**…元來佛教では女人は成佛出來ず、男子に變生の願をたてゝそれで成佛が出來るとされてゐる。即ちかうして、お吉が成佛を得るやうにと願をかけたと、お吉の家に集つた人が和讃をよんだのだ。○**願以此功徳**—淨土の偈の終にある文句にて、願はくは成佛するといふ功徳を平等に施し、一切の人々をして同樣に菩提心即ち佛道に入りて悟りを開く心を起さしめ、安樂國即ち淨土に住ましめんといふ意。お吉を淨土に行かしめ成佛せしめんとする意を、此句によつて述べたのだ。○**釋の妙意**—お吉の戒名。○**逮夜**—凡て忌日の前夜をいひ、此處は三十五日の前夜の意。○**お同行衆**—同じ眞宗の信徒。○**不慮の横死**—思はぬ非業な死。○**劒難の苦**—刀傷の災難にかゝる苦。○**本願往生**—佛が成佛させるといふ誓によつての往生。○**御催促**—お吉の災難は、信仰心を起させる爲の佛の催促の意。○**稱名**—念佛をとなへること、佛の名をとなへ南むあみだ佛といふこと。○**如來のお蔭**…如來が其心を示すお蔭と悅び、即ち信仰心を起せとの催促のお蔭と悅びての意。○**行住坐臥**—起居たえずの意。○**乙のおでん**—末の娘おでん。○**二つ子**—二歳の子。○**もらかします**—遣はしました。

【譯】男子に變生の願を立て、女人も成佛するやうにとの誓をたてた。願くば成佛の此の功徳を平等に施し、凡ての人をして等しく覺りの心を起さしめ、淨土に往生させたまへ、と和讃を唱へて、釋の妙意お吉の三十五日のお逮夜を弔ふ志しとして　お同行衆は集つて、讀經のお勤も既に終つた。中にも同行中の老體の帳紙屋五郎九郎は「たつた昨日今日のやうに思ひましたが、もう三十五日の逮夜になりました。お吉殿は二十七歳を一期として、思ひもかけぬ非業な死に方をなされたが、平生の心立てが人に優れ、眞鸞上人の御恩德に對する報謝の心も深かつた。此世に於てこそ、劒難の苦を受けられたが、未來では色々の罪業の苦を除いて、立派に成佛させるといふ佛の誓により、往生されること疑ひない。かうして佛が信心を起さしめんとする促しに驚いて、いよ〳〵一遍の、稱名念佛も

悦んでなされよ。必ず歎かれるな、七左殿。殺した人もその内には分りませう。差當りては娘さん方の介抱が第一に必要だ、死なれたお吉さんもそれを滿足に思はれることであらう」といひきかせると、七左は有り難涙にくれて、「さやうとも〳〵、お吉のことは忘れてしまつて、これも佛が信心を起せとのお示しのお蔭であると思ひ、信心を固めて悦び、絶えず寢ても起きても稱名念佛はかかしませぬ。だが末娘のおでんは二歳の子で、乳がなくては不便と思ひ、お吉の死んだ翌日金をつけて他所へやりました。姉の子はよく云ひ聞かせた處が了解して、線香やお花のきれぬやうに佛壇の處についてばかりをりますが、なう中の娘の奴が朝から晩まで母様々々といふて泣きます。これには困り果てました」とちやつと後ろの壁の方へ向いて、聲を呑んですゝり泣きをする。「尤もぢや、さうであらう」といつて同行達も袖をしぼらぬものはなかつた。

折節居間の桁梁、通る鼠の怪しからず、蹴立蹴かくる煤埃、反古をちらりと蹴落して、鼠の暴れは靜まりぬ。同行「ソレ何やら落ちた七左殿」七「誠に是は」と取上げ見れば、半切紙に一ッがき、十夕一分五リン、野崎の割付、五月三日と計にて、誰から誰への名宛もなく、色こそ變れ所々血に染つたる書出し一通。七「不思議の物」と手に取廻し、「是は誰やら見た手じやはいの」同行「我等もどふやら見た手の風」七「ア、河内屋の與兵衛〳〵」「それよ〳〵」と四五人の、口も與兵衛に極まれば、思出して七左衛門、「誠に死んだ亡者が物語。四月十一日我等夫婦、野崎參り致せし日、かいしゆの善兵衛、はけの彌五郎、河内屋與兵衛三人連で、參りしと話せしが、其割付に極つた。お吉を殺手も大かた是で知れました。三十五日の逮夜に當り、鼠が是を落すといふも、亡者が知らせに疑ひない。是も佛の御恩德、ア、南無阿彌陀」とひれ伏して、悦ぶ心ぞ道理なる。

【註】○怪しからず―不都合にもの意。○割付―割りまへ。こんな小刀細工は作者としてせぬ方がずつとよかつたが殘念だ。そしてこんなことを佛の恩德とするも感心せぬ。○書出し―書付け。○かいしゆ…皆朱、赤顔の意からつけたのだらう。これも前述の通りだ。

【譯】折柄居間の桁梁の上を通る鼠が、不都合にも煤埃を蹴たて蹴かけして、反古をちらりと落してから靜になつた。誰かゞ「それ何か落ちた、七左殿」といふと、七左が「まことにこれは何だらう」といつて取上げて見ると、半切れ紙に一つ書にして、「十夕一分五厘、野崎の割付、五月三日」とあるばかりで、誰から誰へどうしたといふ名宛もなく、色は變つてゐるが、書付は所々血に染つてゐる。「不思議なものだな」といつて手に取りまはして更に、「これは誰やら見たことのある手ぢやなう」。一人「私もどこかで見た覺えがある。」七「あゝ河内屋の與兵だ〳〵」「それよ〳〵」と四五人の人々の云ふ所も、河内屋與兵衛の手に相違ないときまると　七左は思ひ出して「まことに死んだお吉が話したことがある。四月十一日に私達夫婦が野崎參りをした時に　皆朱の善兵衛、刷毛の彌五郎、河内屋與兵衛の三人連も一緒に參つて居たとの話であつたが　其時の割付にちがいない。お吉を殺した人もこれで大方分りました。三十五日の逮夜に際して、鼠が之を落すといふのも亡者が知せたのに相違ない。これも佛の御恩德ぢや、あゝ南無阿彌陀」といつて平伏して心から悦んだのも道理至極であつた。

氣味惡ながらおり〳〵の、訪音づれも我仕たと、人にいはれじ覺られじと、一倍大柄そらさぬ顔。「河内屋の與兵衛でやす」とつゝと入、與「つい三十五日の逮夜になりましたの。殺した奴もまだ知れず、氣の毒千萬。したが追付知れましよ」と、我と口からむかふの吉左右。七左衛門尻ひつからげより棒追取、七「ヤイ與兵衛、女房お吉をよふ殺したな。をのれはこゝへ縛れに來たか。遁れはない」と棒振上る。與「ア、七左衛門聊爾するな。シテおれが殺した其證據は」七「いふな〳〵、野崎參りの割付、十

夕一分五リンといふ書付、所々に血も付いて、己が手に紛い無い。此外に證據が入るか。同行衆捕へて下され」と、つかみつかん其勢。「南無三寶顯はれし」と、突上る胸の動氣じつと押へて苦笑、與「此廣い世間、幾人も似た手が有まい物でなし。野崎參りの入用はおれがもめ、割付も何にも知らぬ。よい年をして馬鹿ひろぐな。をのれ等迄も同じ樣に立騷いで何と仕をる」七「まつこうする」と、攫み付くを取つて投、寄れば蹴倒し蹈こかし、一世一度の力の出場。棒ねぢたくり一振ふればわつと逃る、透を伺ひ逃げんとすれば、「ソリヤ逃すな」と追取まく。小庭の内を追つ返しつ、二三ど四五ど透を見合せ、くどりぐはらりと逃出る。

【註】○訪番づれも我仕…訪問もやつたし、又殺人などしたと他人にいはれたり覺られたりすることないやうにと。○そらさぬ顔…ぬからぬ顔付。○我と口から向の…我と我口から先方の吉相をしやべる。○より棒…棒ねぢなどやる棒。○逃れはない…逃しはせぬ。○聊爾すな…無禮をするな。○おれがもめ…おれが自拂した意。○馬鹿ひろぐ…ひろぐは、さらす、云ふ意。○まつこうする…先づ斯うする。

【譯】氣味惡くても折々の訪問もし、殺人をおれがやつたと人々にもいはれまい、覺られもせぬやうにと思つて、一倍横柄らしい、ぬからぬ顔付で、「河内屋の與兵衛です」といつて、つと入つて、「つい三十五日の逮夜になりましたなう、殺した奴もまだ知れず、お氣の毒千萬に存じます。だが追付け分りませう」といつて、我と我が口から、先方の吉相を述べた。七左衛門は卽ち尻をひつからげて、より棒をとり、「やい與兵衛、女房お吉をよく殺したな、汝は此處へ縛られに來たか、逃しはせぬ」といつて棒を振上げた。與兵衛「あゝ、七左衛門、無禮をすな、しておれが殺した其證據が何處にある。」七左「いふな〳〵　野崎參りの割前、十匁一分五厘といふ書付け　所々に血もついて、汝の手に間違はない。此外に何の證據がいるか、同行衆つかまへて下され」といつてつかみかゝらうとする勢である。與兵衛は頭の中で「しまつた　ばれた」と思ふと、胸の動悸がつき上つて來るのであるが、それをぢつと押へて苦笑ひし、「此廣い世間に、幾人も似たやうな手法が、ないものでもなからう。野崎參りの費用はおれが自拂ひした、割前も何も知らぬ。よい年をして馬鹿をぬかせ。汝等まで同樣に騷いで何をするのだ」。七左「まづ斯うするのだ」といつてつかみつく所を與兵衛はとつて投げ、寄りつかうとすると、蹴倒し蹈倒し、與兵衛にとつては一世一度の力の出し場である。與兵衛が棒をねぢとつて、一度振ると、一同はわつと逃げる。卽ち透をうかゞつて逃げようとすると、「それ逃すな」といつて皆が取まく。かうして小さい庭の内を追つたり追返したり、二三度四五度やつてゐる中に、與兵衛は透を見て、潛り戸をがらりとあけて逃げ出した。

門の前に兩三人「どつこい捕つた」と、胸がい攫んで捻すゆるは、檢非違使の別當大裡の廳の官人なり。跡に續いておち森右衛門聲をかけ、「最前より各表に立給ひ、家内の一々殘らず聞屆けられしぞ。必未練に陳ずるな。エ、是非も無やな。世間の風說、十人が九人をのれを名さず。聞度に此おちが心の中を推量せよ。事顯はれぬ先遠國へも落すか、さなくば自害をすゝめ、恥を隱しくれんと、新町曾根崎行さき〳〵を尋ねても、跡へ廻り跡へめぐり、出合ぬは己が運の極め。それ太兵衛其袷是へ〳〵。則五月四日の夜著し出たる己が袷。所々のきは付こはゞり。大裡の廳より御不審。只今證跡の實否、己が命生死二ッの界なるぞ。誰かある酒々』「あつ」と云よりちろり燗鍋、手ン手に引提げさら〳〵さつとこぼしかけ、かゝる甥持ち弟持ち心を碎く涙の色、酒しほ變じて朱の血潮。伯父甥顏を見合せて、「あつ」とより外詞なく、呆れ果たる計なり。

【註】○**胸がい**—胸ぐら。がいは交で、襟の左右から交つた所。○**檢非違使の別當**—檢非違使は京師の裁判及警察をにざつた役所、別當は其長官。非常に大裳裝にきこゆれど、つまりその方面の上役の意。町奉行などをさすのだ。○**大裡の廳**…檢非違使の唐名は大裡にて、其長官と大裡廳、共に略して大裡といふと。處が大裡の廳の官人といふのだから、與力同心などをさす。○**音はづきこはゞり**—きはがつく。物がしみこんで目立つて、硬くなつてゐる。こんなことを役所で調べないで、此場へもち出した處も感心しない。要するにお吉を殺した以後は如何にも蛇足である。○**ちろり**—燗をするかんびん、銚子の如きもの。第一卷の圖參照。○**かゝる朔**—斯ると、こぼしかゝるとをかく。○**酒しほ**—味をつける爲の酒。

【譯】門の前には二三人がゐて「どつこい、捕へた」といつて胸倉をつかんでねぢすえるのは、檢非違使の別當及び檢非違使廳の役人である。その後からつゞいて森右衛門は聲をかけ、「最前から皆樣は表に立つてゐて、家内にあつた事一々殘らず御聞きなされた、必ず未練なことを述べるな。ゑゝ是非もない、世間の風說では、十中九人まで、殺人の下手人はそちだといつて　名をさゝれる。それを聞く度に、伯父の心中がどんなか推量して見い。事件のばれぬ先に、先づ遠國へ落ちかくれさすか、さもなくば自害をすることをすゝめ、恥を隱してやらうと思つて、新町や曾根崎やの、行く先〳〵を尋ねて見ても、後を追かけ歩くことにばかりなつて、一向に出遇はれなかつた。だがさうして出合はぬのは、汝が運の最後だ。それ、太兵衛、その袷こつちへもつて來い。これは五月四日の夜、汝が着て出た袷で、所々際が立つてこはゞつてゐる。大裡の廳から御不審があり、只今證據のありなしをお調べになるが、こゝがおのれが命の生死どちらかに分れる堺だぞ。誰か酒をもつて來い」「あつ」といふなり、ちろりや燗鍋やを手ん手にさげて出て來て、酒をさらさらとこぼしかけると、かうした甥をもつた伯父や弟をもつた兄の心をいたましめる涙の色も變り、酒しほは赤い血潮となつた。伯父甥、卽ち森右と太兵衛の二人は顏を見合せて、「あつ」といふ外に詞を出すことも出來ず、呆れはてゝゐた。

與兵衛覺悟の大音上、「一生不孝放埒の我なれども、一紙半錢盜みといふ事終にせず。茶屋傾城屋の拂は、一年半年遲なはるも苦にならず。新銀一貫匁の手形借り一夜過れば親の難義、不孝の科物體なしと、思ふ計に眼付、人を殺せば人の歎き、人の難義といふことに、ふつゝと眼付かざりし。思へば二十年來の不孝無法の惡業が、魔王と成つて與兵衛が一心の眼を呟まし、お吉殿殺し金を取りしは河内屋與兵衛、仇も敵も一ツ悲願。南無阿彌陀佛」と、いはせもあへず取つて引敷、繩三寸に縛上ぐれば、早町中が駈付〳〵、すぐに引立引出す。果は千日千人聞き、萬人聞けば十萬人、殘る方なく世のかゞみ、傳へて君が長き世に、清からぬ名や殘すらん。

【註】○**ふつつと**—ちつとも。○**無法の惡業**—人生の事一切が業の結果とされ、惡業が魔になつて、人間に惡事をさせるといふのだ。○**仇も敵も一つ悲願**—仇も敵も同じ慈悲によつて救はせたまへ。悲願は慈悲の意。作者は此一言に、深い意をふくめてゐるのだ。○**繩三寸に縛る**—兩手を後手にとりて、頸筋の上から三寸の處まで手を引ぎり上げて縛る縛り方にて、本繩ともいふ。罪人を縛る本式の縛り方で、これならば逃亡の憂なく、重犯人に行はれるのである。○**千日**—千日の刑場にひかれて死刑に行はれた意にかく。○**十萬人**—十萬億土の意もひそめてゐる。

【譯】與兵衛は大聲をあげて、「一生の間不孝をなし、放埒に身をもつた自分ではあるが、紙一枚錢半文の盜といふことを遂にせず、茶屋や傾城屋への拂は一年半年をくれたとて一向に苦にせずゐた。それが新銀一貫匁の證文で二百目をかり、一夜を過ぎると、親の難儀になる、これは不孝の罪を重ねることになつて勿體ないと思ふことのみに目がついて、人を殺すと人の歎きであり、人に難儀をかけると思ふことに少しも目がつかなかつた。思ふて見ると二十年來の不孝と無法の惡因業が、魔になつてわが一心の眼をくらまし、おれはお吉殿を殺して金を取つた。仇にも敵にも一つ慈悲をかけさせたまへ南無阿彌陀佛」といひも終らぬ中に彼の手を引とつて、後ろ手に本繩に縛りあげると、はやくも町中の人々がかけつけ、すぐに引立て引出されて行つて、果は千日の刑場にて、死刑に處せら

れた。かくて千日たては千人きき、萬人がきけば十萬人にも傳はり、凡ての人の世の鑑として語り傳へられ、君が長き代に惡い名を殘すことであらう。

昭和九年六月十五日印刷
昭和九年六月廿五日發行

全譯近松淨瑠璃選
定價金參圓

□版權所有□

9. 5. 28

著作者　若月保治
發行者　照井健伍　東京市神田區南神保町九番地
印刷者　倉谷鎭夫　東京市芝區西應寺町六一番地
印刷所　兩友堂　森島印刷所　東京市芝區西應寺町六一番地

發行所　東京市神田區神保町二丁目七番地
太陽堂書店
振替東京三一七二五番
電話九段一九四四番

東洋大學教授
日本大學講師　文學士　若月保治先生著

詳註全譯近松傑作集

（好評嘖々）

菊版全三冊各冊六〇〇頁
定價　第一、第二、第三、各五圓　第一卷、四圓五十錢
送料各三十錢

第一卷、心中物……曾根崎心中○二枚綸草紙○重井筒○卯月の紅葉○卯月の潤色○心中刄は氷の朔日○今宮心中○心中天網島（紙治）心中宵庚申（八百屋）

第二卷、世話物（上）……大經師昔（おさん茂兵衛）五十年忌歌念佛（お夏清十郎）○野道奥作（重の井子別れ）夕霧阿波鳴渡（夕霧伊左衛門）薩摩歌（おまん源五郎兵衛）生玉心中○心中萬年草（心中物）

第三卷、世話物（下）……冥途の飛脚（梅忠）淀鯉出世瀧登（淀屋辰五郎）長町女腹切○壽の門松○節樞三重雛子○博多小女郎浪枕（毛剃）堀川波の鼓

近松は西鶴と共に近代日本文學の粹である。而も其羅解は之まで國文の研究者をしてすら近づくことを躊躇せしめた。即ち劇の研究者であり、關西に育ちて近松の語彙研究に少からぬ便宜を有し、而も閑を得て數年の間之に沒頭する機會を得た、隱れた篤學者たる著者は、此羅解の近松を羅解でなくして何人にも解し易からしめんことを企でた。敢むる所世話物の全部と時代物の中傑れたる數篇とを合して全三冊とした。一般愛好者にも最も便利なる指針たるべく原作の全文の外に各篇の解說と羅解語の極めて詳密なる註釋と、更に原文の全部に亘りて一文をも餘す所なく現代語の註釋的譯文を添へたものにて、未だ嘗て試みられたることなき破天荒の近松註釋書である。

世評の一部、都新聞批評　いよ〳〵第三卷が出來て此の書が全く完結した、堀川、淀鯉、梅忠、大腹切、搶の權三書の門松、毛剃、油地獄の八種が收められ、前卷と同じく、始めに本文、次に傍の註、次ぎに現代語の譯といふやうに列べ、篤實版の說明綸を加へてある、その註と譯とは簡明で親切で少しも衒氣がない、近松を解釋した著述では第一であるのみならず、近松以外の元祿文學を讀むにも參考とすべき良書である。

太政官飜譯（上・下合本）（索引付き）新裝版成る

日本西教史

新式九ポイント活字組
菊版特製全一冊
千二百餘頁索引廿四頁
定價八・五〇　送料四五

基督教の最初の渡來は足利の末葉であるが德川の政策に依つて我國に傳はる文獻は殆んどない。本書は佛人クラセ氏が一七一七年刊行したものゝ譯本であつて全然東西文化の交渉のなかつた當時外人の眼に日本國の人情風俗は如何に映じたかの觀察には少からず興味がある。また日本耶蘇教史としては勿論外人の見た信長や太閤等戰國時代の英雄の活躍振り德川代々の宗教對策其の他いろ〳〵な點に於て本書は最も貴重な且つ興味ある文獻である。

東京日日新聞、批評

日本西教史上卷（太政官飜譯）基督教の最初の渡來は足利の末葉であるが、德川の政策によつてわが國に傳はる文獻は殆どないといつてもいゝ、本書は明治初年太政官で、わが國に來た宣教師の通信及び書翰文書等を佛人クラセ氏が一七一七年刊行したものを、譯したものである。全然東西文化の交通のなかつた當時、外人の眼に日本國の人情風俗は如何に映じたかの觀察には少からぬ興味がある。また日本耶蘇教史としては勿論外人の見た信長、太閤等戰國時代を中心にした英雄の活躍振、宗教對策等にも見のがせぬものがある。

上卷には九州を中心として弘通された信者のうちに、既に殉教者も起きた頃迄を收めてゐる。

日本西教史下卷（太政官譯）歷史は行爲である日本は切支丹を屠殺したそれは日本の歷史に大きな跡を殘したしかし屠殺されに來たヨーロッパの切支丹にとつてもそれはまた大きな歷史上の事實であつた歷史はいつも盾の兩面から見ねば本當の事は分らない日本の太政官が「日本西教史」を一生懸命に飜譯した所以だこの文獻の日本宗教史上に占むる價値は永遠に盡きるものでない。得がたき珍書となつてゐた今日これが再版のわが學界思想界に與ふる寄與は登り知られぬものがある。

第2083

文學博士 桑木嚴翼先生著

訂正改版 哲學綱要

新四六版 五〇〇頁
定價二圓 送料十八錢

本書は前後の二編に分れ前篇に於ては哲學の概論を該博な著者の新らしき見解に依つて秩序的に說き簡明に組織したものである。後篇は現代の哲學と題し哲學界現時の諸問題、傾同等を論述して、いかにも論理整然、批判透徹、斷案明である。論述の方法また極めて簡明にして難解の點を見ず眞に類書中の白眉である。

目次の大略―【前編】哲學綱要○第一章哲學の由來○第二章哲學の概念○第三章哲學の構成○第四章哲學の問題○【後編】現代の哲學○一、現代の哲學○二、規範と規範學○三、歷史哲學の問題○四、自然哲學の哲學觀○五、哲學方法論斷片○六、倫理學說と實驗倫理學○七、矛盾之原理と哲學●附錄歐米哲學界の印象○節項は略す。

文學博士 佐々醒雪先生著

三訂 近世國文學史

菊判上製函入 三五〇頁
挿繪寫眞版 六十三個
定價三圓廿錢 送料廿三錢

博士が在世中各大學に於て近代文學を講ずること十餘年、本書は其蘊蓄を傾倒して成れるもの即ち京阪時代より江戸時代を經て、近世に至る詩歌、小說、戲曲は元より川柳、落語、俗謠の微に至るまで一々評隲して洩す所なく更に近代の文藝をも併叙せる著者の識見は、日本文學研究上眞に重要缺くべからざるものである。

目次の大略―●第一篇、近世前期（京阪時代）○第一章文敎興隆と漢學の勃興○第二章貞門の俳諧と和學○第三章談林派の俳諧○第四章西鶴の浮世草子假名草子○第五章松尾芭蕉と蕉風○第六章歌謠と歌舞伎○第七章近松門左衛門と淨瑠璃○第八章文字屋本○第九章古學復興と漢學者の國文●第二篇、近世後期（江戸時代）○第一章文運東漸と復古派の歌文○第二章本居宣長と古學○第三章雜俳―川柳○第四章狂歌狂文―蜀山人○第五章黃表紙附落語○第六章洒落本と淨瑠璃附歌謠○第七章俳諧の復興○第八章讀本と合卷―馬琴と種彥○第九章中本―一九、三馬、春水○第十章京傳○第十一章銀山陽と香川景樹●第三篇、現代文學概觀○一、明治初年の思想界と近世文藝の遺響、二、飜譯文學と新文藝の曙光○索引。

885
89
9124
W27

終